
姫の従者は魔王様！？

ろる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫の従者は魔王様！？

【Nコード】

N3170U

【作者名】

ろる

【あらすじ】

ある日、一国の王女である『姫』は、魔族の者によって連れ去られ。

魔王の手に落ち、魔王城に閉じ込められてしまった。

そして、無力で非力な姫は、唯唯、強き勇者が現れるのをじっと待っていた……

だが、真実は違った！！

姫は生まれ持った狂気な程の強力な武力で一人、成し遂げた『魔王城占拠！』

そして姫が願う野望は「自分より強い男と結婚する」と、何とも傍迷惑な夢。

姫は自分より弱い男と結婚したくないが為に、魔王城に立て籠もり、自分より強い男が現れるのを待つ計画だったのだ。

姫を助ける為に魔王城に集まる猛者達。

そして、その救出対象にボコボコにされて行く。勇者フルボッコファンタジー

第一話『新・魔王誕生! ?』(前書き)

この小説には変態などが多少登場しますが、作品にはなんら問題は御座いません、どうぞご安心してお読みください。

尚、誤字、脱字、誤変換などがありましたら感想の方でご指摘いただけるとう幸いです。

それ以外にも言葉の使いまわしについて間違っている所があれば是非教えてください。

前置きが長くなってしまいましたが、このように作者は悪ふざけが過ぎる所があります。程よく叩いてあげて下さい。確実に凹みます。

第一話『新・魔王誕生!?!』

第一話『新・魔王誕生!?!』

「魔王様、そのモンスターには水属性は効きませんよ」

「おお、そうであったか。なら封竜剣で行くか」

「流石は魔王様、それは妙案です」

「そうであろう！ 俺はセンスが良いからな」

ガハハハと大口を開け、携帯ゲーム機から顔を上げると、そこには、やや呆れ顔の姫が居た。

「あんた達、何をしてるの？」

心さえも凍らすほどの冷たい視線が俺達に当てられる。

そんなごみを見るような目で見なくても……

「ああ、これか？ これはな。

昔据え置きで出たゲームの携帯ゲーム機版の、新作ゲームの……」

最後まで言おうとしたが、姫が怒声でそれを遮られた。

「そんな事は聞いてないわよ!! なんてこんな所でゲームをして

るのよ！！！」

「えー、今ってお昼休みだから、自由にしてて良いって言ったのは
姫じゃん」

その言葉に姫は肩をプルプルと震わせていた。

「そんなことはどうだっていいのよ！！！！」

何で魔界トップとその補佐が仲良くゲームしてるのよ！！！！

他にやる事が有るでしょう！ 魔法の練習とか、私を倒す為に
策を練るとか。

てかそれより、何でそんなゲーム機があるのよ！！！！」

「だって、姫と戦ってもどうせボロボロにされるだけだし。

あと中ボスと小ボスとは小学校からの付き合いだし、仲良いのは
当たり前で。

それに中ボスには頭脳で負けて、小ボスには力で負けてるからな
…………。

ああ後、このゲームは先月から、ア。ゾンで予約しておいたんだ。
最近では『発売日に届かない』とか言われていて、やや心配して
いたが、

ちゃんと届いたぞ！！ 流石はアマ。ン」

姫は、はあ…………とため息を一つ吐き、俺達の近くに腰を落とした。

「前々から思ってたんだけど、あんた達って何で人間界にいるのに
悪さしないわけ？ 普通するでしょ、人間より強い種族に生まれた
んだから」

「魔王様はゲームが買い易いから人間界に来たみたいなものですか

ら、

「あつ、魔王様そこ、ピッケル使えますよ」

「あつ、そうかここでも採掘出来るのか……」

——別に俺だって魔界にア。ゾンが配達してくれば、人間界には来なかったぞ」

「お前だって、俺達魔族を利用して、ここに居るのだから、結果的には助かっているだろう」

「それはそうだけど、貴方達の方が力も上なのだから。」

普通、人間界を手に入れてやるぜー的な事をするんじゃないの？」

「どうせ人間界を恐怖に陥れても、勇者とか現れて、俺が殺されるだけだし。」

まあ平和に過ごしていてもこんな事が起きるのだから不思議だけだな。

あつ……中ボス、肉離れたわ、くれよ」

「あれほど装備品のチェックを促したのに、また忘れ物ですか……
そうですね、確かに歴代の魔王様は、皆。」

『世界を我が手に』を掲げ、人間との争いをしていましたか。

私たちの主である。

現・魔王様は、その様な事に囚^{とら}われる事無い、柔軟な発想をお持ち
ちのようですし」

「俺達の心配より、姫はどうなんだよ？ 現・国王の『娘』である、
お前が、身勝手な理由で城を離れていいのか？」

姫は一瞬顔を伏せ、短くため息を付くと、再び顔を上げた。

「お父様が決めた男と結婚するなんて嫌よ。」

私は、私より強い男性としか結婚する気は無いわ」

……この女より強い男は何処に居るのだろうか？

それに、魔王軍を一人で壊滅させるような女が、あの肥え太った国王から生まれるなど、誰が予想したか。

「それに、魔王城に居れば、各国から、魔王を倒すべく、沢山の猛者が集まるはずよ。」

それにお父様は、『娘を救い出した者にを婿に』と発表したわ」

確かに国王は、娘を助け出した者を婿にと発表しているが、この王は、その娘が魔王城を指揮しているのだと知っているのか？

「魔王城に勇者を集める為には魔王である、貴方に魔王ばく居て貰わなくては困るのよ。」

そんなゲームにかまけてもらっては困るのよ」

「ほうほう、本格的にお前が魔王に見えて来たな。おっやつと死んだか、お疲れ」

「これで魔王様の最強火事場装備が出来ますね」

「ああ、お前のおかげだ、感謝している」

「あんた達は、私の話を真面目に聞いているの？」

低く冷たい声が聞こえる、その声に俺達が顔を上げると、姫は満面の笑みを浮かべていた。

ピリピリと空気が歪むのを肌で感じる、本能が逃げると俺に言っているような気がする。

「……死ね」

姫がそう短く言うと、俺達の携帯ゲーム機が物凄い爆音と共に吹き飛んだ。

ああ……俺のプレイ時間五百時間……

「魔王様、私は千時間です」

中ボスが悲しそうにそう呟いて、イスから崩れ落ちた。

「ふん、私の話を真面目に聞かないからよ」

改めて、こいつが『最強』である事を実感した……
こんな奴なら世界征服も容易いかも知れない。

一週間前……

！？

凄まじい爆音と共に、また一つ、城の関門が破壊された音が耳に届く。

「今の音は何処からだ!？」

近くにいた中ボスに今の戦況を聞くと。

「はっ！ 第二ゲートも突破されました！ サキュバス部隊を迎撃に充てましたが、連絡は途絶。

上層部は全滅と判断し、第三ゲートを封鎖しましたが、突破されるのも時間の問題かと……」

クソッ！ 人間共め！ 我らをこの世界から根絶させようというのか！

明確な悪が無くなれば、次に起こるのは人間同士の争いだと言うのがまだ分からのか！！？？

「敵の規模はまだ把握できないのか！？」

「はい、敵の進行速度から竜騎士などの移動力ドラゴンナイトに長けた部隊だと、皆は予想していますが。

どう考えても、突破力が異常です。

こんな部隊が人間共にあるとは聞いていません！」

「聞いていなかろうと、現に存在しているだろうが！ 第三ゲートに残存部隊を全て終結させろ！ 私もすぐに向かう」

「はっ！ ご武運を『魔王』様」

魔王の一番の親友であり、頼れる部下である、中ボスが背中を見送る。

彼には私が倒れた後の、後任を任せてある、後の事は中ボスに任せおけがいい。

撤退も彼が指揮してくれるはずだ。

「第三ゲートまであとどれくらいだ？」

「このペースであと二分ほどです」

部下の中で一番、力に長けた小ボスが私と共に第三ゲートに待機している、部隊に合流に向かう。

と、その時。

！！！！

爆音と共に第三ゲートが崩れ落ちる音が耳を劈いた。

すぐさまゲートに到着したが、そこに有ったのは。瓦礫の山と今ある魔王城の全戦力と行っていいであろう部隊の山であった。

「ふん、遂に真打ち登場ってわけね。待ちくたびれたじゃない」

黒煙に包まれた向こうから、澄んだ声が聞こえる。

「魔王様！ お下がりでください、ここは私が時間を稼ぎます、その内に逃げてください」

「現・魔王である、この俺に逃げると言うのか！ お前たち有つての俺だぞ、王がお前達を守らなくてどうする！？」

「魔王あつての私達です！！ 王がいなければ私達は存在すら意味がありません！！」

「……分かった、だが死ぬな、これは命令だ！」

魔王はそれだけいい、小ボスを残し、全速力で中ボス達の、この事態を伝えに向かった。

「話は付いたかしら？」

「随分と余裕ですね？ まさか貴方だけでこれだけのモンスター^{部下達}を倒したというのですか？」

「そうだとしたら？」

黒煙が晴れ、そこから現れたのは赤髪の少女、まだ十五、六才と言ったところか、

幼げに見える少女の容姿には似つかわしくないほどの大きな鎌を腕に持っていた。

一人の人間、それも少女がこれだけの事をやってのけたと言うのか……

「貴方がそれだけの力を持っていたとすれば、どうやら私は生きて帰れそうにありませんねっ！」

小ボスはその言葉を最後に、単身、その少女に突撃を掛けた。

- - -
- - -
- - -

「ぎゃあああああああああ」

魔王の後ろから小ボスの叫び声が耳に届く。
その声に一瞬、足を止めるが、再び走り出す。

「あの小ボスがもうやられたと言うのか、予想以上の戦闘力らしいな——それにあの声、あの声は確か……、」

「魔王様!!」

その声にすぐさま足を止める。

「魔王様ご無事でしたか!!
悪いお知らせがあります。

上層部の方々が予備隊を引き連れ魔界へと撤退を開始しました。
私も止めはしましたが、彼らは、魔王様が王座から離れた時点で、『魔王様』の権限は無効になったと言い。制止を振り切り逃亡しました」

「所詮は人間界に金儲けに来た連中だ、放っておけ。それよりもだ、」

俺は先ほどの情報を中ボスに報告する。

「敵は一人と言う事ですか!？」

「ああ、おそらくそうだ。それ以外にも気になることがある。

俺の聞き違いだいいが、あの声は確か『現・国王』の……」

突如、後ろから届いた声によって話が遮られる。

「遂に追いつめたわよ、『魔王』様」

その声に俺達は振り向くと、まるで大量の返り血で染まったかのような赤色の髪に大きな鎌を持った、まるで死神のような少女が立っていた。

「貴方を倒せば、魔王はいなくなる」

「貴様！ 俺を倒せば、次に起きるのは人間同士の争いだぞ！！
分かっているのか！！！」

「ええ、分かっているわ、だから貴方には魔王を続けて貰うわ、ただし最高権力は貴方の物では無くなるわ」

その言葉に俺達は驚愕する。

俺に魔王を続けて貰う！？ どういう企みだ？ 何の意味がある？

「——では、その次期最高権力者とは誰だ？」

魔王の言葉に少女は不敵に笑い。

「——この私よ！！」

少女はそれだけ言うと、目にも止まらぬスピードで俺達の懐に入り、

中ボスの鳩尾^{みずおち}に鎌の柄頭を当てた。

その攻撃で中ボスは慣性の法則に従って後方に吹き飛んだ。

「中ボス!!!」

魔王は慌てて中ボスに近寄り、状態を見た。

どうやら意識を失っているだけで、死んではいないようだった。

「殺してはいないわ、私は有能な魔族^{モト}は殺さないわ、私が使えないと判断したら死んでもらうけど」

「では、他の部下達は何故殺した!?!」

「貴方の部下も殺してはいないわ。殺していたら貴方が味方にならないもの」

味方!?

この城の最高権力を手に入れて、それだけでは飽き足らず、部下や俺さえも手に入れようと言うのか!?

そんな事をして一体なにをしようと言うのか!?

「貴様の目的は何だ!」

「さっきも言ったでしょ、この城を貰うわ」

「この城だったらお前にくれてやる。だから部下だけでも解放しろ」

その言葉に少女は、困った顔を浮かべながら腕を組みをし、しばし考えた。

第二話『新・魔王城！？』

第二話『新・魔王城！？』

「あんたには『魔王』成分が足りないのよ」

姫が魔王に向かって指を指し、自信満々で足りない事を指摘する。

姫は、人に指を指してはいけないと教わらなかったのか？
でも俺は魔族だから人ではないけど……

「まず、その格好！ 何でジャージ姿なのよ！！」

「貴様！ いくら俺の主人だからと言ってもジャージの悪口は許さ
んぞ！」

その言葉に姫は一瞬怯むと

「何でそんなにもジャージに熱い思いがあるのか分からないけど、
この際ジャージの事はいいわ」

「だけど何でそんなにも仲間思いで心優しいのよ！」

「国民有つての王だ、下々の者を大切にしないで何が王か」

その言葉に中ボスや小ボスを含めて部下は、魔王に拍手を送り、
中には涙を流す者もいた。

「うっ、それはそうだけど。魔王って冷酷なものでしょ！ 何でそ

うまで歴代の魔王とずれがあるのよ!」

「まあ俺は俺だし、皆に優しくするのは良い事だろう」

「けどあんたは良い人過ぎるのよ。何で趣味が『お菓子作り』なのよ!

魔王の癖に、趣味が可愛すぎなのよ!! 少女がアンタはっ!!」

「いえ、姫様、魔王様にはお菓子作り以外にも、素晴らしい趣味があるのですよ」

今まで魔王の隣でじつと話を聞いていただけの中ボスが、突如、口を開き、言った。

「他について何よ」

「手芸もこの城のメイドの誰よりも得意です。

この私のスーツのボタンも魔王様が買ってくださった後に、自らボタンが取れないようにと、再び付け直してくれたのですよ。

最近では手作りアロマキャンドルを皆に配ったのですよ」

「だ・か・ら! それが可愛すぎるのよ!!!」

なんで私より女らしいのよ、『お菓子作り』や『アロマキャンドル』可愛過ぎるのよ。

そうね、いつそ『人間でキャンドル作り』くらいを趣味にしないさいよ!」

姫の言葉に魔王含め、部下全員が震えあがっていた。

「えー可愛くない」

「『えー可愛くない』じゃない！ その趣味をやめろとは言わないわ。

ただ、せめて魔王ぽい趣味を持ちなさい」

魔王ぽい趣味か…お裁縫も駄目、お菓子も駄目、キャンドル作りも駄目。

——うーん。

「——あんたが何を考えてるのかしれないけど、やってみたい趣味を挙げて見なさいよ。
私がそこから選ぶから」

じゃあ……。

「占い」

「女ぽい、却下」

「社交ダンス」

「Shall we ダンス？」

「詩」

「恥ずかしいポエムは黒歴史になるわよ」

「天体観測」

「見えないものは見えないわよ？」

「乗馬」

「えっ乗れないの？」

「いや、自力で飛べるから。——もしかして許可!？」

「……却下」

「アマチュア無線」

「無線機あるの!？」

「アフィリエイト」

「魔王の癖にお金に困ってるの!？」

「ストオオオオッ」

姫が急に叫ぶと、俺は既に他に三十個ほど浮かんでいた趣味を言うのを一旦止めた。

「あんた、態^{わざ}とやってるでしょ!! そうとしか思えないわ。いいえ、そうに決っているわ!」

「姫様、先ほど魔王様が仰られた趣味は全て、既に魔王様がやっている趣味ですよ。乗馬はまだ不出来ですが」

「はあ……」

姫はため息を付くと、もうどうでも良くなったのか、王座に腰掛けた。

「姫、それ俺の席」

「うるさい……」

「すいません」

凄みある姫の目に魔王はたじろいだ。

あの睨みなら、そこいらの不良ならすぐさま財布を差し出すほどだ。

「何でもこうまで、魔王が多趣味なのよ。いいえ多趣味なのはこの際どうでもいいわ。」

「だけど何故、何一つ、殺伐とした趣味が無いのよ!!」

「異議ありだ、株もやっているぞ。俺の力で、つい前日、貴様ら人間の会社を一つ、買占めてやったわ」

「…………。で、その会社はどんな会社なのよ」

「先月、。。。水産で食品衛生法に反してしまい。業務停止処分を受けてな。

株価が下がり、大幅なリストラが図られる事になってな。

元より、この問題は一部の経営陣が独自にやった問題であつて、下の者の責任ではない。

だから、そんな経営陣を替えるべく、俺が株を買占め、経営権を乗っ取った。ふはは怖かるう!」

「完全に慈善活動じゃない!! もうあんたが世界を仕切った方が
良い気がして来たわ」

「俺は人の上に立つような、立派な人間じゃない」

「現・魔王が何を言っているの!!!??」

「あーもうイライラする」

「三十才越えてから、妙にイライラする……はっ!? 更年期障害
か??」

「私はまだ十六よ!!!」

姫は床を足でドンドンと叩き、イライラを全身で表現していた。

「はあ、全く人間とは思議だな。直ぐに気持ち表に出して、
それを他者にぶつける。

明確な悪が無ければ、同じ種族同士で争いを始める」

魔王は「まったく」と言い、肩を竦め、首をふるふると振った。
「もう良いわ、あんたを変えるのは諦める。だけどその代り、他の
を変えるわ」

姫はそう言う、俺の部下たちに目線を映した。
姫に目線を合わせないようにと部下達が各々、明後日の方向を見
ていた。

「あんた達、全員モヒカンなんて良いんじゃない？」

その言葉に部下達は阿鼻叫喚を上げて、王室から我先にと、出て
行った。

「部下達をモヒカンにしてどうするつもりなんだ？」

「胸に七つの傷を持つ男くらい来るかと思って」

「——来ないと思う」

「あら、そう」

以外にもあっけなく姫は引いたな、と思い、不思議そうにしてい
ると。

姫は残っていた部下……と言っても残っているのは中ボスと魔王
だけだが。

その二人に向かって指を指し、言った。

「まあでも、あんたの部下とあんた、それにこの城には手を加えさ
せて貰うわよ」

「中ボス、来なさい」

続けざまに姫が言葉を放ち、そのままの勢いで姫は、中ボスを呼んだ。

中ボスは名指しされた瞬間、身体がビクツと震え。目は少し泳いでいた。

見るからに嫌そうな顔をしていたが、姫の呼び掛けを無視する訳にはいかず。

おそるおそる、姫に近付いた。

「……—お呼びですか、姫様」

「耳を貸しなさい」

その言葉に一抹の不安を抱えながら、渋々中ボスは姫に耳を貸した。

魔王には、姫が何を言っているかは聞き取れないが、内容を聞いて行くうちに中ボスの表情が変化する。

一瞬驚きの表情をしたと思ったら、次の瞬間にはす不敵な笑みに変わっていた。

「分かりました姫様、それなら三日ほどで可能かと」

中ボスの返答が気にいったのか、それとも三日でその『何か』が可能なのが嬉しいのかは俺には分からないが。

姫は嬉しそうにほくそ笑んでいた。

「魔王様、しばらく自室に居てください。」

ゲームの方はRPGを用意致しますので、それではらくじつと
していて下さい」

訳が分からないが、特に困る様な事ではないので二つ返事で答
えた。

魔王はその後、中ボスに追いやられるようにして、自室で小ボス
とゲームを共に進めていた。

- - - - -

「魔王様。中ボスと姫様は一体何を企んでいるのでしょうか？」

小ボスは魔王に質問を投げかけたが、その目は魔王の方ではなく、
テレビ画面の方に向いていた。

話し掛けている間。一瞬たりとも、小ボスは画面から目を離す事
は無かった。

「俺にも分かん。ただ、あれだけやる気になった中ボスの姿も珍
しい」

小ボスと同じく画面から目を離さず、コントローラーを握りなが
ら、魔王も答えた。

「それに何ですか、このけたたましい音は？ 城自体を、大改装し
てるって感じですけど」

三日前から、夜も止む事無く、工事の音が響いてくる。
腹に響くような重低音から、耳を劈くつんざような甲高い音などの色々な音が鼓膜を叩く。

魔王は工事の原因でこの三日間はまともに寝ていなかった。
騒音で、寝れないというより、近隣の皆さんから苦情が来ないか不安な為に寝付けない魔王だった。

そんな寝不足な魔王の耳に、ドアをノックする音が微かに届く。

「――失礼します。魔王様、大変長らくお待たせ致しました」

中ボスが勢いよく扉を開け、俺達の前に現れた。

「こんな狭い部屋に缶詰にしていまい、本当に申し訳ございません」
「ここ俺の部屋だけだな」

「あつ……、失礼致しました。それよりも、遂に『改装』の方が終わりましたのでどうぞこちらへ」

寝不足で頭の回らない魔王は何も考えず席を立った。

魔王と小ボスは、中ボスに連れられ、廊下を歩き。

その足で城の外へ一旦出た。

そして門から出て、振り返り、その目で『新・魔王城』を見た。

「……。これは何だ？」「……すごい!!」

「何と申されましても、見ての通り魔王城ですよ。」

私としてもやはり、このようなデザインに憧れて居たのですよ」

……俺達の前に現れた、『新・魔王城』はそれはそれは……

「うっう、怖い……」

魔王は半分涙目になっていた。

この城を歴代の魔王が見たら、きつとうつとりした表情をし、ため息が出るであろつ……。

絶ち込める雷雲。

凄まじいほどに禍々しい妖気。

門の端には不気味に佇むガーゴイルの置物。

それに負けないほどの、いやそれどころかすば貫け恐ろしい、魔王城本体。

皆だつて嫌だろ？ ある日、家に帰つてくると、自宅が『悪魔城ドラキュラ』みたいな外装になつてたら。

「魔王様？、一体、誰に話掛けてるのですか？」

「……………」

魔王は少し遠い目をしながら、今までの魔王城を懐かしんだ。だが、ふと我に返り、中ボスの方を見た。

「あの、中ボスさん」

「何ですか？ 魔王様」

「元に戻しては……」

「却下です」

うわっ！ すっげえ笑顔！

今まで長く中ボスと過して来たが、こんなに嬉しそうな中ボスを見るのは初めてかもしれない。

嫌な初体験だな……

「どう気にいった？」

魔王はその声の主の方に身体を向けた。

「どうもこうも、何故こんな城……なんだその手に持っている衣装は……？」

「衣装？ ああこれの事ね、もちろんあんたのよ。」

魔王であるあんたには、それ相応の格好をして貰わなくちゃ」

姫はそつと魔王に近付くと、手に持っていた衣装を広げて見せた。

嫌だ！ 俺はあんな悪趣味な衣装は着たくない！！

「どうよ、これ！ ドラキュラをイメージして（中ボスが）作ったのよ！！」

あんたの為に頭に付ける飾りも（中ボスが）作ったのよ。
角くらい無いと格好悪いと思つてね」

くそっ！ 中ボスに余計な物を作りおつてからに！！

それでも、“かがり縫い”が甘いではないか、これでは布端をほつれるではないかッ！！

と、的外れなツツコミを脳内でしている魔王だった。

結局、魔王はその後、姫と中ボス。更にはノリノリの小ボスによって、その衣装を（強制的に）着せられた。

- - -
- - -
- - -

「ココが魔王城か！！？？」

「……ああ、たぶんそうだ、住所もあっている」

「えっ！？ マジかよ！！ 国王が発行した魔王の特徴の紙には、こんな事書いてないぞ！」

「私、嫌よ！ お金が沢山貰えるって聞いたから貴方達について来たけど。」

「こんな城に住んでいる魔王なんかには勝てるはず無いわ！！」

「俺もパス。確かに姫を助けたら、姫と結婚して、王様になれるかもしれないが。死んでちゃ意味がねえ。」

「俺は帰らせて貰うぜ。報酬分くらいは働いたぜえ！ お釣りが来るくらいだ！」

「怖気づいたか貴様ら！ 特にその“弓に両手剣”持ちという、意味不明な男！！」

「貴様は、ただ飯食らって、此処まで来ただけだろうに！」

魔王城の門扉もんびの前で言い争い始める勇者達。

そんな、勇者達の耳に下品なほどの大笑いが聞こえ、争いが一旦止んだ。

《ガハハハハ、よくぞ来た。勇者達よ》

突如、聞こえて来た声に魔王城の扉の前に居た勇者達は驚いた。
門の前に備え付けてあるガーゴイルを模したスピーカから声が発せられる。

《この城に来たからには貴様ら生きては帰れぬぞ。……………???

《中ボス。これ何て読むの?》

《それは『ミナゴロシ』ですよ。魔王様》

《えっ俺殺すの?》

《形だけで良いから読みなさいよ!!》
ベシッ

《いててて。えー、……………ゴボン。》

この魔王城に来たからには貴様らは生きては帰れぬぞ。
塵みじんにして
くれるわ》

ところ変わって魔王城、放送室。

「……………ふう。おし、これで満足だろうっ姫? ではお客様が来たわけだし。お茶の準備してくるよ。

あっ…………でもお茶受け無いな。ちょっと待ってて、クッキー焼く

よ」

魔王はマイクから口を離し、席から立ち上がろうとしていたら、
姫は再び口を開いた。

「あんた……自分を殺しに来る相手にお茶出してどうすんのよ……」

えっ……まさか勇者達って俺狙いなのか？ 俺何か悪い事したっ
け……??

「すっかり失念してるようだから言うけど、私はあんたの人質なの
よ」

「いつ、要らない!!!!!!」

「要らないって何よ！ 失礼ね！」

俺達がそんなやり取りをしていると中ボスが少しオロオロした様
子をして、こちらをチラチラと見ていた。

「どうした中ボス」

「あのく大変申し上げ難いのですが……。——マイク入ってます」

「く!? くら」

ガチャガチャガチャ

ブチッ

『……………』

「……あーその。なんだ、魔王の特徴ってなんだっけ？」

「常にジャージ姿で、趣味はお菓子作り。

毎週火曜日の十二時頃に近所の方と井戸端会議に参加してる事もあります」

「それ以外にも、地域清掃も欠かす事無く参加しています。現在は町内の会長をやっておられます」

「その『近所の方』と言うのは魔族なのか？」

「……人間です」

「「あー」」

「何だか解らないけど、もういいや。俺も帰る」

「そうですね帰りますか」

「「賛成」」

こうして、勇者御一行は、魔王城から去って行った。

そして、一人寂しくテーブルに座る魔王。

「勇者達御一行、遅いな。クッキー冷めちゃったよ、………」
「もぐもぐっ、ぱく、んぐっ………美味しい」

第二話『新・魔王城! ?』(後書き)

……うつうつ。相変わらず行き当たりばったりな書き方。タイトルなんて毎回適当に考えてるだけに、もう少しまともなのがいっぱい変えたい!

だが今現在思っている事は「あ? タイトル? いらねえんじゃねえ?」と心の中で悪魔が……

第三話『新・キャラ登場!?!』

第三話『新・キャラ登場!?!』

「突然だがッ！ 今日から俺の妹が来る」

勢い良く扉を開けると、王室には姫と中ボスが居て、姫の手にはゲームのコントローラーが握られていた。

俺の言葉に姫はゲームから少しだけ顔を上げただけで、すぐにまたゲームに向き直った。

「おい、無視するな」

姫はめんどくさそうに、ゲームの電源を切ると俺の方を向いた。

「よし、それでいい」

「で、何よ？ あんたの妹が来る？ 早速、新キャラ登場？」

「そう、妹が俺に態々会いに来てくれるのだよ!!!!!!」

「あーそうなの……」

姫はつまらなそうな顔をし、お菓子を手に取り、それを口に放り込んだ。

「——んで、それがどうかしたの？」

「どうかしたのって……」

「だってあんたの妹でしょ？ どうせ変人なんでしょ？」

「ああ、俺に負けず劣らずの変人だ。昔は良い子だったんだけどな。『大きくなったら、おにいのお嫁さんになってあげる』と言っていたくらいだ」

「ふーん、それは別にどうでもいいけど、その妹さんはいつ来るの？」

ガシャン

突如、後ろから何かを割る音が聞こえた来た。

その音に後ろを振り向くと、どうやら紅茶とお菓子を持って来た中ボスがトレイを落としたようだった。

「姫様……今何と？」

姫は中ボスの言葉に疑問を抱きつつも、質問に答えた

「『それは別にどうでもいいけど』」

「その後です！」

困惑する姫だったか、渋々もう一度、はっきりと言った。

「?? 『妹さんはいつ来るの?』」

「そう！ それです！ 魔王様の妹君いもつとこきみが来るのですか!??」
「今日」

ガクッ

中ボスは膝を付き、その顔は絶望に染まっていた。
更に中ボスは、うわ言のように

「妹君が来る……魔王様の妹君が来る……イモントギミ、」とぶつぶつと呟いていた。

そんな中ボスに対し、姫は「何あれ？」と指を指していた。

「ああ、中ボスはどうやら妹が苦手みたいでな、妹が来る前にはいつもは有給を取っているんだ」

「あんたの職場って結構、融通利くのね」

そんなやり取りをしていると、魔王城に設置されている、ドアホーンが鳴った。

「おつ、来たようだな」と魔王のその言葉に、中ボスは「ヒイイイ！」と言い、ドアを勢い良く開け放ち飛び出した。

その直後「ギヤアアア」と再び悲鳴が聞こえたが、その声は徐々に遠のいた。

「おにい、来てあげたわよ」

そして中ボスと入れ違いに妹が入って来た。

「ねえ中ボスはどうしちゃったの？　なんか私の顔を見て、突然逃げ出したわよ、失礼しちゃうわまったく」

「貴方が妹ちゃんね、魔王がこんなのだから、てつきり変な人が来るかと思つたら、随分可愛いお嬢さんじゃない」

珍しく姫が好意的に妹に話しかけた。

「おにい、何この喪女もじょは？」

「ああ、それはお前にも話していた、姫だ、仲良くしろよ」

「へーこのおばさんが『姫』ねえ……」

ピキッ

あれ？　なんか変な音がしたぞ？

「おにいから話は聞いていたけど、何あんだ？　男選びの為に態々魔王城乗っ取つたらしいじゃない。

傍迷惑なお姫様ね、……馬鹿じゃないの？」

ピキッピキッ

あれ？　ひび割れかな？　最近魔王城は修繕したばかりだから壁には異常は無いと思うけど……

「『なまもの』にしか興味の無い、『ヘテロ』なんかには私の高貴なる趣味は理解できないだろうけど、初めに言っておくわよ喪女」

「私は ボーイズラブ BL 大好きよ！！」

「へっ？」

「妹よ、まだ小ボス×中ボスのCPカップリングは諦めて居ないのか？」

困惑する姫を横目に俺達は話を続ける。

「はあ……おにいは何度言えば分かるの、中ボス×小ボスよ、順序は間違えないで、あと正確には『中ボス鬼畜攻めの小ボス健気受け』よ」

「ほう、そうであつたか、昔聞いた時のCPは『中ボスノンケ攻めの小ボス受け』と言っていたはずだが？」

妹は人差し指を一つ立て、それを左右にゆつくりと振りながら

「ふふふ、乙女は日々進化するのよ」

「シーピー？ ナマモノ？ ヘテロ？ ビーエル？」

「姫様、おわかり戴けましたか……あれが魔王様の妹君です……」

いつの間にやら戻って来た中ボスが戻ってきていた。

「あんたいつの間に！」

「姫様！ もう少し声のボリュームを絞って下さい！」

慌てた様子で中ボスが姫の口をふさぐ。

「まあとにかく、私が魔王様の妹君を苦手とする訳がおわかり戴けましたか？」

「ええ、大体分かったわ、生意気小娘の上に、毒電波に当てられているようね」

「はい、その様な感じです、更に魔王様の妹君は魔族一の魔力の持

ち主です」

その言葉に姫は目を見開いた。

「えっ！ あの子そんなに強いのか？」

中ボスは「はい、それはもう」と言い詳しく説明した。

「実は言うと、魔王様の妹君は実際には魔王様とは血がつながっては居りません、妹君は元魔王の娘であり、完全なる魔王の血族です。色濃く受け継がれたその血は、生まれながらにして強大な魔力を妹君に与えております。」

その魔力は魔族一と言われております、ですが魔王は男しか成れない故に、今こうして魔王様が魔王をやっておられるのです」

「魔王の血族……あの子と私、どっちが強いのか？」

中ボスは姫から少し目を逸らし、意をけしたように姫に「おそらく妹君の方が魔力は上かと」と言った。

「あの子の方が私より強いと言うのか？」

困惑する姫に中ボスは慌てて補足した。

「ですが、姫様の方が沢山の場数を踏まれてるので、その場馴れがどう戦闘に影響するかは未知数で……」

中ボスはいくつも言ったが、本当は私にだって薄々気が付いていた……あの子は確かに強い。

まともにやりあつたらまず勝てないわ……それほど強い魔力をあ

の子から感じる……

「鬼畜。鏡やった？」

「当然ですわ、Rの方もやりましたのよ。小説も中々のできでしてよ」

「それよりも、中ボスと小ボスはまだ来ないの？ 私が来ているのに挨拶も無しなの？」

「ああ、小ボスならまで寝てるはずだ。中ボスはお前の後ろで姫と話をしてるぞ」

魔王のその言葉に妹はゆっくりと後ろを向いた。

「あつ！ 魔王様なんでそれを言うのですか！」

「じゅるっ……中ボス……はっけーん！」

その後、中ボスは小ボスと共に同人誌のモデルをやらされた。

「マオウサマのイモウトギミキタ。ショウボスト イツシヨニ
モデル ヲ ヤラサレタ

マオ ウマ」

その後、妹と中ボスは、共に小ボスの部屋に行き、俺と姫は。。
無双をプレイしていた。

「お腹減ったわ、何か取って来なさい」

「……はい」

中ボスが居ないので、代わりに取って来て貰うという選択肢も無い為に、渋々自ら食堂に向かおうと思い、扉を開いた。

廊下を歩くと、しばらくして、中ボスがトボトボと歩く姿が見えたので声を掛けた。

「おっ、中ボス！ 妹が迷惑掛けたな」

「――あ、魔王様」

（うわッ！ 生気がまったくない）

「あはは……いえ迷惑なんて全然。ただ上半身裸で小ボスと一緒にポーズ取るだけの簡単な仕事ですよ、ははは……」

乾いた笑いが廊下に空しく響き、中ボスの悲しさを余計に引き立たせる。

そんな悲しい声をかき消すように元気な声が廊下に響いた。

「魔王様、中ボス」妹から解放されたのであろう、小ボスが廊下の端から走って来た。

「おお、小ボスよ、やっと終わったのか？」

「ええ、妹ちゃんには新作のRPGゲームを買ってもらったので魔王様と一緒にやろうかと」

「ほほ、妹からご褒美が出たか、アイツは飴と鞭を心得てるな」

ん？ 小ボスがゲームを買ってもらったと言う事は、中ボスも何か貰ったはずだな。

魔王はそう思い中ボスに何を貰ったのか聞いた。

中ボスは複雑そうな顔を見ると、服のポケットに手をつ込み、ポケットの中から箱を取り出し、それを開いた。

「メガネ……」
『何に使えと!?!』

第三話『新・キャラ登場!?』(後書き)

正直、この『妹』を出すから、BL注意的な事を書こうかと悩みましたけど、これくらいならいいかと樂觀視しましたが。皆さんがあまりにも気分を害する様であれば、BL注意って付けときます…

第四話『不幸の手紙！？』（前書き）

なるべくタイトルの前に『新』って付けようと最初思ってたけど、今回何も浮かばなかっただけにあえなく断念。

正直この前の話に関しては事前にある程度形は整えてあったので、ちよっと見直して出すだけだったのですが、この四話目に関しては今日、大急ぎで書いた次第です……はい。

あと、他の作者様の作品は嗜む程度ですが、御拝読させて戴いているのですが、私の作品と比べると、一つ一つの区切りが大変短いので読みやすいです。ですが、私はまだまだ未熟な所為か、何処で切ればいいのか？ 分からないと言った状態です……正直、あまりに長くなってしまうと、読み難いのでは？ と思って今が、今現在の自分自身の技量と話合った結果、不可能の三文字が脳内会議で決定致しました。

第四話『不幸の手紙！？』

第四話『不幸の手紙！？』

バタバタバタバタ

俺、魔王は今、猛烈にピンチであった。

この緊急事態をいち早く皆に伝えなければ。

俺はそう思い廊下を走っていた。

バーン

「皆！ 聞いてくれ！ 俺『不幸』になる！」

……………。

「「はあ？」」

魔王の言葉に姫や小ボスは訝しげな顔を向けた。中ボスはどうやら買い物に行っているようだ。

「まあ大体、想像付くけど、何が起きたのよ？」

どうやら、まだ皆には『不幸』は訪れていないようだ……良かった。

そう思い、魔王は席に付いた。

「この城って、何人いるんだ？」

「えーっと。魔王様合わせて、九名です」

「足りない！ あと一人足りない！」

「一人足りないってどういう事よ？ あんたまずは落ち着きなさいよ。はい深呼吸」

姫に諭され、大きく息を吸って、ゆっくり吐いた……幾分かマシになったような気がする。

「で、落ち着いた？」

「ああ、大丈夫だ」

魔王は再び二人に向き直り、先ほど起きた事を伝えた。

かくかく、しかじか。

「あー、なに。不幸の手紙？ それって。○○人にこの手紙を送らなければ不幸になる的な？」

この女！ 何故内容を知ってる！？ まさか姫にもこの手紙が既
に届いた事が！？

「まさかお前……」

「そう言えば昔流行ったわね」

！？ クツ、思っていた以上に、不幸の手紙による犠牲が多い。
この負の連鎖はなんとしてもここで食い止めねば……！

「決めた」

「すごい、苦渋の決断。みたいな顔してるけど、そんな覚悟いらな
いわよ」

「貴様、この俺に十人もの人々を不幸に落としいれろと言うのか！

「！」

「魔王様、別に不幸の手紙って特に何も起きませんよ？ 所詮は迷信ですよ」

「なん……だと？」

「では、俺が朝、ベットから起きた時に足を攣ったのは？」

「——ただ、ミネラルが不足気味なだけだと思います」

ミネラル不足だと！ 確かに最近ばかりカロリーメ。トばかり食べているからな……偏り過ぎだか？

「では、エロゲのキャラが攻略出来ずに、毎回バットエンドなのは？」

「それはただの選択ミスだと思います」

俺は一度攻略してからじゃないと攻略参考ページは見ない！ C
G回収のためにやるのは別ね！

「では、体重が増えたのは？」

「単に、自堕落な生活のせいです」

「では……」

そこで聴き絶えなくなったのか姫は勢いよく席を立ち、呆れながら言った。

「不幸の手紙？ ふつ、魔王が不幸の手紙如きで騒がないでよ。そんなもので不幸になるだったら、戦争の相手に送りつけられで勝ちじゃない」

「そうか！ この手紙は国王軍の策略だったのか！ くっ、何て姑息な手を……」

姫が魔王を平手で叩くと、スパーンと乾いた音が響いた。

「アンタ馬鹿じゃないの！ どうやって理解すればそんな奇想天外きそつてんがいな解釈になるのよ！」

「だって『戦争相手に送りつければ勝てる』と言ったのは貴様であるっ？」

「——はあ」

……なな、なんだ、あの冷めた目線は？ 俺何か悪いことしたか？

——だけど、ゴミを見るような蔑んだ目…… ドキドキしちゃう！

「うっ…… まあ…… あれだ。手紙の内容はこの際どうでもいい、だが、これを誰が送ったのだ？」

小ボスが突如、嬉しそうに「そう言えば魔王様」そう言いながら懐に手をやり、一枚の手紙を出した。

「実は、僕の所にも手紙が届いたのですよ」

うつっ、不幸の手紙のはずなのに、何故か笑顔！ その笑顔が眩しい……

俺は姫の方にも視線を向けると、同じように手紙を机に置き「私

もよ」「つまらなそうに呟いた。

これはどういう事だ？ 既に身近な人に手紙が届いている……

「それにしても誰がこんな子供じみた悪戯したのかしら？」

机の上に集まって三枚の手紙を見つめながら姫が言つと、小ボスはおもむろに手紙を持つと

「誰が送つたんでしょうね……住所とか書いてあればいいのですが……、」

そう言い、小ボスが手紙を裏返すと。

「あつ、書いてある」

「えっ？ まさかさっき見たけどそんな物書いて……あるわ……」

「何よ、ちゃんと確認しなさいよ」

「ごめんごめん、不幸になると言う内容だけで頭いっぱい、でもお前らだって気が付かなかったんだろ？」

「私はどうせ、あんたの悪戯だろうと思って持ってただけよ」

「でも、魔王様。この住所、魔界からですよ」

小ボスに渡された手紙には確かに、魔界の特有の住所が書かれていた。

「何よ、もしかしてあんたの故郷からの手紙？ でも魔界からの不幸の手紙って本当に効果ありそうね……」

「うーん、住所自体は確かに見覚えがあるな。何処だったけ？」

「ちょっと貸して下さい」

「ほい」

俺は中ボスに手紙を渡すと、中ボスは少し考えると

「あっこれは魔王様の『パパ上』様の住所ですよ」

「そうか、パパ上か……って！　中ボス！？　いきなり現れるなよ！」

買い物袋を片手に持つ中ボスは、いやに家庭的な雰囲気醸し出していた。

「さっき戻って来たんですよ、帰ってきたら皆様が妙な顔つきで手紙を見てたので気になって近付いて見たんですよ」

そう言い、中ボスは「さっきポストに私宛で、もう一通」と言い、もう一枚不幸の手紙を机に置いた。

「それにしても何でポストが別々ななの？　集合住宅じゃあるまいし」

「ああ、それはですね、魔王様が『プライベートは大切だ』と言い、設置したのですが。」

本当は魔王様が頼んだアニメキャラの抱き枕カバーを小ボスによって開封されて、公開恥辱を受けたからですよ」

「ちょ！　違うよ！　姫！　違うから！

あれは俺が……その、友達！　そう友達に頼まれて俺がアマ○ンで代わりに頼んでやっただけだって！」

必死に弁解するも、姫からの冷ややかな視線が突き刺さる。
我ながら中学生の男の子みたいな言い訳だと思う。

「魔王様、中ボスと僕以外に友達居たんですね！」

純粹に喜んでくれているのか、それとも全て分かった上での嫌味なのか、真意の程は分からないが、今は小ボスの言葉が、唯唯痛い……

「ふーん、友達ねえ。まあいいけど、あんたの部屋って抱き枕何て置いてあったっけ？」

「ああ、その事が、カバーは丁寧に畳んでしまっておりぞ」

「??　抱き枕なんだから抱いたりするんじゃないの？」

「はは、ん、甘いな貴様！」

魔王の言葉に「何がよ？」と訝しげな返答をする姫。

「真の抱き枕ラーは、抱き枕カバー単体で使うのだよ！」

「どうやって？」

「カバーの中に自ら入るのだよ……！」

バアアアン！　決った……と言わんばかりに、椅子の上に立ち、ポーズをとる魔王。

今ならオラオラ言うスタンドも使えそうだった。

「はあ？」 呆れた声を出す姫、まあ驚くのも無理は無い、これは抱き枕道を窮めた者にしか分からぬ神意。

「まあやり方は至って簡単だ、まず抱き枕カバーを持つ」
「そして……」

そして？

「そして入る！」

入る！？

皆が混乱に至る中、悠然と説明を続ける。

「カバーの中に入り、そして悟る……『俺が嫁』と！」

俺が嫁！？

ああ……聞こえる……神が「よくぞ気が付いた」と言っている……
……気がする。

「でも、魔王様、今の言葉で、抱き枕カバーは自分の為を買った物
だと言っはくじつるのが白日の下に
晒されましたよ」

仕舞った！ 見事誘導尋問に引っ掛かってしまった！

「はあ……まあいいわ随分話が脱線しちゃったわね」

何故か皆が俺から視線を外している。

いや、わざと逸らされている！？　まさかこれが『哀れみ』と言うものか！？

「それにしても魔王の『パパ上』とやらからの手紙なんですよ？
何で私にまで届くの？　と言うのはこの際放っておいて。
どうして貴方の父上がそんなものを？」

「姫様、パパ上としつかり呼んだ方が身のためですよ。
あの方は『パパ』か『パパ上』と言う呼び名以外で呼ぶと泣きま
す」

「泣くの！？」

うつ……自分の父親ながら恥ずかしい……

「すいません、不出来なパパ上が迷惑を掛けます……」

「じゃあ、そのパパが何でこんな悪戯を？」

「お前がパパって言うと、水商売の姉ちゃんみたいだな」

「……、そうね。それに関しては私が悪かったわ。今度からはパパ
上様に統一するわ」

「そうですね、姫ちゃんもなるべくその呼び名で呼ぶようにしたほ
うがいいよ。」

パパ上様、一回泣くと機嫌直すの大変だから」

「分かったわ、なるべくこの呼び名で呼べるように癖を付けるわ。
あと気になっている事が一つあるんだけど」

「なんだ気になってる事って？」

「パパ上様はあんたの父親なのよね？」

魔王は黙って頷くと、姫が更に言った。

「じゃあ元・魔王なの？」

「ああ、正確にはパパ上は『元祖・魔王』だ」

姫は「へーそれで」と言い、更に言葉を待っているようなので続けた。

「お前が聞いた事のある様な有名RPGに出てくる魔王は、あれは俺の親父だ」

啞然、そんな言葉がまるで顔に書いてあるかの様な表情である。

「お前にはこの気持ちが分かるか？ 好きなRPGの世界間に感情移入したくても、最後に出てくるのは大体自分の親父なんだぞ」

「考え方によつてはすごく斬新なゲームよね」

「弱い親父から、クリアー不可レベルな程、強い親父、それ全部親父」

「授業参観で友達に」

『おい見てみるよ、あそこの人、D。SATの人。羅に凄い似てないか』

『本当だ、似てる、似てる』

「こんな事を後ろの席から聞こえて来るんだぞ！ だが俺はそれに対してガツンと言ってやったんだよ！！」

「何て思ってたの？」

「どちらかと言うばデビ。サマナーのキヨ。ジだ！」

「……………、全然言ってる事が分からないけど、あんたも相当の馬鹿だと言っただけは伝わったわ」

「そうですね、魔王様が楽しみにしているゲームが延期した時、大体はパパ上様が機嫌悪いのが原因所で、その所為で遅延を招いていますもんね」

「小ボスの言う通りですね、RPGの延期の原因はパパ上様です」

「嫌だな、その原因」

姫は、本当に、心底嫌そうな表情を浮かべ

「とりあえず、その手紙を書いたのはパパ上様で、それに対して何らかのアクションをしなければ、RPGの発売日は延期され、如いては全てのRPGファンを『不幸』にさせる事になってしまう訳ね？」

「それなら俺に考えがあるぞ」

魔王は皆にその案を伝えたと

「それは妙案ですね」

「そうね、これ以上ないほどの上策ね」

「すごいです！ 流石は魔王様」

皆の喝采を浴びる中、俺は一つの手紙をパパ上宛てに書いた。

「ん？ やったあ魔王君からパパに返事が届いてる！

パパ感激だな」魔王君が僕に手紙を書いてくれるなんて小学校以

来じゃないかな？」

「えー何々？」

拝啓 はいけい 時下ますます御健勝のこととお喜び申し上げます。ごけんしょう

さて、弊社ではかねてから魔王城立て直しを計画しておりましたが、度重なる不況の波を受け。資金繰りに苦労しておりましたが、このたびパパ上様の資金援助のおかげで、工場開設の運びとなりました。無事、立て直しが完了した暁には当地方の人間界派遣魔王軍が微力ではございますが、人間界魔界化計画のお役に立てれば幸いです。

つきましては工事の費用に關しての話ですが、現在、『パパ上様』から提示していただくはずの金額に届いてない為に、工事の方が、著しく滞っております。

弊社と致しましても金銭的に余裕があるわけではないので、一日も早くご入金して頂けないでしょうか。

催促する形になってしまった事を、ここに深くお詫び申し上げます。弊社計画に一層の御理解を賜りますよう、今回計画についてご説明申し上げます。何卒弊社の意のあるところをおくみ取りの上、御出席賜りますようお願い申し上げます。

略式ながら書中にてご案内申し上げます。

敬具

記

添付書類 請求書 1通

以上

請求金額 一千万PP

「…………ぐすん…………銀行行くか」

この後、人気シリーズのRPGは延期されてしまったが、予約するのを忘れていて困っていた魔王には特に悪影響は無かった。

第四話『不幸の手紙!？』（後書き）

最後の方の失速感が自分でも酷いと考えています…… 今後はもう少し、熟考し、皆さんに喜んで頂ける様な作品を出せるようにしたいです。

元々ショートストーリーですので、話の進行速度自体はあまり早くないかもしれませんが、なので思っているよりもグダグダに長編化してしまうのでは？ と自分思っています。

長編化した場合、自分の技量が後半から上がっているといいのですか……

第五話『魔王様の給料は。。。制！？』パート？（前書き）

なんか気ままに書きこんでたらいつの間にやら、いつもの二倍ほどの量になっていたので都合により二つに分けました……ごめんなさい。

第五話『魔王様の給料は。。。制！？』パート？

第五話『魔王様の給料は。。。制！？』パート？

「我々は一人の英雄を失った。

しかし！ これは敗北を意味するのか！？

否！ 始まりなのだ！」

壇上^{だんじょう}に立つ魔王の前には、その数二千ほどの魔族が集結していた。
その雄々しく逞^{たくま}しい叫びは、魔王城を震わせた。

もちろん、このような集会を開く事は、近隣の方々には了承済みである。

「私の親友！ 諸君らが愛してくれた中ボスは死んだっ！ 何故だっ！！」

「あの〜死んでません……」

「しっ！ 今良い所なの！」

魔王は脇に立っている中ボスを追い払うと、演説を続けた。

「この悲しみも怒りも忘れてはならない！ それを中ボスは死をもつて我らに示してくれたのだ！」

「我々は今この怒りを結集し、国王軍に叩きつけて初めて真の勝利を得ることが出来る！」

「この勝利こそ戦死者全ての最大の慰めとなる！
国民よ！ 立て！ 悲しみを怒りに変えて！ 立てよ国民！！」

「魔王は諸君等の力を欲しているのだ！ ジイイイーク！ マ
オウ！！」

（皆でジイイークマオウッ！ の連呼）

……。

「何してるの？ あんた達は？」

横から姫が冷やかな目線を送りつつ質問を投げかけて来た。

「今からコミケに突入するので、我が軍の兵士を鼓舞し——」

「——黙りなさい、ブチ殺しますよ」

「ヒイ！ すいませんでした……」

認めたくないものだな、若さ故の過ちというものを……

二千の魔族の前で人間の女性に土下座する現・魔王。

魔王自身の演説により上がった土気も、今や、先ほどの土下座で
どん底状態である。

「騒がしいから来てみれば、何？ 朝から演説？ しかも目的は私利私欲の為ですって？」

「いや、コミケは大事な行事であり、これに赴く事は既に苦行。各ブースを回る事は言わば行脚あんぎゃ、重要な——」

「あんたがそんな事の為に徴集する魔族達にいくらの金が掛かると思っているのよ！」

「これはお金の問題では——」

「お金はね命より重いのだ！」

ざわ……ざわ……

「あのー、姫様。そのネタはそろそろ自重するべきかと」

「あら、そう」

中ボスの言葉に姫はつまらなそうに肩を竦めた。

「てな訳で、皆、このバカの為に態々来てもらったところ悪いけど、解散してもらえる？」

《はい》

姫の言葉に魔族達は各々帰って行った。

姫は一言「中ボス」と言い、中ボスは近くに呼んだ。

「今回の徴収に掛かった費用はどれくらい？」

中ボスは何処からか、電卓を取り出した。

計算は即座に終わり「およそ、これくらいかと」と言い、姫に電卓を渡した。

「ふん、魔王、あんたの給料はとりあえず、三十年ほど無しになっ
たわ」

姫の言葉を聞き、驚いた魔王は即座に姫の持っていた電卓を奪った。

「三十年だっ！ 馬鹿な、俺の賃金がこんなに安いはずが……、」

姫から奪い取った電卓に映し出されている金額は……

「二万六千円？」

えーっと俺が呼んだ魔族達が二千……必要経費はほとんどが電車
か、一人百三十円？

……山。線の初乗り料金並みなのか、アイツら意外に近いな……
じゃなくて！

俺の賃金安ッ！ 年収八五〇円ほど！！」

意外！ それは年収ッ！！

魔王の言葉に姫含め中ボスすら、顔を赤くして笑いをこらえていた。

「ねえねえ、これなんかの間違いだよな？　せめて時給だよな？　もうこの際多くは求めないから、後生だから時給と言つて……」

姫は顔を下に向けて、必死に笑いをこらえていたが。
魔王が回り込み、顔を覗き込むと、笑いをこらい切れなくなったのか。遂に大声を上げて笑いはじめた。

「あははは、あんたホントに馬鹿ね、仮にも魔王よ？
そんなに安いはずがないじゃない、時給九百円くらい貰ってるはずよ」

「姫様、そんなに笑つては魔王様が傷ついてしまいますよ」

「中ボス、あんただって、顔、ニヤけてるわよ」

「おっと、これは失敬。魔王様、安心してください、二十時以降からは時給九五〇円になってますよ」

「いや、もうこの際、時給何てどうでもよくなって来たわ……」

魔王はその後、姫と中ボスに散々笑い物にされたあげく、実は給料は歩合制だと聞いた……

……酷い。

- - -
- - -
- - -

その後魔王は、悲しみを癒すべく、自室に入ったが。
そこには楽しそうにゲームをプレイしている小ボスの姿があった。
魔王は何も言う事無く、小ボスと共にテレビの前に鎮座した。

「あれれ？ 魔王様、集会は終わっただんですか？」

小ボスは、画面から一時も視線を話さずに、ポテトチップスを食べていた。

その手は油でギトギトに汚れ、無邪気にもその手で俺のコントローラーを握っていた。

昔から小ボスはお菓子を食べた手で、平気で人のコントローラー握るんだよな……

「あの、小ボスさん」

「なあに魔王様」

「お菓子食べながら、コントローラー握るのはどうかと思いますよ」

やんわりと注意を諭す魔王だったが、その言葉を小ボスは笑いな

がら一蹴し

「あはは、何言ってるの??

これ僕のコントローラーじゃないから気にして無いだけであって、自分のだつたらやらないよ。

魔王様は本当に、馬鹿だな」

何これ！？ 確信犯！？ 姫に負けて以来、俺は魔王として扱われて無い気がする！？

それどころかミジンコ程度にしか……。

どうせ古いコントローラーだから、買い直す予定だから良いか……。

そんな事を考えていると、ふと先ほどの事を思い出したので、その事について聞いてみる事にした。

「そういえば小ボスは、いくら給料貰っている？」

「うーとね」

小ボスは真面目に考えているのか、左手をあごの辺りに当て、うーと、と唸りながら長考していた。

「魔王様ほどじゃないけど、夜間手当込みで月二十万くらいだよ」

JR東。本の初任給並み！？　俺がバイトどころか歩合制で働いてるにも関わらず！

悲しさのあまり、世界を征服する気が満々になったよ……

「ん？　どうして凹んでるんですか魔王様？　魔王様はかなり貰っているって中ボスから聞きましたよ」

えっ？　どういう事だ、先ほど口座を確認した時は、毎月三万程度しか入金されてなかったぞ？

「あれ、魔王様どこへ行くんですか？

一緒にアー。ード。アやりましようよ、ナインボール檜山が強いんですよ」

魔王は中ボスに事の詳細を聞く為に立ちあがり、ドアの方に歩いた、ドアを開け、去り際に小ボスに一言「指マシガン持っていけ」それだけ伝え、部屋を後にした。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「たのもー」

魔王は勢い良く、中ボスの部屋のドアを開けると、そこには必死に会計の仕事をこなっている中ボスが居たが、その目は、魔王の方を一瞥もする事無く、書類を食い入るように見詰めていた。

「道場破りですか？ 看板はありませんが、代りにそこにある書類を三部、コピーしておいてください」

「分かりました」

魔王は書類に目を通し、適切な順番に並べると、それをコピー機へ……

「こんな事をする為に来たのではない！」

「魔王様、遂にノリツツコミも得^えとくされましたか」

「そうそう、そうなんだよ……じゃない、なんだこの三文芝居は！俺がここに来た理由はだ——」

かくかくじかじか。

「ああ、その件ですか。」

魔王様の現在の給料は、必要最低限を除き、その全てを先の戦いで壊れた城の修繕に回しています」

なーんだ、そんな事か……って納得いくか！！

「あのですね中ボスさん、私は魔王ですよ？」

「そうですね」 昼にサングラス掛けた司会者の問いに応える観客のような簡素な返事だな。

「魔界から支援金でなんとかならないの？」

「何を御冗談を、^{しじょうだん}現在魔王城の最高権威者^{けんい}は姫様ですよ？

過日、その最高権威者である姫様の指示で、城の改装を行なった
じゃないですか。

その費用で今年の分の予算は全て使い果しました」

「その改装で、他の所も治ったのでは？」

「はあ？ あれくらいの費用で、姫様が破壊した門^{ゲート}が治ると本気で
思っているのですか？

そう思っているのであれば、まず、そのふざけた幻想をぶち殺し
ます」

うわっ怖ッ！ 今、自分の部下に『殺す』って言われたよ！

妹から貰った眼鏡の所為で余計に怖ッ！ なんで下から覗き込む
ようにして、睨むの！？

「……………ぐすん…………ずみま、ぜんでじた」

魔王、半泣きを超えて、本気泣き^{ガチ}である。

「では、魔王様。ご自分のお給料と、お命。どっちが大切ですか？」

今度はまるで子供をあやすようにして、声音を変え、優しく肩を叩き。中ボスは魔王をドアの方へ歩かせた。

「……………自分の……………命です…ぐすん、ごめんなさい」

「はい、分かって戴ければいいんですよ、では私は政務に戻りますので、王室や自分の部屋で良い子にしてください」
「……………うん」

「あっそついえば魔王様」

「……………、まだ何かあるの？」

部屋から出ようとした時、中ボスに呼び止められ、後ろを向く。

「魔王様って切手集めも趣味の一つでしたよね？」

「——？ まあそうだけど」

訳が分からないと言った具合に、顔を顰^{しか}める魔王。
そんな魔王の顔を見て、中ボスは突如、嬉しそうに微笑み言った。

「私、切手の事、馬鹿にしましたよ。あれって意外に高く『売れる』のですね」

……えっ？ 売った？ 売ったって言いましたこの鬼畜眼鏡は？

「あっ……あの。」

それは『自分の切手を売った』のか、それとも『魔王の切手を売った』のかどちらでしょうか？」

「あはは、もちろん後者ですよ」

ガダッ

「どうしたんですか魔王様？ また土下座とは、本日は『土下座日和』ですか？」

「……うん。もういいんだ……俺の切手が皆の役に立つのであれば」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「へーそれは悪い事したわね。」

でもねあんなメルヘンの世界の中でしか見た事のないようなお城なんて、魔王に相応しくないと考えたのよ」

中ボスに追い出され。王室に入ると、姫と小ボスが居たので、先ほどのやり取りを説明した。

「だって。『まさにココが魔王城！』みたいな見た目にしたらさ。」

『おっここ、魔王城じゃねえ？ ちよつと殺^やって来るか』って感

じで勇者が来るかもしれないし……」

「心配症ですね魔王様。そんな居酒屋に入るサラリーマンみたいな感じでは入って来ませんよ。」

入ってくるとすれば元より殺す気満々ですよ」

「それにね、一番気に食わないのは、何で深夜にライトアップして
るのよ？ パレードでもやるの？」

「それなら昔やってましたよね」

「やってたの！？」

「その事が、確かにパレードではないが、連日のように花火を打ち
上げていたら近所に怒られた」

「……正直、あんたは既に王国軍じゃなくて、近所の主婦に統治さ
れてない？」

「そんな事ないぞ。その花火云々言った主婦の方が、昨日のカレー
を作ったんだぞ」

「えっ！？ おすそ分けなのあれ？ 九人分ってあまり過ぎよ！！」

「うちのシェフだ」

「……………」

「パートか何かなの…………？」

「専属シェフだ」

驚きを隠せない姫とは違い小ボスは「おいしいよね」とニコニコしながら言つてと。

姫は席から立ち上がり魔王に怒声を飛ばした。

「あんたね、その人間であるシェフが国王軍の命令で毒を盛るように言つたら、一発で死ぬわよ!!」

「佐藤さんはそんな人じゃないッ!」

「魔王様、庭師の方も佐藤^{みょうじ}つて苗字ですよ」

「確かに苗字は同じだが、皆、庭師の方は『シザーマン』と呼んでるからいいだろう?」

「——その庭師が不憫^{ふびん}でならないわ」

シャキン、シャキン

「えっ!? なにこの音!? ハサミ!?」

「ん? シザーマンだな。丁度いい、そっちの窓から覗いて見る」

馬鹿馬鹿しいと言いたげな顔を魔王に向けた後、渋々窓際に向かう姫。

だが、その余裕^{じやくじやく}綽々だった笑みも、窓から庭に視線を向けると、瞬く間に消えた。

「……………、シザーマンでいいわ」

そう言い、姫は疲れた顔をしながら、力なく元いた席に付いた。直後、小ボスが思いだしたように口を開いた。

第五話『魔王様の給料は。。。制！？』パート？

第五話『魔王様の給料は。。。制！？』パート？

中ボスの部屋に着いた俺達だったが、部屋の中には誰も居なかった。

「……………、いないね」

「どう見ても不在ね」

一体中ボスはどこへ行つたんだ？

何処へ行つたのか、考えて居ると、そこへ一人のステイヴン・セガ……女性が通り掛かった。

「あつ！ 佐藤さん！ 丁度よかった。中ボス見ませんでしたか？」

「あら魔王様、中ボス様なら部屋の中に居るじゃなくて？」

「それが居ないんです、ほら」

魔王は、そう言い、クック佐藤に中ボスの部屋に入ってもらった。

「おかしいわね、私、今日この廊下の掃除担当だから、ずっと廊下に居たけど、中ボス様は部屋から出ていないわよ」

その後、クック佐藤は掃除を始める為、再び廊下に戻って行った。

「あのクック佐藤さんでしたっけ？　なんか沈黙ちんもくの。。。ってタイトルの映画に出てたような……」

「出てるよ」

魔王は驚く姫を置いて、部屋の中を探索した。

姫はその後、「突っ込んだら負け……突っ込んだら負け……」と
うわ言のように言っていた。

「ねえねえ、魔王様。この本、なんかおかしくないですか？」

魔王は小ボスに呼ばれ、書棚に近付いた。

「何で巻数が揃ってないな」

妹や小ボスならともかく、中ボスが本を整理しないとは思えられない。
ない。

魔王はとりあえず巻数を順番通りに並べる事にした。

「……………、（これ、なんかのゲームみたいだな）」

魔王は、少し疑問に思いながらも巻数を並べる事を終えた。
そして、その時。部屋の中で、カチャリと言う音と共に、ゆっく
りと書棚が横へスライドした。

「うわっ 凄いバイオハ。ードみたい！」

「ちょっと！ あんた達何やったのよ！？」

「とにかく中に入るぞ！」 「おーッ！」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」

そして俺達は、書棚に隠されていた階段を下った。

「ほへ」

「何よこれ？」

石作りの長い階段を下り、開けた場所に出ると、そこにあつたのは……

巨大ロボ！？

魔王達の前に現れた物は、巨大ロボット。全長は十五メートルほどの人型ロボットだった。

驚く俺達とは裏腹に、小ボスはロボットの周りをぐるぐる回りながら「ゴエ。ンインパクト」と繰り返し言っていた。

「どうしたのですか皆さん。こんなところに集まって」

「「中ボス！？」」

俺達は一斉に中ボスに近付くと同時に話しかけた。

「――一体なによ、このロボットは――！《これゴ。エンインパクトだよね！？》」

一人、まったく違う事を言っている者が居たが、誰も気には留めなかった。

「私は聖徳太子じゃないので一人ずつ話して下さい」

「じゃあ私が。ゴボン、えー、あのロボット何？」

「あれはですね。人型汎用決戦兵器『魔王ちゃんインパクト』です」

「『魔王ちゃんインパクト！？』」

「今日はやけに声が揃うわね……」

姫は若干嫌そうな顔をしながら魔王の方を見てた。
そんな視線を向けられながら、魔王はその兵器について訊いた。

「それで、なんなんだその『魔王ちゃんインパクト』とは？」
「インパクト！ インパクト！ かっこいい！」

「役立たずな、魔王様を補うために作りました」

酷いッ！ うわっ！ 他の連中は「うんうん」と頷きながら、妙に納得してる！！

「それより、このロボットって何処か凄い所ってあるの？」

姫の言葉に中ボスは不敵に笑い、眼鏡を掛け直した。

「『魔王ちゃんインパクト』には汎用兵器と名前の通り、沢山の兵器が搭載されています」

まずは、と言い中ボスが説明を始めた。

装甲は五種から構成される一複合装甲 コンポジット・アーマーを採用。

更に爆発反応装甲の発展型である電磁装甲を各所に重要箇所にかけています。

原動力は常温核融合炉を採用し、汚染や爆発の危険性はありません。万一の場合にも安心です。

更に各所に……、

凄まじいペースで喋り出す中ボスに姫は指を指しながら、魔王の方を見た。

「ねえ、魔王、中ボスのスイッチ押しちゃった？」

「まあ中ボスにはやや説明癖があるからな。
今までは注意していたが、新しい兵器を作ったとあつては仕方ないか……」

「私が話振ったのが原因だけど、どうするのアレ？ まだ説明してるわよ」

両腕には百二十？滑腔砲かっくほうを搭載。弾は装弾筒付翼安定徹甲弾APFSDSを主に使います。

接近された場合には全身に装着されている、十二門の七・六二mのミニガンで対処します。

更にこの魔王ちゃんインパクトの最大の特徴……、

「聞いていますか皆さん！！」

「はっ、はいッ！」

その後、魔王と姫は二時間ほど説明を聞かされ、小ボスはいつの

間にか寝ていた。

「ふう、こんなところですかね、トイレ休憩を挟んだ後に説明します」

「「まだ、あるの!?!」」

啞然とする魔王、そして姫のことが気になり、横を見ると

「!?! — あの姫?」

「ナニッ!」

「怒ってらっしゃる?」

「ふふふ、怒って無いように見えて?」

——十二分にブチ切れてらっしゃるようで……
こめかみに青筋浮かべてるよ……。

そんなやり取りをしていると中ボスは物凄い眼光でこちらを見る
と「お暇そうですね」と言い、後ろを向いた。

「!?! いやそんな事無いぞ」

中ボスの背中に向かって必死に弁解するが、既に、聞いて居ないようだった。

「そうですね、では飴と鞭作戦で飽きずに説明を致しましょう」

そう言い、中ボスは大きな箱から小さいボトルを取り出し、俺達に見せた。

「！！ おい中ボス！ 俺のボトルシップに何をするつもりだ！」

「何って？ もちろんご褒美ですよ？」

「どういう意味だ？」

「魔王様と姫様が私語をしないで、一時間黙って聞けたら一つ返却します。喋ったら……」 ガッシャン

「割れたわね……」

姫が無残に砕け散ったボトルシップの残骸さんがいを見ながら呟いた。

「何故意味も無く一つ壊した！！」

「魔王様は何だかんだ返してもらえんと思っただけなんですから、見せしめに一つ壊しました。」

これで私も、本気だという事が分かっていただけました？」

「どう考えても『飴と鞭作戦』じゃなくて『鞭と鞭作戦』じゃねえか！ 優しさの欠片もねえよ！！」ガッシャン

「イヤーもう止めて！！」

更なる被害者^{ボトルシップ}を見つめ、涙目になりながらも、魔王は残りのボトルシップの残数を盗み見た。

……軽く二十はある、どう考えても全部持つて来たと見て間違いないだろう。

「でも、さっき『魔王様と姫様が私語しない』って言ってたけど、何で私も入ってるの？」

「ああ、それはですね」ガッシャン

うわああ俺のカティサークちゃん^{ちゅ}が！！ 遠慮なく、そして躊躇なく^{ちゅう}落としたよ！

いやもうむしろ叩きつける勢いだっただよ！！

「ああ、それは魔王様の力作を遠慮なく壊す為に付け加えた条件です。」

これがあれば私は魔王様に話しかけなくても姫様に話し掛けられ、ボトルシップを壊せます。

誰かが一生懸命作った物を、目の前で破壊できるというのは何物にも代えがたい価値がありますよね」

「鬼！ 悪魔！ 鬼畜！ 悪鬼！ 外道！ 下郎！ 化生！」ガッ
シャン

ぎゃああゝ 一気に七個も！

「へー、別に私は痛くもかゆくもないし、はつきり言っちゃうと中
ボスの説明も聞き飽きてたのよね」ガッシャン

「そうでしたか、まあ私としても少し度が過ぎたとは思っています
けどね」

「なんだ、わかっていたの？ 中ボスも人が悪いわね」ガッシャン
「お前ら二人揃って天魔鬼神かよッ！！」ガッシャン

もう語尾にガッシャンが付くのが普通に思えて来た……。

「おっと、そういえば魔王様」

「……………（俺は喋らない、俺は置き物、俺は背景、俺は——…………）
」
「あくまで喋らないいつもののですか？ まあいいです。それよりもこ
れをご覧ください」

そう言い、中ボスが一つのボトルシップを天高く掲げた。

「！！！！！！（あれは俺『日本丸二世』！！」

百分の一モデル版！！ 百分の一にしてもメートルを超える全長からボトルシップ化は不可能と言われていたが、俺が独自にボトルを鍛冶師に特注で作らせ、その中に組み立てる事により完成した力作！

制作時間八百は伊達じゃないッ！」

「ッ！」

「おつと魔王様、そこを動かないで下さいね」

魔王は一挙手一投足に気を付け。中ボスから日本丸二世を奪い返すチャンスを探っていた。

今は一瞬たりとも視線を姫の方へ向ける余裕がないが、先ほどまでのボトルシップとは大きさが十倍以上違う日本丸二世を見た姫は、流石に黙っているようだ。

両者の距離はおよそ二メートル。

魔王は拳を握り閉めたまま、中ボスはボトルシップを頭の上に掲げている。

時が徒に流れ、^{いたすら}両者はひたすらに睨みあうばかりであった。

「……（どうする？ この間合いでは中ボスを力でねじ伏せたとして、日本丸二世を無傷で取り戻すことが果たして可能か？）」

魔王は少し、ほんの少しだが、間合いを詰めた。時間にして半呼吸分、その動きを中ボスは見逃さない。

だが、動いたのを分かっているながら、落とさない。

……まさか、本当は落とさないのでは？ 魔王はそう思い、先ほどと同じように間合いを詰めた。

既に膠着状態じゅうせきじょうたいに入ってから八呼吸。

時間など無意味かもしれないが、中ボスはあの大きさのボトルシップを両手に持っているのだ。

仮に落とそうと思って動いても頭上にあげた腕は既に関節がロック状態になっている。

あの状態なら、多少は腕の負担が軽くなるが、素早い動きは不可能。

更に近づく、その刹那、中ボスもまた動いた。

中ボスは腕をやや前に倒し、いつでも落とせるといふ態勢に移行した。

間合い、落とすタイミングを見誤らなければ救出可能。

「……（長い）」

「……（そう言うな姫よ）」

「——！？（ちよっと！ 何私の思考読みとってるのよ！）」

「……（中ボスの思考を読みとろうと思って、術を仕掛けたが、生憎、アイツの思考が読みとれない、代わりに貴様の思考が届いた）」

「……（ちよつと！ それって私にプライベートも無いって事！？）」

「

「……（ねえねえ魔王様、なんか楽しいことやってるようですけど、何してるんですか？ ルールはなんですか？）」

「……！？（小ボス！？）」

「……（ねえねえ、僕はどうすればいいの？）」

魔王は、しばし動きを止め、小ボスの位置を探った。

中ボスの後方五メートルの位置！！ これはチャンスか！？

「……（小ボス、中ボスが持っているビンが見えるか？）」

「……（うん、あれがどうかしたの？）」

「……（あれを奪って、俺の所に持ってこい）」

「……（分かりました）」

小ボスは元気よく返事をする、と、ゆっくりと中ボスに近付いた。
流石は小ボス、まったく気配がない、あれなら中ボスも気が付かないだろう。

「今だ小ボス!!」

魔王の聲に中ボスは初めて小ボスの存在に気が付き、後ろを向いた、だが、間に合うはずもない。

小ボスは一気に間合いを詰めると、中ボスの魔の手から魔王のボトルシップを奪い返した。

「魔王様へ、取って来たよ!」

そう言い、小ボスは魔王の向かって走り寄る。その刹那。

「あっ!」

小ボスは足元にあったレンチに躓^{つまづ}いた。

!?

まるでスローモーション、あるいは走馬灯のようにゆっくりと小ボスがボトルシップと共に倒れる。

ガッシャン

一際、大きな音を立て、一つの巨大な瓶^{びん}が割れる。
呆気にとられる皆の視線を浴びながら、小ボスはゆっくりと立ち上がる。

倒れて小ボスは、服に着いたガラスの破片を手で払い。
気まずそうに、頬を指掻きながら、魔王の方を見た。

「……えへへ、タッチダウン？」

ええ、それはもうプロ顔負けの完璧なタッチダウンでしたよ……
あれならアメフトの選手も夢ではないね……。

明らかに、顔が真っ青な一同。

そんな気まずい空気の中、いち早く中ボスが動く。

「……では私は夕食の用意の方がありますのでこれで」

「私も見たいテレビがあるから、じゃあね」

「?? 僕も行く〜」

皆、魔王の悲しげな背中を見るに堪えなくなったのか、足早に退出していく。

誰もが、魔王に掛ける言葉を持たなかった。

……………。

魔王は静かにボトルシップの残骸を両手で拾いあげた、だが、既にボロボロの船体は脆くも崩れ落ちた。

そんな残骸を魔王は黙って一つ一つ、宝石のように扱い、拾い集め。

それを愛しむように見つめた。

「これは横帆……それでこっちが縦帆

……はははっもうどっちがどっちか分からないや、あはは、あはは……」

第五話『魔王様の給料は。。。制！？』パート？（後書き）

話を二つに分けてしまつて申し訳ございません、話しの落ちを考えるうちに何故がどんどんグダグダに長くなつてしまいました。ごめんなさい……。以後気を付けるようにしますので、はい……

第六話『地球外勇者!?!』

第六話『地球外勇者!?!』

魔王は一人、王室で真・魔王神宮パソコン名の前に鎮座していた。

「我々は三年待ったのだ……」 本当は一年と二ヶ月だけです。

魔王の手には待ちに待った待望のゲームエロゲを握り締め。
その箱の中のディスクを取り出した。

「待ちに待った時が来たのだ! 多くの英霊ゲームクリエイターが無駄死にで無かった
ことの証の為に……」

「ソロ○ンよ! 私は帰ってきた!!」

「ぽちつとな」

魔王はアホぽい掛け声と共に真・魔王神宮パソコン名の電源を点け。
パソコンの起動を待つ間、嬉しそうにゲームのパッケージを見つめた。

その顔はまるで同心に帰った子供のようだった。

そして、魔王が、パソコンの中にディスクを入れ……

バタバタバタ……バアン

「魔王様ッ！」

魔王は突然の呼び声に、あわてて席を立ち、後ろを振り返り、声の主に怒声で返事をした。

「何事だ中ボス、今は真・魔王神宮の中に住まう。」

エロゲノ神の為に大切な供物を捧げている最中だぞ！
場をわきまえろ」

何故か中ボスの後ろには、小ボスに姫、それに妹の姿。

怒声が響く王室には、今まさに、フルメンバーが揃った状態になっていた。

「——正直、『ルビ』^{ふりがな}のオンパレードで言ってる事がさっぱりです」
「まあいい、それよりどうした、そんなに急いで」

魔王の問いに、姫が一步前にでると

「魔王、また魔王城に勇者が来たのよ」

何だ、そんな事か。魔王は特に気に留める様子なく、再びパソコンの前に座った。

「おにい、姫や中ボス、それに小ボスまで急いでこっちに来たのよ。」

緊急を要しているのは明白でしょ？」

「そういえば、そうだな。で、どうしたお前ら。核弾頭でも奪取されたのか？」

「それが……今回の勇者は一味違うようなんです」

「?? 違う? いつもの勇者との相違点そつてんはなんなのだ?」

「既に建て直しが完了したゲートが最終ライン手前まで破壊されています」

最終ライン目前まで迫っているだ!?

パパ上の援助と切手のおかげで制作にこぎつけた人型汎用決戦兵器『魔王ちゃんインパクト』が配備してあるはず!!

あれは姫でも苦戦を要するはず。それを撃破したと言っことか!?

「『魔王ちゃんインパクト』はどうした!?!」

「すさまじい突破力を持っていたので、非常事態と思い、独断で投入しましたが、結果は……」

中ボスは悔しそうな顔をしていた。

無理もない、あの『魔王ちゃんインパクト』は、中ボス自ら設計、開発した機体だ。

「役立たずな、魔王様を補うために作りました」と言われたのはひどく傷ついたのでよく覚えている。

一話前に登場したばかりなのにもう破壊されてしまうとは、俺の名前を取っただけに悲惨な最期を迎えたか『魔王ちゃんインパクト』よ……

「直に中央司令室へ向かうぞ、私自ら、指揮を執る」と

了解

「えっ！？ あんた達、何いきなり士気が高いの！？」

困惑する姫を連れて、司令室へ移動した。

- - -
- - -
- - -
- - -

「全員持ち場へ。姫はそこで座つてろ、今回はお前は見てるだけでいい、だが絶対に邪魔をするな」

「小ボス、勇者の映像出せるか」

小ボスは頷くと、コンソールを叩き、中央の大型ディスプレイに勇者の映像を出した。

……啞然。

「そうです、これが勇者です」

先ほどまで、一人で司令室にいた中ボスは既に勇者の顔を見ていたので、皆ほど驚きはしていなかったが、それでも気分の悪そうな顔をしていたのは一緒だった。

「これが勇者……あれはどう見てもプレデタ。じゃない」

「よかったな姫！ お前より強い男？ が現れたぞ！ きつと女子供には優しいぞ！」
殺さない

「嫌よあんな怪物！ どう見ても地球外生命体じゃない！！」

発狂寸前の姫に、フォローをする事にした魔王。

「大丈夫、例え同じ地球外生命体でもエイリ。ンよりマシだよ！」
「どっちも嫌よ！！」

説得失敗！？

「まあいい、とにかく姫は落ち着け、皆もだ。ほら、姫、そこに早くお座り」

魔王はそう言い、姫に自分の隣に座るように指示をした。

憔悴^{せうすい}しきつた姫は特に口答えも不満も無く腰を下ろした。

よし来た！ 魔王がそう思ったその刹那。

ブウウ！

突如、司令室でオナラの音が鳴り響いた。

「姫、こんな時に、おならをするんじゃない！」

「アンタね！ それは私の台詞よ！ こんな時に私の席にブーブー
クッション置くんじゃないわよッ！！！」

そして、殴られる魔王。

「イテテ。俺の有能な脳細胞が一億は死滅したぞ！ 人間は頭を一
回叩かれると六百万個死滅するだぞ！
総量では百六十億個しか脳細胞は無いのだぞ！」

「じゃあアンタの頭を先ほどと同威力で、あと百六十回叩けば脳死
してくれるのね！！」

姫は、魔王にゆつくりと間合いを詰め始めた。
その顔はまさに阿修羅^{あしゅら}、鬼の形相^{けいそう}である。

「敵勇者、現在第三ゲートに接近中。魔王様、姫様。そろそろ夫婦

漫才はやめて、真面目にしてください」

「誰が夫婦だ!!」

くそっ綺麗に揃ってしまった……あいつらニヤニヤしてやがる!

「ゴホン。ではこれより、勇者撃退作戦を開始する」

「小ボス、勇者の戦闘力はどのくらいだ？」

「——出ました! 五十三万です!」

なんて戦闘力だ! フリー。並だと!?

「姫様の戦闘力が七十万。妹君が七十四万。僕が六十六万です」

ははっ……何てたくましいの、Z戦士がいつぱいだ……

「俺は?」

「……——五です」

「うわっアンタ弱いとは思っていたけど戦闘力たったの五!? ゴ
ミじゃない!!」

「姫、おにいは後、変身を二回残しているわ」

「そうですね、魔王様は月を見ると——」

「皆さんそろそろ自重してください、怒られます」

わかつた^{はい}

「では妹、お前が撃退に出向いてくれるか？」

妹は鼻で笑うと、席から立ち上がり

「良いの？ おにい、私が行くと、被害がでかくなるかもよ？」

「なんかの拍子に小ボスが本気出すよりもマシだ、行ってくれ」

「そうね、なら私の方が適任ね」

妹は揚々と司令室から出ようとした時。

「ちょっと待って、確かに妹ちゃんの方が強いかもしれないけど、別に私でもいいんじゃないの？」

「お前、あんな気持ち悪いのと戦いたいのか？」

「……………」

「じゃ私が行くわね」

「ぐははは！ 貴様が魔王軍の兵か！ 変な機械しか居ないと思っ
たが、ちゃんと兵が居るではないか！！

やはり本物の肉を裂いてこそ戦いよ！！」

「……………」

「どうした、恐怖で声も出ないか！ がはははは」

「貴方本当に勇者？ まあいいわ、相手してあげる。貴方の罪を数
えなさい」

妹は勇者を蹴り飛ばす、その事しか頭に無かった。だけどそれだ
けで総て事足りる。

妹は地を蹴り、勇者に向かって跳んだ。

次の瞬間には妹はその場から消えていた。

妹が居た場所には砂塵だけが残されていた。刹那、暴風と爆音が
辺りに包んだ。

「！？」

妹はただ勇者との距離を詰める為、接近しただけだ。
だけど、その速度は音速に達していた。

そして、その勢いで蹴る。「トンファーキック！」それだけで決
着はついた。

「ぐっ……貴様、なぜそんなに強いのだ……」

妹は内心、何かを期待していた。

「……………（ツツコミは無しなのかしら？）」

妹は諦め、勇者に向かって指を指し。

「私が、私たちが魔族よ」

そついい、妹は城に帰っていった。

- - -
- - -
- - -

「どうだ姫、妹は強いだろ」

魔王は王室に戻り、再び真・魔王神宮バシコン名の前に腰掛けた。

「何でアンタが自慢げなのか分からないけど、強さは本物ね技術アーツは無いけど剛力フォースは圧倒的ね」

「……………」

「ん？ どうしたのよ？ 必死な顔で、箱の中なんて覗き込んで？」

「起動コードシリアルキーが同封されて無い！」

これじゃあせっかく発売日に買ったゲームがプレイできないでは無いか！

「……この箱^{世界}の中に紙^神は居ない！」

第七話『魔王、二次元に立つ!?』（前書き）

今回、後半部に、やたらとスペースが入っているので携帯版などでは読み難い可能性があります。読みづらいと言われたら修正致しますので。

毎回タイトルが書き終わってから十秒程度で決めてる気がする……
あつ前書きで書く事じゃないよね……

第七話『魔王、二次元に立つ!?!』

第七話『魔王、二次元に立つ!?!』

「早くもこのシリーズ、マンネリ化してるよな」

魔王は王室に入ると、眩くようにして、皆に言い放った。
皆が、無視する中、姫と小ボスだけが呆れながらも反応する。

「何よアンタ。部屋に入って来るなり、何を言い出すと思ったら…
…頭でもおかしくなったの?」

「そうですよ、魔王様。いくらエロゲ脳だからって、現実世界をクソゲーと言いついたら終わりですよ」

「——うつつ。いや俺だって別に現実がクソゲーと言つつもりはない。」

「だがな……こう……もう少しイベントが欲しいッ!」

「具体的に、魔王様はどんなイベントが欲しいんですか?」

小ボスは興味津々だが、姫と中ボスは興味が無さそう。
妹に至っては同人誌を読む方が大事なようだ。

「まあ具体的にあれがしたいとかは無いのだが、……うーん。
ああ、そうだ、学園物のエロゲみたい展開が欲しい」

「——キモッ」

「魔王様気持ち悪い」

「流石に引きます……」

うわ……皆冷たい……正直に欲望を口にただけなのに……。

「おにい、ならこんなゲームがあるけど」

妹は同人誌から顔を上げ、横に置いてあったカバンから一つのゲームを取り出した。

「なになに……『バーチャル仮想学園アールタイプ』？　なんだこれは？」

「あれ、おにいには知ってるかと思ってたけど。まあいいわ軽く説明してあげる」

バーチャル仮想学園アールタイプとは。

変態企業、『G線上の魔王ソフトウェア』せんじょうから発売した全年齢対象ゲームソフトである。

このゲームの最大の特徴は、実際の人物が約百五十の質問に答える事によって。

攻略キャラ自体の性格が、そのインプットした人物になるという物だ。

技術的な事は一切不明だが、G線上の魔王ソフトウェアの公式サイトで、有名人の性格データを配信する事によって。

実在するアイドルを疑似的^{ぎじ}に攻略する事も可能になり、爆発的な売れ行きとなった。

「おお、これが噂の仮想学園^{ソウガク}か！！

各店舗でもすぐさま売り切れになり、オークションで買おうにもメーカー価格の三十倍以上の値が付いて、幻のギャルゲーソフトと言われたソウガクを何故お前が？」

妹は無い胸を必死に誇らしく張りながら、魔王に一枚のカードを手渡した。

「ふふふつ、私を舐めないでもらえる？ もちろん手入れるのは大変だったわ。

極秘裏に、おにいの財布からこのクレジットカードを抜き取ることで、どれだけ大変か」

「……………」

魔王の表情は絶望に染まり、顔は涙でぐしゃぐしゃになっていた。駅のホームで、こんな表情の人が立っていれば、人々は警戒し、駅員は止めに走るほどだ。

「うわっ妹ちゃん、外道……」

もちろんクレジットカードは、家族であっても無断使用はいけませんよッ！

「ねえねえ、それより早くやってみようよッ！」

小ボスは無邪気にゲームソフトをゲーム機本体に挿し入れた。

「くそっこつなったら自棄^{やけ}だ。元が取れるくらいの勢いでプレイしてやるッ！」

魔王は張り切りながらも、一度席を離れ。長時間連続プレイの為にトイレに行った。

「魔王さま、質問の方は一通り終わりましたので、プレイ可能ですよ」

「流石だな、ではいざッ！」

- - -
- - -
- - -

..... Now Loading

クズオ「俺の名前は『塵^{ゴミ}屑男^{クズオ}』。

今日からこの私立バーチャル仮想学園こと『ソウガク』に入学する事になっている」

……………なんだこの悪意たつぷりの名前は？

そんな理不尽なネームにも負けずに頑張る主人公……………まるで俺を見てるようだ……………。

クズオ「この学校で彼女を作って、俺の灰色だった人生を一瞬でバラ色に変えてやるぜえッ！」

『そう意気込み、入学式に臨む^{のそ}、クズオ。

どこに行っても校長の話しは長いっというのは変わらない
なとクズオは思いながら、

退屈そうに視線を泳がしていた』

『「新生代表挨拶」と耳に届き、クズオは視線を壇上に移した』

クズオ「——！！……………かわいい」

『クズオが壇上に視線を向けると、そこには赤髪の少女が、
必死に新生代表挨拶とやらをこなしている真っ最中だった』

?? 「新生を代表して一言、ご挨拶を致します……………うつつマ
イクが高すぎるわ……………」

『マイクと少女の身長はやや不釣り合いだった。
それを補う為に少女は背伸びをし、それでも足りないの
つま先立ちをしている格好になっていた』

『皆がスピーチの内容では無く、
少女が一生懸命マイクと格闘している事に注目が行っ
ていく事は明白であった』

?? 「——新入生代表『姫』」

『スピーチが終わり、今までとは比べ物にならないほどの盛
大な拍手が体育館を包んだ。

少女は誇らしげに壇上を下りて行った』

『皆、口々に「よく頑張った」などと保護者のような事を言
っていた』

『入学式も終わり、その後、俺達は各教室に貼り出された名
前を確認し、所定の席に着いた』

クズオ「一年四組か……そういえば『あの子』がどの組かチェッ
クしておけばよかったな」

『クズオは窓際の一番後ろの席で、アクビを噛み殺しながら、
つまらなそうに外を眺めていた』

?? 「こんにちわ」

クズオ「あ？」

『突然の挨拶に、クズオは顔を右に向けると、声の主を見た』

姫「こんにちわ、ゴミ君、隣の席ね」

クズオ「どうして僕の名前を？」

『混乱するクズオに対して、姫は至って冷静に答えた』

姫「ゴミ君は、外に張り出されてた紙で前後左右の席の人くらい確認しなかったの？」

クズオ「……ああ、それか。こちらこそよろしく、えーと姫ちゃんでいいのかな？」

姫「もー、私達クラスメイトなのよ。姫でいいわよ」

クズオ「じゃあ僕の事もクズオで。よろしくね姫」

『そう言い、クズオは手を姫の方へ差し出した。
だが姫はその手を見ると、すぐさま撥^はね退けた』

クズオ「!？」

姫「馴れ馴れしいわね、私とアンタの関係を忘れたとは言わせ
ないわよ？」

アンタは私の従者なの。わかる？ 奴隷なのよ？ 分かっ

たら『ワン』とお鳴きッ！」

選択肢。

一、ワン

二、黙れ腐れビ。チ

「こんなギャルゲーやだアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

魔王はコントローラーを画面に投げつけると、姫の方を睨^{にら}んだ。

「何よ！ 私はただ質問の答えだけよッ！」

「なんでゲームの中ですら、上下関係が変わってないのだッ！ ゲームの中でくらいピユアで居たい！！！」

「それになんだ？ プレイ中にはツツコミ入れなかったけど、『塵^{チリ}屑男^{クスオ}』って酷すぎないか！？」

既に名前からDM仕様みたいになってるんだがッ！ 貴様らが決めたんだろッ！！！」

文句を一通り言い終わった魔王は、肩で息をしながら、もう一度コントローラーを握った。

「……魔王様、あれだけ文句を言ってたのに、もう一度プレイする

んですか？」

「とりあえず目の前にある選択肢だけは片付けないと気が済まぬッ！」

そう言い、魔王は、クイックセーブを行ない、選択肢を選んだ。

……………Now Loading

クズオ「ワン」

姫 「あははは、ホントに行ったわコイツ！ いいわ、一生こき使ってあげるッ！」

クズオはその後、ぼろ雑巾のように姫に扱われ、そして死んだ。

ハットエンド
BAD END

あぜん
啞然としながらも、魔王はクイックロードをし、もう一つを選択肢を選んだ。

……………Now Loading

姫 「へー私に逆らうの？ いいわ、私に逆らった事、死ぬほど後悔させてあげる」

姫はクズオを限界までいたぶり。
クズオは体験がトラウマになり、一生家で引きこもり、ゲーム漬

の生活となった。

B A D E N D

「あはははっ、今の魔王様みたいになっちゃいましたね」

「……………（小ボスって何気に一番外道よね）」

「……………（また小ボスのオーバーキルですか）」

姫と中ボスは奇跡的に同じような事を同時に思っていた。

「おにい、大丈夫よ」

「??？」

既に半死半生はんしはんしょうのに成りながらも、魔王は妹の方を見た。

「『小ボス』と『中ボス』のデータも入れてあるからそっちの攻略も可能よ！」

妹は嬉しそうにサムズアップをすると、再び魔王にコントローラ
ーを手渡した。

その後、魔王は、小ボスルートも中ボスルートも見事攻略。

ゲームを終了後、小ボスと中ボスを見つめる魔王の眼は、どこか
熱を帯びていた。

H
A
P
P
Y

ハッピー
エンド

E
N
D

?

第七話『魔王、二次元に立つ!?』（後書き）

本当にマンネリ化してるんじゃないだろうか……。

エロゲ回みたいなのはまた今度ゆっくり書きたいな（願望）

エロゲのシナリオライターになれたら面白いだろうな。

あと、今回クスオなどの台詞前に名前が入っていますが、エロゲとかノベルゲーにはよくある事なので、それは脳内修正をお願いします。

第八話『小ボスと中ボスの秘め事!?!』

第八話『小ボスと中ボスの秘め事!?!』

『バーニイ、もう戦わなくていいんだ』

「うつうつ……」

「——おにい、いないの? ノックしても返事無かったか……えっ!?! なになに!! おにい何泣いてるの?」

「ああ、妹か……これだよこれ」

魔王は自室でアニメを見ながら涙を流していた。

妹に教えるようにして、テレビの方に指を指し。

その手で、ティッシュペーパーを一枚抜き取ると、それで鼻をかみ、ゴミ箱へ投げた。

「うつ……バーニイが死んじゃった……うわあああ」

「今更、ポケ戦? でも昨日は08見て無かった?」

「ぐすん……ぐすん……つえ? ああ。お前が見かけた時に見ていたのは確に『第08MS小隊』宇宙世紀だな。

昨日からずっと、機動戦士ガンダム宇宙世紀のUC歴の作品を見直してるんだよ」

魔王の言葉に、妹は部屋を見渡した。

確かに部屋には沢山のビデオ、DVDで溢れ返っていた。

床に転がっている飲み物などの量を考えると寝ずに見ていたと安易に想像できる。

「それより、如何いかにしたのだ妹よ」

魔王の言葉に、妹は何故自分がここへ来たのか思いだした。

「おにい、おかしいのよ、小ボスも中ボスも今日は全然見かけないの！」

「……そりやお前のBLの同人誌のネタの為に絡みを強制的にやらされるのであれば避けるのも仕方ないだろうに」

「いいえ、避けるなんてそんな生易しいもんじゃないわ、城に居る他の人たちも、今日は中ボス達を見て無いって言ってたのよ」

「それはおかしいな、中ボスなら自分の部屋で事務仕事の為に缶詰状態になっている事はあるが、一日中、小ボスを見かけないというのはおかしいな」

魔王の言葉に、妹は、でしょ、と同意するように言った。

「少し捜して見るか」

[illegible]

魔王達が三十分ほど城の中を搜したが、気配すら感じなかった。

「ああ、一通りは搜した……ん？」

「小ボスの自室!?」

「やはり……」

118

「おかしい、この周りに“人除け”の結界が張られている」

「ん？ おにい、それはどういうこと？」

「お前……それくらい知っておけ。まあ端的に言つとだな『近寄りたくない』と思わせる結界だ。」

この結界が張られて居れば、たとえ遠回りになったとしても結界を迂回^{うかい}して移動してしまう」

「だから、ここら辺を搜索しなかったのね」

「ああ、基本的には気が付く事も無いかもしれないが、俺達は明確に小ボス達を搜し、行く可能性の場所を虱潰^{しらみ}しで搜した。」

だから結界の効果があるうと、小ボスの部屋を搜索してないという事実が浮き彫りになったという訳だ」

「そこまで気が付いてしまえば、俺達に対しては、この結界は無効かされてしまっていると言ってもいい」

魔王の言葉に、妹は関心したようにうなづいた。

「じゃあ、小ボスが近寄られるのが嫌で、その結界を張ってるってこと？」

「いや、こんな魔法は小ボスは使えないはずだ、この城で使えるとすれば、俺か中ボスだけだ」

「じゃあ、今、中ボスと小ボスは二人でいるって事？」

「ああ、その可能性が高いだろうな」

魔王と妹はどちらとも無く、小ボスの部屋に向かって歩み始めた。

「——ッ！ 止まれ！」

「きゃあ！！……ちよつと何よおにい！！」

魔王は妹の服の襟首を掴むと、強制的に歩くのを止めた。

「ここにも結界がある。……これはサーチ系の範囲魔法だ。これより一歩進んだら、中ボスに察知される。

範囲魔法を二重で使うとは、凄まじい念の入れようだな。流石、中ボスと言ったところか」

「褒めてる場合じゃないでしょ！

どうするのよおにい、これ以上近寄ったらバレるって。

それじゃあ小ボス達は何やってるか分からないじゃない！」

「まあまあ、この魔法は電波のような物だ、逆相の周波数を当ててやれば相殺できる」

魔王はそう言い、目を閉じ、魔力を両手に集中させた。

その両手は察知される位置ギリギリの位置に置かれていた。

（本気で中ボスがこの魔法を駆使していれば、俺でも解除は不可能

だ……だが)

「——ふんッ！」

両手に集めた魔力を一気に解放すると、まるで魔王達と廊下の間には透明なガラスが有ったかのように、その魔法が砕け散った。

「すごい、さすがおにいね！」

「はは、もっと褒めろ妹よ！」

魔王は高笑いを浮かべながら、再び廊下を進んだ。

(あの術は低レベルな物だった。もし本気で術を練っていたらとても破れなかっただろう……)

魔王はそんな事を考えながら、小ボスの部屋の前に立った。

「……ねえ、ここからどうするの?」

「俺に聞くな、とりあえずドアにでも耳を当ててみればいいのではないか?」

魔王達はそう言い、そつとドアに耳を当てた。

『……準備はいいですか小ボス?』

『うん……でもね中ボス、僕、まだ慣れてないから優しくして』

『あはは、分かっていますよ。ではゆっくり入れていきますね』

『——んツ……ああっ……ふあっ!?!?』

『どうしました? 痛かったですか?』

『ごめんね中ボス、痛かったわけじゃないんだけど、その……気持ちよくてつい声が出ちゃって……』

『そうだったんですか、この部屋には私と小ボスしかいないのですから、声を出してもいいですよ』

『うん、わかった。あっあっ……中ボスのが中で動いて……あん』

「……………」

(お、おおお、おにいッ! しよ、しよ小ボスと中ボスは、い、一体何をしてるのツ?!!)

(おッお、おおお、俺に聞くなツ!!!!)

——パニック! 大きな声で喋る事の出来ない魔王と妹は、仕方が無いので、ジェスチャーで己の意志を伝えあった。

だが、傍から見れば奇怪な踊りを踊っているようにしか見えない。

「アンタ達、小ボスの部屋の前でなにやってるのよ?」

「「姫ツ!!?!?」

「説明してる余裕すらない! とにかくここに来てみる」

「???」

姫は魔王達の顔を見ると、ただ事では無いと悟り、静かにドアの前に立った。

『どうですか？ 痛くないですか？ もう少し奥に入れても大丈夫ですか？』

『あつ……うん、大丈夫だから。もっと……奥に来て……』

『はい、ではもう少し奥の入れますので、痛かったらすぐに言ってください』

『……ん……ん、ああ……もっと……深くまで……きて……んくつ……』

『どうですか気持ちいいですか？』

『……うん、中ボスにしてもらうの僕、好き』

『そうですか、私はやられる、よりやる方が好きなので、テクニクを褒められるのは嬉しいですね』

………

（なつ……なななな、何やってるのや小ボス達は！？）

（しっ、静かにしろ姫ッ！）

（……中ボス×小ボス……中ボス×小ボス……中ボス×小ボス……）

小ボスの部屋の前で不思議な踊りをする集団。
ジェスチャー

傍から見れば危ない集団だが、この奇怪な踊りきつかいで会話が成立しているのだから、不思議である。

（止めなくていいの！？）

（俺に部屋の中へ、入れと！！！？？？）

（アンタ以外に誰がいくのよ！？ 妹ちゃんは完全に妄想の世界へ旅立ったわよ！）

（……ナマモノ……ナマモノバンザイ！！ ジークナマモノ！！）

「……………」

『あつ……んっ……ちゅ……中ボス……今っ……妹ちゃん……の……んっ……声が聞こえたような……』

『大丈夫ですよ、いつものように結界を張っているので、半径十メートル以内に入って来たら分かりますよ』

『……ああ……んっ、……ああ……うん……わかった……』

（……だから結界張っていたのか）

（なに？ 結界が張ってあったの？ なのにアンタ達、わざわざ結界突破魔法を使ったの？）

（だっておにいが……）

（おい！ 妹よ、お前が元はと言えばお前が言いだした事だろうが……！）

（だから残留魔力がこちら辺にあったのね）

混乱する魔王達だったが、それよりも淫行の真つ最中？
と思しき部屋に、誰が突入するか決めようとしていた。

（いい、最初はグーよ）

（ええ、いいわ。おにいは？）

（ええい！ こうなれば自棄だ！ 良いぞ掛かってこい！）

意気込む魔王達に対して、中ボスと小ボスの声が届く。

『終わりましたよ、小ボス』

『ありがとう、中ボス。やっぱりいいね “耳かき” って』

……………

魔王達、顔を見合わせると……勢い良くドアを開け放ち、同時に
言い放った。

そんな事だと思ったよ！！

結局のところ、中ボスがこんなド丁寧に魔法を使っていた理由は
「耳かきをしている時に、小ボスが驚いたら危ないじゃないですか。
だから事前に入ってくるのが分かるようにしていたのですよ」と言
う、母親ばい理由だった。

言ってしまえば早とちりである。

「おい、小ボス！ 中ボスの耳かきはそんなに良かったのか！？」

「うん、凄く上手だよ、魔王様もやってもらえばいいよ！」

中ボスはひどく嫌そうな顔をしたが、半ば強引に中ボスに耳かきをさせた魔王。

「……あつ……本当に……んっ……これは……んくっ……ふあつ！
あつ……そこは……らめえ……そこはらめえええ！」

連日に渡り、魔王城には、小ボスと魔王の気色の悪い声が木魂こたました。

余談だが、中ボスの耳かきの虜になった魔王は、小ボスと競うようにして耳かきをせがみ。

後日、中ボスが二刀流で、同時に二人まで、耳かきが可能になったと言うのは、また別の話である。

第八話『小ボスと中ボスの秘め事！?』（後書き）

これはちよつとエロイのか……？　と思いつつ。まあ別に許容範囲だろうと思い。特に注意書きも無く、投稿。

もし、『男と言えども、これは……』と思う方がいれば、ちよつと前書きの方で注意書き入れようかなとは思っている。

第九話『貧乳はBADステータス!?』(前書き)

タイトルは相変わらず適当なので。気分が変わるかも……と良く言
ってるが変更した事ないな……

第九話『貧乳はBADステータス!?!』

第九話『貧乳はBADステータス!?!』

「おっばい……」

魔王は王室でエロゲのヒロインを見つめながら呟いた。
その瞳はまるで恋する乙女のような純粋な眼まなこだった。

「……………」

「あの、魔王様、約一名。物凄い殺気を飛ばしておられる方が居ますけど、弁解か、謝罪、どちらかを早急に行った方が良いと思いますよ」

中ボスの言葉に魔王は、恐る恐る後ろを振りいた。

そこには、魔王をくびり殺すのではないかと、思うほど殺気立っている人が一名。

ドアの前で静かに立っていた。

なんか、ゴゴゴゴとか、ドドドドとか背景に見えるのは気のせいだと思う。

いや思おう、思っておこうッ！

「なな、な、姫!? 貴様、何処から湧いたのだ!?!」

魔王は、あろう事か、一番聞かれてはいけない相手姫に聞かれてし

まっただ。

「人を害虫や湧水みたいに呼ばないで貰えます？」

眉間に皺しわを寄せながら、こめかみに青筋を浮かべてらっしゃる！
！??？

魔王の中の腐ったエロゲ脳から醸し出される、脳内軍師が『はわわ、ご主人様。敵が来ちゃいました』とか言っている。

とりあえず脳内会議で導き出した答えは、兎に角、言い訳をするという。

何ともまあ、ヘタレ過ぎて、逆に潔いくらいの発想だった。

「すまん姫、てっきり居ないと思ってつい……」

「『つい』ッて何よ！！——悪かったわね胸が人よりも小さくて！！」

私の胸がアンタに悪さした？ 迷惑掛けましたかね！??」

……うわゝ『胸が人よりも小さい』ッて言っただよ……
素直にまったく無いと言えば良かったのに……涙ぐましいな……

「……いや、別にお前の胸の事を言ったのではない。ただ……」
「『ただ』？」

キョロキョロと視線を左右へ向けた後。
魔王は覚悟を決めたように口を開いた。

「女性なら胸が大きいほうがツ——グアッ」

「うっさいわね！ これでも努力してるのよ！！ 人の努力も知らないで良く平気でそんな事言えたものね！！」

激怒する姫に対して、中ボスはゆっくりと姫に近付き、諭すように
「姫様、魔王様は完全に気絶ノックアウトしています」
と言い、中ボスはそつと心のゴングを鳴らした。

五分後……

「いててて……。まさか、ヒロインがロシアン・フックを顔面にお
見舞いしてくるとは、夢にも思わなかったぞ」

魔王はそう言いながら、額を撫でていた。
出血こそ無いが、一撃で重度の脳震盪のうしんとうを起こすほどの拳が顔面に
浴びせられた。

「あつ、魔王様が気絶した後も、姫様は追撃でボディーに一発入れて
ましたよ」

「お前ホントに“姫”かよッ!!」

魔王は、姫の方を見ると、気まずそうに眼を逸らした。

もつと姫を非難してやりたかったが、それよりも、今は腹部の方が気になっていた。

魔王は、あっそうか……昼食はカレーだったな。
と要らぬ事を考えながら腹部を擦った。

「べっ、別にアンタが憎くてやった訳じゃないんだからねッ!」

「そんなツンデレいらねえよッ!

どこの世界にロシアンフックにボディーとコンボを入れるツンデレヒロインが存在するのだ!!」

「じゃあ何!?! 後で校舎裏とかに呼び出して、こっそりと闇討ちすればいいの?」

「最早、発想がヒロインじゃありませんね……」

中ボスが呟くように言ったが、姫は更に言った。

「それによ、私だつて胸で物を挟むくらいの事はできるのよッ！」

「……じゃあその“小さな胸”でこの空き缶潰してみろ」

「ギネスブックに登録されるような胸はさすがに持つてないわよッ！
見てなさい、このペンくらい胸で挟んで持ち上げて見せるわよッ
！」

そう言い、姫はペンを持ち上げると、両手で胸を寄せ始めた。

「——ッ」

辛い……もう見てられない……。

そう思い視線を中ボスの方へ流すと。

まるで、現実から目を逸らすと言わんばかりに此方を見返した。

「……魔王様……いくら痛ましく、居た堪れない気持ちになったか
らと言つて、姫様の頑張りから目をそらしてはいけません」

「くそお……お前もしつかりと見てみる。中ボス！ 服の上からで
も、姫の胸部の悲鳴が聞こえてくるようだ！」

魔王と中ボスは、最早、何故姫がペンを持ち上げようとしている
のかという目的すら忘れ。

姫の苦しみに歪む顔を見つめていた。

「——ッ！！ ほら見てみなさいよアンタ達！ 私にだってこれくらい、あつ……」

出来たと姫が言った直後、そのペンはまるで意思があるかのように胸からこぼれ落ちた。

そのペンが床に落ち、カタツと音を立て、その音だけが王室に響いた。

まるで無限のように感じられる沈黙が辺りを覆った。

ペンが落ちるといいう事がこれほど残酷だと感じるのは、これまでもこれからこれつきりだろう。

「……」
「……」
「……」

重い……沈黙が重い……盛り上がらない合コン並みに喋りぐらい……。

「あつ私、そろそろ夕食の用意がございますので、これで……」

「待て中ボス、お前だけ逃げるつもりか！！」

——あつ姫！ 頼むからそんな悲しそうな顔をするな！

俺が悪かった！ 俺が悪かったから！ 謝るから！ ホント、頼

むから泣くなッ！

「ここでお前が泣いたらこの場が笑い事では済まなくなる！」

「……だって……アンタが全部……ぐすん……悪いのよ……」

泣きそうになりながら必死に堪える姫に対して、魔王は何をする訳でもなく、オロオロと姫の周りをただ回る事しかできなかった。

まるで泣きじゃくる赤子を前にした、初々しい父親のような構図である。

「そうだッ！ 角砂糖も食べたいだろ？ 投げてやる……ご褒美だ、何個食いたい？ 2個か？」

「うつつ……なんで『角砂糖』なのよ……。それに……ぐすん……あげるなら手渡ししなさいよ」

「御尤もで」
ごようも

やはり、元医者と元患者のやり取りを元にして説得したが、失敗だったようだ。

スタンドは必須か……。

そんな事を思いながら、魔王は更に言った。

「まあ兎に角、姫。何か欲しい物とかないのか？
なーに、大抵の物なら俺の力で揃えてやる。遠慮なく言ってみろ」

魔王のそんな言葉に姫は少しだけ顔を上げた。

うわっ 目真っ赤!!?? ガチ泣きだよ!?

ココで腹抱えて笑ったりなんかしたら内臓が吹き飛ぶほどのパンチが飛んで来るだろうな……。

姫は顔を上げ、その双眸そうぼうが魔王を捉え、ゆっくりと姫は口を開いた。

「……ぐすん……じゃあ……——む、胸が欲しい……」
「——無理」

姫は、何で何でと子供のように言ったが。正直こればかりは魔王がどうにか出来るような事ではなかった。

「牛乳とか飲んだらどうだ？」
「そんな常識レベルの知識で皆、胸が大きくなったら。私だって苦勞しないわよ!」

「じゃあ胸に効くマッサージとかはどうだ？」
「あんな事やっても胸が痛くなっただけよッ!」

痛くなるほどやったんだ……。
魔王はどうすればいいのか更に考えた。

「うん……」

魔王が唸るようにして考えていると、姫が突如、口を開いた。

「そうよ！ 魔法よ！ 胸を大きくする魔法とかないの！？」

これぞ名案と言わんばかりに笑顔になる姫に、魔王は事実を淡々と伝えた。

「胸をミサイルにして飛ばす魔法や胸から光線を出す魔法ならあるが……大きくする魔法は……」

一時的な変化の魔法では意味が無いだろうし……。

あつ！ あつたな一つだけ！ でもなあこれはちよつと……」

「えっどんな魔法よ！？ もったい付け無いで早く教えなさいよ！」

正直一つだけ、手はあつたが。これだけは言いたくは無かった。だが、あると言ってしまった手前。今更忘れたや言いたくないと言えど命が無いだろう。

「……まあ確かにその魔法を使えば胸は大きくなるが……なるが……」

「なによ……?」

「……——胸を大きくして、三十秒後に肉体が爆散するんだ……」

無言……、嫌でも姫の、落胆の思いが伝わる。

「なな、何よそれッ!? それって魔法じゃなくて経絡秘孔を突く技じゃないの!？」

「ああ、だから魔法名が『巨乳爆碎拳』だったのか、長年の疑問に遂に答えが出たな」

なるほど、だから魔法詠唱の時にアタタタとか言ってたのか。
後でパパ上に答え合わせを願おう。

「だが、姫がこれほど悩んでいるんだ……俺も姫に協力するぞ!」

「食らえ! 『巨乳爆碎拳』ッ!……!」

「いやああ止めなさいよッッ!」

「くそ、避けるな姫! 他の秘孔を指してしまったら大変な事になるぞ!」

「本命に指しても、他に指されても。どっちにしても危険よッ!」

姫と魔王は鬼ごっこのように王室を縦横無尽に走り出した。

「待て姫！ くっ！ 姫こっちを見る！ ゴルゴーンアイ！」
「えっ？ なによ！ ……ちよっと！？ 何よこれ身体が！ 動かない！」

「あはは、時期に口すら動かなくなるぞ。これでゆつくりと『爆乳爆砕拳』が使える」

「……魔法名変わってるわよ！」

「——ゴホン。がははは食らえ『巨乳爆砕拳』ッ！」

魔王がそう言い、姫の身体に触れようとした瞬間。

「ッ！？ ぐあ！ 何だこの光は？！！」

「食らいなさい……」

「くそ？ 姫は何処だ……ガア！ ギャ！ ——バボラ！」

力なく倒れた魔王を見下ろす姫。

「はあはあはあ……久々に本気を出す破目^{はめ}になったわね」

そんな事を言っていると、王室のドアがゆつくりと開き。
中ボスが滑るようにして入って来た。

「魔王様、姫様。夕食の準備が……なんですかこのボロ雑巾は？」
「俺だ中ボス……」

「汚らしい布つきれが喋った！？」
「じゃ、じゃなくて魔王様でしたか？ どうしました？ 雑巾の真似ですか？」

「それなら渡り廊下でお願いします。丁度汚れていますので」

ヨロヨロと立ち上がる魔王、そして、服のホコリを手で払いながら、中ボスに言った。

「お前、それでも俺の従者……ん？」

「どうしました魔王様、やっぱり雑巾の真似を……え？」

魔王と中ボスの視線は魔王の胸部に当てられていた。

「魔王様はいつからそんな所に風船を仕込む趣味があったのですか？」

「あつ、ああああ。これはッ！ まさかッ！」

狼狽する魔王の視線は姫を追い求め彷徨った。

「ふふふ、アナタの後ろよ、魔王様。」

正直、初めてだから上手くいくか分からなかったけど、アンタが何度も同じ攻撃をやるから見たままを真似て見たけど。どうなるかしらね？」

「こっ、これは『巨乳爆砕拳』！？ 魔王様早く解除をッ！」

「わっ、分かっている。今やってる所だ」

「あと十秒」

「うわあああなんかカウントダウンしてるううううう！？」

「あと八秒」

「くっこれか！——あわわ、足が勝手に！？」

「あと六秒」

「ばっ！ 馬鹿ですか魔王様！？ それは『ざんかいせきほけん残悔積歩拳』ですよ！
アミバが受けたやつです！！」

魔王の足は、魔王の意志を無視して、後ろに向かって歩き始めた。

「あと四秒」

「うわあこれも最終的に爆散するではないか！？ 不味い！ 余計に爆弾を増やしてしまった！？！？」

「懺悔は終わった？」

「まだです！」

魔王の意志に従わない足。

魔王は王室のドアに向かって歩き、今まさに部屋から出ようとしていた。

取り乱す魔王に対して、中ボスは至って冷静に言葉を放つ。

「誠に残念ですが……時間です」

最後の瞬間、魔王は王室から廊下に出た。
魔王の悲鳴だけが廊下に響いた。

その後、魔王は三日ほど姿を晦^{くら}ましたが。何事も無かったかのように戻って来た。

第十話『姫とラブラブトーク!?!』

第十話『姫とラブラブトーク!?!』

「……中ボス、ロン。国士無双よ」

「第一局目でいきなりそれをやりますか……」

ジャラジャラ

「……………そうです。ロン。四暗刻^{スーアンコウ}」

「うわっ中ボスえげつないわね、地獄単機待ちっで……規格外なほどの運ね」

剛運飛び交う麻雀が行なわれている王室。

妹にB中ボス+小ボスLコンビ?。更に一人、場違いな雰囲気を出している者がいるが。

それを今、咎める者は居なかった。

皆、一度、局が始まれば何があっても動かない、という意味を沸々と感じさせるほどに殺気立っていた。

そんな手に汗握る、緊張感が漂う中に、一人空気の読めない男が現れた。

——バァン！！

「えー、では始まりました。第一回『姫とラブラブトーク！？』回。ポロリもあるかも！？」

魔王は勢い良く扉を開け、王室に入ると皆に聞こえるような、大きな声でそう言った。

……………

じゃんたく
雀卓を囲む者達は一切目を話さなかったが。

一人、賭博麻雀とばくに参加していなかった姫だけが反応した。

「ちょっと！ 何よ『姫とラブラブトーク！？』回って！？？
何勝手に始めてるのよ！ それにポロリなんて無いわよ！」

「ん？ ポロリするほど胸が無いと！？」

「アンタ、ホント。殺されたいらしいわね」

拳をワナワナと震えさせていたが。それを見ない事で無かった事にする魔王。

「おにいも唐突ね、まあいいわ。あっシザーマン、それロンよ」

小ボスと中ボスに妹。それに庭師^{シザーマン}……佐藤さんまで連れて来て麻雀か……。

シザーマン凄い負けてるじゃん！？ 自慢のハサミに 差し押さえ っ て赤い札付いてる！！！？

魔王は麻雀が行われている方をあまり見ないように視線を外し。
気まずそうに、一つ咳払いをすると、改めて『ラブラブトーク！
？』 回を始めた。

「……。——ゴホン、では改めまして。ズバリ聞きますが、姫の好きなタイプは？」

「トークって言うより質問ね…… まあいいわ。私の好きなタイプは、“私より強い人” よー！」
「…………… それ、なにガン。ムだよ」

「失礼ね、そんなに人外なほど強くないわよ、せいぜい、シャアザ○程度よ」

「それって最早、人外……ごめんなさい拳を下ろして」

危つく、頭を岩山^{がんざんりょうざん}両斬波で力チ割られる所だった……。

魔王は何気なく、中ボス達の方へ視線を流した。

「シザーマンさん、これでハコテンです。物の見事にトビましたね」

中ボスはそう言っているとシザーマンの持ち物から適当に見繕い、物品を奪った。
みつくろ

シャキンシャキン

差し押さえ と掛かれた札が付いたハサミをシザーマンは持ち、閉じたり開いたりしたが。

そのハサミを中ボスは無言で奪った。

「シザーマンさん。このハサミはアナタが負けたので私が貰ったものです。」

残念ですが、もうアナタの持ち物ではありません、私のです。勝手に触らないで下さい」

「……………」

「それも駄目だよ、シザーマン！ その服は僕が貰ったんだから！ タオルあげるからこれ巻いてなよ」

シャキン……

「だから、そのハサミは私のだって言ってるだろうがッ！！！」

「お前らホントに鬼だなッ！！」

見るに堪えなくなつた魔王が遂に声を発したが。

そんな言葉を尻目に、中ボスと小ボスは後ろに控えて居た。

怪しげな黒服の男に、ハサミと先ほどまでシザーマンが着ていた服を渡し。

金を受け取っていた。

「小ボスが八千円、私が七千円。——ちっハサミは高いかと思つたけど案外安値でしたね。

これだったら服の方を貰えば良かったです」

「甘いですね中ボスは。物の価値を測るのは大切な事ですよ」

「そうですね、小ボスの評価を改める必要があるようですね。今回ばかりは私の負けです。御見それしました」

「ふふふ、一番最初にぶつ飛ばした私は現金で二万ほど貰ったけどね」

「……………。——では改めて聞きますが、好きな食べ物は？」

「生き血」

.....

「.....冗談よ」

「冗談でもそう言うこと言うの止めてよおおおおおおおおお
おおおッ！」

姫が『生き血』と言った時、麻雀をやっていたはずの、皆の動き
が一斉止まったのは言うまでも無い。

「じゃあ何が好きなの？」

「肉」

「.....なんの肉？」

既に嫌な予感しかしない魔王だったが、恐る恐る聞いた。

「ウサギ」

「うわああああ怖えええ十六才のヒロインが好きな食べ物とは思
えないような答えだあああッ!!」

えっウサギって普通ペットで飼うもんじゃないの!?

少なくとも十六才の女の子が好物であげる物じゃないよね!?

「肉食系女子ね」

「……いえ、この場合は“リアル肉食系女子”と言ったところでし
ようか」

妹と中ボスが呟くように言ったが、小ボスは話を聞いて居なかつ
たのか。

まったく方向性の異なるような言葉を発した。

「なにになに？　ウサギさんの話し！？　僕もね、ウサギさん好きだ
よ……」

今も部屋で飼ってるだよ！！　凄く高くジャンプするからピョン
太って名前なんだよ！！」

小ボス話し半分しか聞いてないいいいい！？　小ボスお前は食用
にする為に飼ってる訳じゃないだろうに！！

食うって聞いたらぶっ倒れちゃうよ！！　ピョン太、天国までジ
ヤンプしちゃうよ！！！？？

「へえ、小ボスはウサギを“飼って”るのね？　私も小ボスの部
屋でウサギを“狩って”見ようかしら」

「うん、姫ちゃんが“買って”来てくれるんなら、僕が面倒見てあ
げるよ……」

「分かったわ、“狩って”あげる」
「ありがとー！」

うわああああ小ボスと姫の“かつて”のニュアンスが違う！！
 どう考えても姫の方は“狩って”のニュアンスだよ！！

姫の“かつて”の場合だと、小ボス！ お前のウサギちゃんに増えるどころか、減っちゃうよ！！！！

「姫ちゃんもウサギさん好きだったなんて、嬉しいな、今度見にお出でよ!」

「ええ、私、本当にウサギが“好き”なのよ。是非見に行くわ」

姫はそう言つと、ふふふ、と不敵に笑つた。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

二時間後、夕食での出来事。

テーブルに腰掛け、料理を前にした。魔王と中ボス、それに妹は血の気が引いたような青ざめた顔をしたいた。

「……おい、中ボス、なんだこの肉は？」

魔王はその“謎”の肉を指差しながら、中ボスに聞いた。
だが中ボスも同じように疑問を抱いていた。
その“謎”の肉は明らかに今まで食べて来た肉とは霜の振り方も、
匂いも、色合いも異なっていたからだ。

「すみません、今日は私、調理担当では無かったもので……
ですけど先ほど、クック佐藤に姫が謎の包みを渡しているのは目
撃しました」

「……それが“ピョン太”だったりはないよな？」

「あはは……さすがにそれは無いのでは……？」

中ボスは乾いた笑いで返事をしたが、正直、否定しきれないと言
った顔をしていた。

「おにい……ごめん、さすがにこれは食べられないわ」

「イヤ待て、これが……ピョン太と確定した訳ではないだろう……」

魔王達は姫と小ボスに視線を移した。

魔王達が青ざめている中。

それに引き換えて、小ボスと姫は美味しそうに“謎”の肉を頬張っていた。

.....

「うん、やっぱり自分で“かった”肉は、より一層美味しく感じるわね」

姫の言葉に小ボスを除く全員が凍りついた。

“かった”の漢字が“買った”であれば問題は無いが……“狩った”であれば……

結局、魔王達は“謎”の肉には一切手を付けず、残りは姫と小ボスが食べた。

「はあ、美味しかった……。——ピョン太」

！？

姫が小さく呟いた、ピョン太、という言葉が一体何を意味してい

るのかは、皆、考えない事にしたのだった。

第十話『姫とラブラブトーク!?!』 (後書き)

なんか最後はタイトルとかけ離れた内容になってしまった……
次回からは気を付けようと思うけど、きつと治らない……。

大金を掛けた賭博は罪になりますが、この世界には賭博法は無い
ので悪しからず。

第十一話『姫が魔法少女！？』

第十一話『姫が魔法少女！？』

「はあ……空を “ 不自由 ” に飛びたいな……………」

王座に座る姫の隣で、パイプ椅子に座る魔王。

そのパイプ椅子は、背もたれや、お尻の部分のスポンジは全て剥がれて、クッションとしての機能を全くと言って良いほど失っていた。

そんな椅子に座る魔王は、既に威厳いげんはまったくと言っていいほど感じられない。

ただのモブキャラ的な存在感である。更に悪く言うと背景。

「魔王？ アンタまた一段とバカになったのね。のび。だって、そんな事、ドラ。もんに頼まないわよ」

冷やかな視線が姫から魔王へと注がれる。

「だってさ、自由に飛べても楽しくないじゃ？」

「どんな基準で楽しくないか、楽しいのかを決めてるのは知らないけど。」

普通は自由に飛べた方が好くないの？」

姫も疑問に魔王は「甘いな」と返し説明を開始した。

「あんな、いつでも自由に飛べたらつまらないと俺は考える。

貴様だって好きな事をいつでも出来たらいずれ飽きるであろう?」

姫はすぐさま「一理あるわね」と返し、魔王は再び話を続けた。

「俺が言いたいのは、どんな物でもいつでも自由に出来たらある意味では不幸だと言う事だ。

まあ具体的に言うと、」

「空を飛ぶ為にまず。誰が、何に搭乗して、何時、何処で、どの位飛ぶのか。

更には何故飛行する必要があるのかを纏めた必要書類を航空局に提出する」

「なんか、急に不安な気分になったわ……」

「まあ、まだ序盤だ、黙って聞け。

それでだな、その書類を航空局の受付に渡し、三日ほど放置される。

そして、ミスに気がついた職員が慌てて上司に提出し、厳粛な審議の末に。

飛行許可が下りない　くらい不自由だと良い感じだ」

「許可降りて無いわよね!?　降りて無いわよね!?　不自由どころか飛べもしないじゃない!」

「まあ時には許可が下りないくらいが理想形だ、安易に空を飛べても興が無いからな」

「そんないい加減な体制だったら、緊急の時、困るじゃない」

「その時は金に物を言わせる!!」

「ワイ口通じるの!？」

「金で動かない組織など無い!!」

「汚い世界ね……」

「ああ……」

何故か二人は悲しそうに遠い眼差しで窓の外を見た。

「最近、思っているですけど、姫ちゃんも結構“変人”ですよね？」

小ボスはお菓子を食べながらそう言い放った。その言葉に姫はひどく焦っていた。

「ち、ちちち。違うわよ!!! 魔王! アンタが変人だから、それと喋る私まで変に見えるのよ!!! ねえ魔王?」

姫はまるで威圧するような目で、魔王を見た。

「あつ……あああ、ああもちろんだ。俺様が変人だから、姫まで変人に見えるだけだ!!」

「尻に敷かれてますねえ」

「「違う!!」」

「姫、同時に喋るなよ！　また揃ったではないか！！」

「アンタが言えた事じゃないでしょ！　……ちよつとまって、小ボスに笑われてる……屈辱だわ……」

項^{うなだ}垂れるようにして、姫は王座に座った。

「なに？　またおにいと姫の夫婦漫才？」

「頼む妹よ、これ以上姫を刺激しないでくれ……俺が困る……」

そんな、やり取りをしていると、中ボスが、滑るようにして王室に入って来た。

皆、特に気にする様子はなかったが、中ボスはまっすぐ姫に歩みよると、一つの紙を手渡した。

「ん、ありがと、中ボス。えゝなになに……『ドラマ出演のご案内』……ナニヨコレエ？」

何故か語尾が片言になる姫、俺達は姫の方に集まり、魔王は皆に見える位置に紙を移した。

「姫がドラマ出演？　それも主演？　なにこれ悪質なイタズラ？」

妹がそう言うのと、中ボスは首を横に振り、説明を開始した。

「いえ、正式な依頼です。受けるかどうかは姫様次第ですが、ギャランティーはかなりいいですね」

姫は目を輝かせながら、出る！ 絶対出る！！

と言い、中ボスもすぐさま携帯電話を取り出し、テレビ会社に電話した。

- - -
- - -
- - -

台本を渡られた辺りから、雲行きが怪しくなっていたが。

撮影スタジオに着き、衣装に着替えた姫を見た時、魔王は、やっぱり、という言葉しかでなかった。

「これは……どう言う事よ……」

コメカミに青筋を浮かべながら、監督と思しき男を睨む姫。

「ぶっ、あははははは。何よ、『魔法少女ランページ・姫』って！
！ ぶっぶはははははは」

久々に盛大に笑う妹の所為で、既に爆発寸前の姫。
これ以上刺激すれば、撮影スタジオが吹き飛ぶほど暴れるだろう。

まさにランページにふさわしいと言えよう。
暴れまわる

ドが付くほどの可愛らしいフリルの着いた衣装に袖を通す姫。
確かに……確かに、似合ってはいるのだが、正直痛かった。

「よくお似合いですよ、姫様」

中ボスは頬がヒクヒクとしていたが、あれは笑っている訳でも、
馬鹿にしている訳でも無い。

どちらかと言えば、『この仕事を持ってきたのは私……もしや、
殺される！？』という不安からくる表情だった。

「すいません、撮影の方、始めてもいいですか？」

若いスタッフが姫に近付き、問う。

まだ新人なのだろう、仕事への情熱があふれているのか、元気よ
く姫に聞くが、

そんな、声に姫はゆっくりと振り向く。

「ヒイ！！」

姫の睨みに、短い悲鳴を上げ、若いスタッフは口から泡を吹き倒
れた。

ココから立ち直れたらきつと彼は今日という日の経験を生かし、
強く生きていけるだろう。

立ち直れない確率の方が高そうだが……と考えながら、魔王は心
の中でそつと合掌した。

「ふん！ まあいいわ、もう契約書にサインしちゃった訳だし、や
るわよ」

そう言い、姫とスタッフ達は撮影の準備に取り掛かった。

「がはははは、貴様が魔法少女ランページ・姫か！！ 小娘と聞いていたが、こんなにも貧相だとはな！！」

撮影がスタートしてからはマシな表情になっていたが、先ほどの化け物の台詞で再び青筋をコメカミに浮かべていた。

……… なんだこの音は？ 破砕音？ まさかここは魔界では最新のスタジオだし、そんな事はないか？。

最早、ドラマではなく、特撮だよな……と魔王は思いながらも、その様子を黙って見続けた。

『ぐあはははは、掛かって来い！ ランページ・姫よ！』

姫は、とう！、と短く言いながら、怪獣とやらの近くに下りた。

『わっ、わわ、』

何故か若干、口ごもる姫を疑問に思い、魔王は手に持っていた台本へ、視線を落とした。

！？ なんだこの台詞は！？ こんな台詞を姫に言われるというのか！！！？ 命知らずもいいところだな。

『わわ、私の、胸は小さくても、そんな私の胸の中には子供達の夢が沢山詰まっているのよ！！』

うわ……、と声に出してしまったのは魔王だけでは無かった。
中ボスや妹、更には小ボスですら哀れみの眼を向けていた。

『やーい、貧乳！ 貧乳！！』

子供のように叫ぶ怪獣。

正直、このドラマ？ は、どの年層の為に作っているのか些いさか疑問であった。

『……………』

顔を下げ、肩をふるふると震えさせる姫。
今にも暴れまわりそうなほどだった。

『くっ、食らいなさい！ ランページスティク！！』

力任せに振り下ろされるランページスティク。

そのスティクは怪獣？ の血で赤く染まり、姫自身の、その血を浴びながらも笑いながら、スティクを振り下ろし続けた。

結局 魔法少女ランページ・姫 の放送は叶わず。

その映像はお蔵入りとなったが。

現在、姫の行動にインスピレーションを受けた、あの時に若いスタッフが新しいスタジオを立ちあげ。

暴虐少女ランページ・姫 と名前を変え、映像化していた。

当然の事ながら、その作品には姫自身は出演していない。

だが、その作品の事で、今、魔王城にまたしても問題が起きていた。

「私が、その 暴虐少女ランページ・姫 のラスボス役で出演！？」

魔王城に響く、姫の声。

当然、前の事で懲りた姫は断り、企画は頓挫したが……。

『暴虐少女ランページ・姫の前に現れた、最後の敵……それ名は……魔法少女ランページ・姫!？』

その暴虐さはまさに最——」プツッ

「……………」

「……………テレビ見てる時も油断ならないわね」

「ああ……………」

テレビを見ている時に流れたコマーシャル……、魔王は慌ててテレビを消し、姫のため息を吐く。

一体誰が姫の代わりに出演しているかは定かでは無いが、姫も魔王もあまり深く、考えない事にしたのだった。

E N D

第十一話『姫が魔法少女！？』（後書き）

魔法少女……あのフリフリ可愛いよね♪

でも、僕の脳内では、姫も大体は可愛らしいタイプの服を着ていますよ。

第十二話『面白い事は“起こす”もの!？』

第十二話『面白い事は“起こす”もの!？』

いつものように暇を持て余している魔王は、寂しさに耐えかねて、中ボスの部屋に出向いていた。

魔王に代わって、政務に追われる中ボスは、魔王に構っている余裕は無かった。

結局、何もする事が無いのか、魔王は呟くように言った。

「面白い事“起こそう”かな」

「……………。——あつ？　すみません何か言いましたか？」

今まさに部下である中ボスに、軽い無視を受けた魔王。

魔王が涙目になってから初めて反応する所を見ると、無視と言うより、眼中に無かった、と言った方が正しいかもしれない。

「そうか聞いて無かった。まああれだ。面白い事“起こそう”かと思ってね」

「面白い事“起こそう”？　面白い事“起きない”かな、とかではなく？」

書類から目を放す事無く、中ボスが訊く。

その反応に気を良くしたのか、堰^{せき}を切ったよう話し出した魔王。

「俺はな。

平平凡凡な主人公が、ある日、ハプニングに巻き込まれる。

という、テンプレのようなストーリーには飽き飽きしているのだ！

」！

「殆どの二次元作品を否定しましたね。魔王様の好きなギャルゲートかもそんな感じではないですか」

魔王は、座っていた席から勢いよく立ち上がり「だからだよ！！」
と言い、中ボスに詰め寄った。

「だからそこ、俺は主人公からアクティブに動くストーリーが好きなんだ！！

貴様ら！！

どんなに願っても異世界に飛ばされるとか、美少女が突如現れるとか……そんなものは無いんだよ……」

「……唇を噛み締め、目からは悔し涙を流して言う事ですか、魔王様」

中ボスの言う通り、魔王は下唇を噛み、硬い握りこぶしを作り。
目からは、今にも血の涙を流すのではないかと、思うほどの悔しさと悲しみの色に染まっていた。

「俺だって昔は憧れたさ……」朝起きたら、隣に謎の美少女が寝て

いる！？』という演出に……

今だって時々、ベットの端で寝て。いつでも美少女が寝て居ても良いように対策していたくらいだッ！！」

「そんな事していたのですか。」

ですが、そのような事をしていたのであれば、尚^{なお}の事、受動的な主人公が嫌い。

と言うのには些^{いさ}か矛盾を感じますけど」

「だがな！！ 待っていても美少女は『朝起きたら隣に！？』的な事は起きないんだよッ！！」

「実際に起きたら、普通に住居侵入罪ですよね」

「そう！！ だから、俺は自らそれを“起こす”！！」

「起こすと言っても。具体的に、何をするのですか？」

手で、少しだけ下がっていた眼鏡を元に位置に戻しながら中ボスが問う。

「美少女を何処から連れて来て、隣に置く！！」

「普通に誘拐罪ですね」

「……………」

「黙るのも結構ですけど。態々、リスクを冒して何処から連れて来なくても、姫様でも隣に置けばいいのでは？」

「例えば、クマのプーさ。が好きだったとしても、実際のクマを隣に置いて寝たいと思うのかお前は？」

「仮にも姫様を猛獣扱いですか。あつ、姫様、おはようございます」

中ボスの言葉に、魔王は素早く態勢を変える。

「どうかお許しください！！！」

「……— すいません、魔王様、今の言葉は嘘です。

まさか『姫様』と言った瞬間に素早く扉の方を向き、光の速さで土下座態勢に移行するとは思いませんでした。

目を見張るほどのゴミクス精神ですね」

魔王は安心しきった顔で、土下座の態勢を崩し、中ボスに再び向き直った。

と、その時。

「中ボス、おにい見かけなかった？」

突如、妹が中ボスの部屋に“ノック無し”で入って来た。

魔王は妹の方を向き、そして再び中ボスの方へ視線を移したが、そこには誰も居ないように“見えた”

「あれ、おにいただけ？ 中ボスは？」

「お前の位置からは机しか見えないだろうが、机の下に“避難訓練”見たく、隠れているぞ」

その言葉に妹は机の方に向かい、回り込んだ。

「何してんの中ボス??」

「……………“避難訓練”です」

「そのまま、快樂^Bの世界に“避難”させてあげようか？」

不敵に笑う妹の顔に、中ボスは顔を青くした。

「それで、お前は何をしに来たのだ？」

魔王の言葉に、妹は中ボスの下を一旦離れ、魔王の方に近付いた。

「なんかね、今日クック佐藤が急病で休むそうよ」

中ボスは忍び足で、妹からなるべく距離を取るよう移動し。

魔王のやや後方の位置に付くと、妹の眼を気にしながらも、口を開いた。

「……、随分急ですね。私はそんな話は聞いていませんが？」

「さつき連絡が来たところよ、困るだろうからすぐに伝えようと思ってね」

中ボスは妹に「ありがとうございます」と短くお礼を述べた。

「それと、クック佐藤からの電話を取ったのは姫よ。そして悪い事に今、姫は厨房よ」

「妹よ、なぜ姫を一人にした！？ いやいやそれよりも。」

何故か、面白い事“起こす”前に、あつちから面白い事が“起き

明らかにこれは「ヒロインの飯は不味い」フラグだろう……!」

あれほど自分で面白い事を“起こす”と言っておきながら、不運と言う名のハプニングが勝手にやって来た魔王。

「とにかく、様子を見に行くぞ」

魔王の言葉に全員が同意した。

1	1	1	1
2	2	2	2
3	3	3	3
4	4	4	4
5	5	5	5
6	6	6	6
7	7	7	7
8	8	8	8
9	9	9	9
10	10	10	10
11	11	11	11
12	12	12	12
13	13	13	13
14	14	14	14
15	15	15	15
16	16	16	16
17	17	17	17
18	18	18	18
19	19	19	19
20	20	20	20
21	21	21	21
22	22	22	22
23	23	23	23
24	24	24	24
25	25	25	25
26	26	26	26
27	27	27	27
28	28	28	28
29	29	29	29
30	30	30	30
31	31	31	31
32	32	32	32
33	33	33	33
34	34	34	34
35	35	35	35
36	36	36	36
37	37	37	37
38	38	38	38
39	39	39	39
40	40	40	40
41	41	41	41
42	42	42	42
43	43	43	43
44	44	44	44
45	45	45	45
46	46	46	46
47	47	47	47
48	48	48	48
49	49	49	49
50	50	50	50
51	51	51	51
52	52	52	52
53	53	53	53
54	54	54	54
55	55	55	55
56	56	56	56
57	57	57	57
58	58	58	58
59	59	59	59
60	60	60	60
61	61	61	61
62	62	62	62
63	63	63	63
64	64	64	64
65	65	65	65
66	66	66	66
67	67	67	67
68	68	68	68
69	69	69	69
70	70	70	70
71	71	71	71
72	72	72	72
73	73	73	73
74	74	74	74
75	75	75	75
76	76	76	76
77	77	77	77
78	78	78	78
79	79	79	79
80	80	80	80
81	81	81	81
82	82	82	82
83	83	83	83
84	84	84	84
85	85	85	85
86	86	86	86
87	87	87	87
88	88	88	88
89	89	89	89
90	90	90	90
91	91	91	91
92	92	92	92
93	93	93	93
94	94	94	94
95	95	95	95
96	96	96	96
97	97	97	97
98	98	98	98
99	99	99	99
100	100	100	100

ところ変わって厨房。

そこでは忙しく夕食を作る姫の姿があつた。

「えーと、どれどれ……何これ？ 目玉？ 栄養価は高そうね」

そう言い、姫はその目玉？ を鍋の中へ放り込んだ。

先ほどから、幾重にも渡り、手当たり次第、用途不明の謎の食材が鍋に放り込まれていた。

既に鍋の中には五人分はどころか、二十人分にもなるのではないかと思うほどの大量のスープが出来上がっていた。

「メインが無いわね、やっぱりメインは肉よね！ ……うーん、特に無いみたいね……そうだ！」

姫はその言葉を最後に厨房を去り、小ボスの部屋へ向かった。

「あつたあつた。良かったはちゃんとあつて」

厨房に戻ると、先ほど手に入れた、生きの良い食材を捌き始めた。その手慣れようは、この食材に手慣れた者だけが出来るスピードだった。

「でもこの量だとみんなで分け合うに足らないわね。仕方ない、スープにブチ込むか」

女の子らしからぬ言葉を呟きながら、姫はスープに肉を入れた。

と、その時。

「姫！ フリーズ！！ そこを動くな！ 何も触るな！ 何も作る

な！」

魔王が勢い良く厨房に入ると、開口一番にそう言い放った。

「ああ……もう遅かったようです」

散らかった調理道具を見つめながら中ボスが呟いた。

特に、血だらけになったまな板の方に視線が集中していた。

「一体……何を捌いたのだ!？」

「ヒ・ミ・ツ」

全然可愛くも無くともねえよ、と言いつつだったが、その言葉を魔王は呑み込んだ。

- - -
- - -
- - -
- - -

後日、原因不明の謎の集団食中毒を起こした魔王城に我々は来ていた。

彼らは、我々のインタビューに^{しつこく}渋々ながら引きつけてくれた。

匿名希望。『中ボス鬼畜攻めの小ボス健気受け』さん。

Q

《原因は一人コックが作った料理だと聞きましたが、どのような料理だったのですか？》

彼女はその時に情景を思い出して居るのか、顔を土気色にしながらも、言葉を紡いでくれた。

A、

《口の中に入れた瞬間にまず感じたのは、『汚泥』？ と言った口触りだったわ。

口いっぱいに広がる酸味と何とも言えない泥臭さ。それにあの見た目……紫よ！ 紫！！

それも、何故か食べている途中で、それはもう鮮やかな蛍光色の緑に変化したのよ！！

あれは最早、兵器よ！ 兵器！！ マジックウェポンじゃなくて、バイオウェポン！！》

彼女はその言葉を最後に、ハンカチで口を覆い隠し、トイレへ駆け込んだ。

匿名希望。『何故、現・魔王はこんなにも馬鹿なのか？ 一回死んでくだらないかな』さん。

Q

《先ほど、アナタより先にインタビューに答えてくれた方は、見た目がおそろい物だった。

と仰っていましたが、どうして食べようと思ったのですか？》

彼は病的なほどにやせ細った顔、^{しか}顰め。答えた。

A、

《確かに、見た目は“あれ”でしたが。

如何せん姫様が相手なので、一か八かで食べました。まあ、結果はこれです》

そう言いながら彼は手首に刺さっていた点滴を見せた。

彼は、その言葉を言った後、ベット脇に置いてあった錠剤が入ったボトルを手に取った。

そして、三十個ほど口の中へ放り込み、ボリボリと噛み砕いた。

Q

《それはなんですか？》

A、

《——胃腸薬と言っておきますよ》

彼の言葉には少し含みがあったが、我々は深くは追求しなかった。

匿名希望。『最近、俺の扱いが酷い。特に、俺の前にインタビュー受けたやつ。お前だ！ お前！』さん。

Q

《ロリコンと聞きましたか?》

A、

《どちらかと言えばお姉さまタイプの大人の女性がタイプだ》

Q

《テンプレのような、王道設定には飽き飽きと言っておられましたが、

“義理”の妹が居る時点で十分、王道設定だと思えますけど》

A、

《だからと言ってB.L^{ボーイズラブ}好きの妹は欲しくは無かった》

Q

《王道展開である、『ヒロインの飯は不味い』の展開になった訳ですが、ねえねえ、今どんな気持ち?》

A、

《心の中で必死に『もしかすると、ヒロインの飯は意外や意外、美味い』

という、希少展開も期待したが、駄目だった》

Q

《『最近、勇者来ない』と言う声が多数寄せられていますが、どうお考えですか?》

A、

《勇者が来るか来ないかは、俺がどうこうする事ではないだろう。あと、何故、俺の質問だけこんな個人的なんだよッ！！？》

我々はこれ以上の質問は危険と思い、急ぎ撤退した。

匿名希望。『ピヨン太行方不明』さん。

彼は城内の中庭などの草むらを探りながら、私達のインタビューに答えてくれた。

Q、

《料理を食べた中で、唯一、病院に担ぎ込まれなかったのがアナタだと伺い^{うかが}ましたけど。

食べても異常は無かったのですか？》

A、

《ん？ ああ、姬ちゃんの料理の話ね。

うん美味しかったよ。色々な色に変化するスープでね！！ 凄い
の七色に光るんだよ！！

トイレで^{規制音}ピーした後も、その^{規制音}ピーがね！ 光ってたの！！》

彼はそう言いながら、嬉しそうに排泄物の話をしたくれた。

料理を食べたあとも平然としていたと言われている彼に、あまり
有力な言葉はでないだろうと思いい我々は引きあげた。

《ねえねえ、ピョン太見つけたら教えてくれない？ 何処かに行っちゃってね》

彼の言う、『ピョン太』とやらが何かは知らないが、我々はピョン太を捜索に来た訳では無いので適当にごまかし去った。

匿名希望。『私の飯が食えないって言うの？』

今回、私達は、この集団食中毒事件を起こした、コックに直接話を訊く事に成功した。

Q

《魔王城で住み込みで働いている給仕やその他、七名を病院送りにした訳ですけど、それに対して何か弁解はありますか？》

我々の質問に彼女はまったく悪びれる様子は無く、淡々と語った。

A、

《世界がそう望んだから、私の料理は不味くなった、それだけよ。全ては作者^神の意思よ》

彼女は、諦めたかのような顔でそう答えた。

まるで、彼女の料理はどんな事しても不味くなる事が決定しているかのような口ぶりだった。

《それで、アンタ達も私の料理を食べに来たの？》

その後、インタビューを行った、記者達の断末魔だけがボイスレ

コーダーには残っていた。

我々の下には、差出人不明の宅配が届き。

その中には、記者達が残したと思われる、メモとボイスレコーダーが入っていた。

今は行方不明になっている記者達が、命がけで手に入れたのであるう、この情報。

週刊誌のトップで出せた事を嬉しく思う、並びに、記者達が逸早く、見つかる事を切に願うばかりだ。

「……………」

魔王は今読み終えたばかりの、週刊誌、そつと焼却炉に投げ込んだ。

「エロゲの続きやるか!!」

そつ言い、魔王は王室へと帰って行った。

第十二話『面白い事は“起こす”もの!?’ (後書き)

読者「ふむふむ、作者、落ちは、落ちは何だ？」

作者「あ？ねえよそんなもん」

ギアーズ・オブ・ウォー好きにしか分からないネタを言ってしまった……

気になる方は プラン B とかで調べるといいです。たぶんすぐ出ます。

第十三話『最強の勇者襲来！？』 予告編（前書き）

予告編と書いてありますが、普通に本編です。

ただ、この話は凄く長めになってしまったので分割するので、『予告編』

と『本編』で分けます。

ちなみに今は少しだけまだ書いてる途中ですので、その『本編』と言う方も二つほどに分けるかもしれません。如何せん長すぎます故それと、この回『最強の勇者襲来！？』は未だ書き終わっては居ません。

なのでもしかすると一度消す可能性がございます、ご了承ください。

第十三話『最強の勇者襲来！？』 予告編

第十三話『最強の勇者襲来！？』

「ふわぁ〜、暇だな〜」

大あくびをしながら、携帯ラジオのイヤホンを外し、競馬新聞を畳む魔王。

汚らしいパイプ椅子に座る魔王は、既に魔王としての威厳は無かった。

「いくら暇だからって言っても、朝から競馬って……」

姫が呟くように言い、呆れたような目で魔王を見た。
そんな姫は先ほどから何もする事が無い様で、愛用の大鎌を磨いているだけだった。

そんな中、中ボスだけが、忙しく働き。
今も魔王の読み終わった競馬新聞を綺麗に畳み直し、片付けていた。

「仕方ありませんよ、今は平時ですし。
大規模な軍事演習の予定も控えていますけど、それはもう少し先ですし——」

「軍事演習？」

中ボスの言葉に姫は眉を一つ動かし反応した。
姫は、聞いていない、と言わんばかりに中ボスに問う。

「はい、今月末に大規模な軍事演習があるのですが、今回は『姫様』
みたいな単機を仮想敵としています」

「ん？ どういう事？ アンタ達は多数で相手は一人なの？」

「そうです、ですが今回、姫様にも妹君にも防衛側として回っても
らいます」

姫は不思議そうな顔をした。

そこでようやく魔王が席を立ち、中ボスに代わり説明をした。

「ああ、今回の防衛戦力は、魔王軍最新鋭部隊を揃えてある。
魔族の技術力の結集である。魔族の最新鋭兵器『装甲人形^{アーマードル}』だ」

「何よそのアーマードルって？」

姫の問いに魔王は、不敵に薄い笑みを浮かべた。その笑みは狡猾
な肉食獣を思わせるそれだった。

その表情に、姫は引いていたが、魔王はそれを気にする様子は無
く、話を続けた。

「俺と中ボス、それと余計だったが妹の三人の監修を元に作り上げ
た最新鋭の兵器だ！！」

暗殺や小規模戦闘をコンセプトに設計したが、あれは凄いぞ。
サイズは小柄な人間程度だが、十トン程度の物だったら平気で持
ち上げるぞ。

単機でも俺や中ボス、それに小ボスを苦しめるほどだ。それが何と十機も配備するのだぞ！！」

ガハハ、と高笑いを浮かべる魔王をよそに、中ボスが話し始める。

「確かに、私と小ボスは苦戦しましたが、魔王様は手も足も出なかったではないですか……」

まあいいですけど。

まあ多少大げさな感じがしますが、それでも十機相手では姫様も妹君も、まず勝てないでしょう」

「へー凄いじゃない——」

と、その時、突如、城が小さく揺れる。

地震か！？ 一同、思い、席を立った時、王室のドアが勢い良く開く。

「おにい、大変よ、“勇者”よ！！ それも凄い強いの！！ しかもイケメン！！！」

妹の言葉に、全員が沈黙するなか、小ボスも妹に続き、王室に入る。

「妹ちゃん！ 魔王ちゃんインパクトまだボコボコにされちゃったよ！！ 今度は二秒で三機喪失だよ！！」

子犬を配置したつてもう少し時間稼げるよ！！」

小ボスの言葉に凹む中ボス。

何気に中ボスに向かって、毒吐いたよな小ボス……。

「兎に角、中央司令室向かうぞ、話しはその途中で聞く」

《了解！！》

全員の声が揃い、前回とは違い、同時に言う事に成功した姫は、何故か、したり顔で魔王の方を見た。

「にやにやするな。気色悪い——グハア」

「気色悪いって何よ！！」

「姫様、寸鉄すんてつで額を打つのはどうかと……と言うか、いつも掌に隠しておられるのですか？」

「乙女おんなの嗜たしなみよ」

そう言い、姫は司令室へと向かった。中ボスと小ボスも、肉塊と化した魔王を背負い、後を追った。

第十三話『最強の勇者襲来！？』 予告編（後書き）

予告編はここまでです。

「えっこれだけ？」と思う方が多いでしょうが、本編の方がこの5倍ほどの文章量となっていますので。分割は必須と思い、切りのいい所で分けさせていただきました。

本編は未だ書き上がっておりませんが、金曜までには本編（たぶん2つ程度には分けられるのでは？）を投稿したいと思っています。

ちなみにこの後書き含め、前書きの方も、本編投稿後は変えますので、今回ばかりは、この長ったらしい前書き、後書きをお許しくださいorz

本編投降後に文章を本編に合わせて少しいじる場合があります

第十三話『最強の勇者襲来！？』（前書き）

長い上に、ちと真面目回などでコメディが無いです。

第十三話『最強の勇者襲来！？』？

第十一話『最強の勇者襲来！？』？

司令室に入ると、魔王は中央モニターを見上げた。

魔王は、そこに映し出された男の顔をじっと見つめた。

その男——勇者は、短めの蒼い髪に、男物の白い着物を着た若い男だった。

整った顔立ち、開いているのか分からないほどの糸目。

その様な風采ふうさいに、腰に長剣、それと同じ場所に半分ほどの小さな剣を身に着けていた。

魔王はモニターをじっと見ながら、ふとある所が目についた。
注目したのは、勇者の腰にある長剣の鞘さやだった。

今は剣は鞘に納められているが、その鞘がやけに細い。

あの鞘の細さから考えて、刀身は更に細く、鞘からも、その刀身の細さが見てとれた。

鞘の形状から、魔王は刀身の細さがある程度見立てていた。

人間界の島国に聞く、“日本刀”と呼ばれる種類に酷似している。
だが、魔王自身も、その“日本刀”を文献ぶんけんなどでは無く、実際に現物を手に取った事があった。

しかし、勇者が持っているソレは、明らかに魔王が見た物より細かった。

剣を鞘から抜く瞬間に、ほんの少しでも迷い——ミスがあれば、あの刀身は折れる。

それだけは魔王も分かった。

その剣を愛刀として選んでいるのだ。

あの勇者の技量は武器一つ取っても、他の勇者とは一線を画す^{かく}ほどの存在なのだろう。

「おお、それは確かにイケメンだ。それに得物^{えもの}は“日本刀”か、中々の技量を持っているのだろう」

若干、熱を帯びた視線を送る妹、だが、姫の視線はいつも通り冷やかな目だった。

それを疑問に思ったのか、魔王が問う。

「どうした姫？ イケメンだぞ？ それに勇者だ、魔王ちゃんインパクトを二秒で三機倒すほどだ。きつとお前より、強いぞ？」

「……——えっ？ ああ、その事ね。

^{フォース}剛力はすごいものだけど、^{アーツ}技術があつての力よ。

まあ妹ちゃんほど桁違いなら別だけど。

これじゃあ、力に踊らされるっているって感じで嫌なのよね」

「わがままなやつ……——ッ！」

そこまで言ったところで、姫の一睨みで、すっかり委縮してしま
う魔王。

「それに……あの“勇者”なんか見覚えがあるのよね」

それはどういう事だ？　と言わんばかりに姫を見る魔王。

「うーと、パパの……あ、国王の事ね。」

そのパパの護衛をやっていたはずよ彼」

「その護衛が何故魔王城に？」

「さー。遊びに来たって訳では無いって事は確かね」

「それで、この“勇者”は強いのか？」

姫は何故か眉を顰^{ひそ}め、不思議そうな顔をした。

明らかに、何か納得していない、と言った表情だった。

「うーん。それがね、私も二回ほど手合わせしてもらったけど……
まったく言っていないほど勝負にはならなかったわ」

「ん？　それはお前が、勇者と戦って、まったく手も足も出なかつ
たという事か？」

「逆よ、逆。確かに技術は凄^{アーツ}いけど、剛力^{フォース}がいまいち。とてもじゃないけど、私に勝てるような強さは無かったわ、まあそれでも王都では最強クラスでしょうけど」

魔王はその言葉に、やや引っかけかりを覚え口を開いた。

「ん？ つまりお前が手合わせした頃の勇者はアーツはあってもフォースは無かった、と言うことか？」

「ええ、アーツのキレは凄^{肉薄戦}かったわ。

私が超接近戦を使いながらも、攻撃魔法を駆使するのは彼の真似よ。

でも、本当におかしいわね。今の彼の戦いを見ると、飛躍的に攻撃力が上がってるのが解るわ」

「魔王様！ セントリーガン全滅しました。もう後がありません」
無人機銃

小ボスの言葉に、これ以上悠長に話している余裕が無いと悟り、魔王は目前に迫る敵に集中した。

「雑談は後だ。今は目の前の敵に集中しろ。姫が知っていた頃と比べ、敵の“勇者”は高い戦闘力を持っているようだ。

各自、敵の戦闘力は未知数だ。油断はするな」

「それで、どうやって倒すのよ、あの“勇者”」

姫の疑問に中ボスが、席を立ち、発言をする。

「折角です、アーマードールを使ってみる、というのはどうですか？」

中ボスの言葉に、姫は、うゝ、と唸りながら少し考えると、口を開いた。

「魔王ちゃんインパクトがまったく役に立たなかったのに、そんな兵器で勝算はあるの？」

「あれは元より、多数を想定して、防衛兵器です。アーマードールは元々少数を仮想敵とし、設計しました。

勇者が単独で来て居るのです。またとないチャンスだと私は考えます」

「おっし、妹よ、アーマードール出せるか？」

姫の睨みから早くの立ち直ったのか、魔王が妹の方を向き、質問した。

妹も、イスを回転させながら、魔王の方に向き直り答える。

「もちろん準備万端よ、Aプログラムも正常に稼働中よ、外装はまだ初期状態のままだけど」

「構わん、二機ほど出せ」

魔王の言葉に妹は短く答え、再びコンソールを指で叩く。
すぐさま、中央モニターには、アーマードールが入っているカレ
ージの映像が映る。

「――！？　ちょ、ちょつと！！！？　何よあれ！！」

姫の問いに、魔王は、「姫」と答え、モニターに視線を戻した。

「何よ！？　なんでデザインが私なのよ！！　……えっ？　なんで
水着なの！！　えっ？　今度はナース服？」

まだガレージの中には、婦人警官やドレス姿。
体操服に魔法少女ぽい服を着た物まで、色々な『姫』が見える。

「説明しなさいよ魔王！！」

魔王の襟首^{えりくび}をつかみ、ガンガンと揺らす姫。

気を失う直前に、慌てて、その手を振り払い。
ゲホゲボ、と咳き込みながら、姫の方を見て、渋々、話し始める。

「ガバツ、ゲホゲホツ……貴様！　本気で首を絞めおったな！！
まあいい、お望みとあらば説明してやろう」

魔王の言葉に、姫は目で、続きを促し^{うなが}、魔王の、咳払いを一つし、

説明を開始した。

「ゴボンツ。兵器とは目で恐怖を与える事が必要な事は今までの戦争が証明してくれている。

性能は元より、目で恐怖を与える事によって、敵の士気は落ちる。それを期待してこのデザインだ」

「それはアンタが勝手に私の事を恐れているだけじゃない!!」

「いや、確かに俺は姫の事は怖い、それはもう、目が合うだけで少しチビるほどに」

「……恥ずかしいわねアンタ」

姫がボソツと小声で言うと、魔王も「うるせえ」と悪態を吐きながら、話を続けた。

「他にも理由はある。

たとえ、姫をよく知らない奴でも、女子供を躊躇なく攻撃できる者は少ない。

現に、テスト段階で俺達が対戦した時にも……あーその……」

突然、口ごもる、魔王に、姫は一瞬不思議がるが、すぐさま、合点が言ったのか、口を開いた。

「あーなるほど、アンタ達はその『アーマードール』とやらのデザインが私だから、苦戦しちゃったのね」

何故か嬉しそうな姫に対して、中ボスは淡々とした言葉で、一つの事実を伝えた。

「確かに、私の小ボスは姫様に似ているという事で苦戦はしましたが。魔王様は少し違った様子でしたよ」

どう言う事？ と言いたげな姫の顔に中ボスが更に言おうとしたが、魔王が慌てて会話に入る。

「いや！ 俺もお前らと同じ理由だぞ！！ 俺もデザインが姫だったからやり辛くて、やり辛くて」

中ボスは半ば呆れながら、そして、少し強引に話し始める。

「あのですね！ どう考えてもあれは。

『姫をどうやっていたぶってやるうか！』という考えのもとに戦闘していらっしやいましたよね？

私はアーマードールの回路を焼き切った事で外装にまったく傷を付けずに停止させました。

小ボスも首のうなじ付近にある、プラグ部分だけを綺麗に破壊しました。

ですけど、魔王様は火系の大魔法ばかり駆使し、アーマードール

の外装は丸焦げ。

外装だけでは活動を停止しないアーマードールは攻撃を続行。
ですが、魔王様は魔力切れでボコボコにされただけではないですか？」

中ボスは口早にそう語ると、私はこれで、といい席に着いた。

「ねえ魔王？」

地獄の釜を開けたかの様な、地の底から響く声が魔王を呼ぶ。
今、その地獄の釜を覗けば閻魔様^{えんま}にだって謁見^{えうけん}する事が叶うはずだ。

「そんなに私を『丸焦げ』にしたい？」

「めめ、めっ滅相も無い！！」

可愛くて、愛くるしく、（胸が）小さくて美しいく、チャーミングな姫をにそんな事をしたい何て、思ってもいませんよ！！」

「胸が小さいってなによ！ また胸の話題がアンタはああああ」
「はっ！？ 俺とした事が、心の声が表に出ていたか！？」

姫によって、魔王がぶっ飛ばされる直前、中央モニターに動きがあった。

「アーマードール、“勇者”を捕捉しました」

その小ボスの声で、全員が、モニターにくぎ付けになる。

最終ゲートの扉を開け、勇者がゆつくりと城内に入る。

そして、勇者の目の前に一人の水着姿の女性が現れる。

女性の唇が微かに開き、言葉を放つ。

《お兄ちゃん……》

……………。

何故か中央司令室内に響く、『お兄ちゃん』という場違いな声。
その声に、よく似ている者に視線が自然と集まる。

「えっ！？ 何よ！！ 私そんな事いつてないわよ！！」

うるたえる姫に対して、俺達は冷ややかな目を向けた。

だが、アーマードールのプログラム担当である、妹だけが理解する。

その姫の方に向き直り、口を開く。

「あれはアーマードールの合成ボイスよ」

魔王は、声まで姫とは芸が細かいと思い、詳しく聞こうと思ったが、

モニターに更なる動きがあり、開きかけた口を閉じる。

《貴方は！？ 姫様ではございませんか？

今は、敵城である、魔王城の城内故、挨拶は省かして戴きますが、手前は、貴方のお父上である、国王の勅命で参りました。

さつ、私と共に国王の元へ帰りましょう！！》

勇者が声を張り上げながら答えたが、アー姫マードルは聞く耳を持たないと言わんばかりににじみよる。

《お兄ちゃん》 《お兄ちゃん》

ステレオで耳に届く『お兄ちゃん』と言う呼び掛けが聞こえ、勇者が慌てて周りを見る。

そこに居たのは、二人……いや、二機の姫の姿だった。

《姫様が二人！？ 驚きました……。国王は娘は一人だと伺うかがっておりました。が。

瓜二つの、隠し子が居らっしゃったとは……》

勇者の言葉に、「馬鹿じゃないのー！」と物凄い勢いでツッコミまくる姫。

それを魔王は、どうどう、と馬のようになだめる。

《とにかく、皆さん早く逃げましょう。いくら私でも二人を同時に護る事はできません故》

勇者は、自分が着ていた上着を水着姿の姫にそつと掛け、姫の手を引いた。

だが、いくら力を掛けても姫の身体はその場を動かなかった。

それを疑問の思ったのか、勇者は振り向き、姫（水着バージョン）の方を見た。

姫は不敵に笑い。突如、勇者に腕に抱きつく。

《！？ 何をなさるのですか！？ まさか催眠術か何かを？！》

不安の思った勇者が、他の姫達を見た。

姫達と勇者との距離は既に一メートルも無かった。

その全てが勇者に抱きついた。

その直後。

「……ボン、だ」

魔王がそう呟いた刹那、モニターから凄まじい光が漏れ。画面が乱れる。

「ちょ、ちょっとどういう事？！！」

「ふふふ、勇者達は姫を助ける為に来ている……その姫が偽物で、それが自分の近くで大爆発……」。

結果は言つまでもないな？

今頃、勇者は、年齢制限やモザイク処理無しでは見られないほど恐ろしい状態だろう」

魔王は魔王らしいほど、大口を開けた、大笑いをした。

「……—魔王様、勇者反応、消えました!!」
「そうだろう、そうだろう」

小ボスの言葉をそのまま、勝利の意味として理解した魔王は更に高笑いを浮かべていたが。

その言葉の意味を理解している者が二名。
魔王に伝えた小ボスと、早期勇者警戒用センサーを開発した中ボスだけだった。

「小ボス、勇者は今どこに!？」
「それが……、ゲート周辺にもまったく反応が無いです!!」

そこでようやく疑問に思ったのか魔王が口を開く。

「あの……勇者は肉片になったのでは?」

中ボスは忙しくコンソールを叩きながら、口早に説明した。

「私が開発した、早期勇者警戒用センサーは勇者血族の血自体に反応するのです。」

あれほどの戦闘力を所持している勇者ならその精度は折り紙つきのはず。

その血で反応するセンサーが『姫』様の爆心地でまったく反応が

ないと言つのはありません」

魔王は中ボスの言葉を反芻^{はんすう}する。そして納得がいけないのか、再び訊いた。

「爆発で血が全て蒸発したとか……？」

「核爆発や燃料^{サイモハリック}気化爆弾では無く、通常の手榴弾のような破片で攻撃するタイプの爆発で、

まったく血が残らないと言つのはおかし過ぎます」

魔王は、中ボスの言っている内容はよく理解できなかったが、ココでとりあえず納得しておかないと罵られるので納得した振りをしたおいた。

「おお、お、おう……よよ、よく分かったぞ」

何故か姫も含め、全員がジト目で魔王を見た。

「べつ、別に理解して無いわけじゃないんだからねッ！！」

魔王の言葉に、全員がため息を吐いていると。

「ふむ——アナタが“現・魔王”ですか」

……その声に全員が振り向いた。

第十三話『最強の勇者襲来!?!?』? (後書き)

これと予告編含め4分割構成になります。

長い上にコメディが少ない(いやもはや無い)ですが、見て下さるとうれしいです。

第十三話『最強の勇者襲来!?!?』(前書き)

今回は戦闘描写が主です。

第十三話『最強の勇者襲来！？』？

第十三話『最強の勇者襲来！？』？

「ふむ——アナタが“現・魔王”ですか」

氷のような、心まで凍えてしまいそうな、冷たい声が司令室内に、静かに響く。

その声に皆が振り向くと、そこには先ほど見かけた“勇者”がドアの前に立っていた。

俺達が硬直する中、勇者はゆっくりと姫に近寄り、地面に膝を着いた。

「姫様、お向かいにありました、国王が城でお待ちです」

「アンタ、いつからそんなに強くなったのよ？」

「はて、何のことですか？」

跪く勇者ひざまづに対して、姫は訝しげな顔をしながら、質問した。
だが、勇者は眉をピクリとあげ、何処を見つめているのか良く分からない糸目で姫を見つめ返した。

「何の事って……アンタのその強さよ！！ 私と戦った時はまるで強く無かったじゃない！！」

それなのに、何でいきなりそんな剛力フォースがあるのよッ！！」

まくし立てる様にして、口早に言葉を言い放つ姫。

その言葉を聞いて、やっとの事で合点がいったのか、勇者は掌てのひらを、もう片方の手で、ポンと叩いた。

「なるほど、それで些か戸惑っておられるんですね」
「それはですね——」

勇者は、魔王達の事がまるで眼中にないのか、ゆっくりとした口調で説明を始めた。

「私の家系は代々勇者をやっているのはご存知ですよネ？」

そして、我が家宝である、宝剣 紙刀ペーパーナイフ
別名を“朧紙”おぼろがみ 朧神と呼ぶ場合もあります。

紙刀は紙よりも薄い刀身を持つ事から、この名が付けられました。
この紙刀の最大の特徴は“能力解放”にあります。

抜刀時、身体能力を筋力のみですが、力を三倍ほどにあげる効果があるのです。

今だ、私には巧くうま使いこなせてはいませんが、それでもこの力は強力です」

糸目の勇者はそう言いながら、鞘さやから、素早く刀を抜いた。

その刀身は、横から見たら普通の刀だが、真正面から刃を見たら、何も無いように見えるほど薄かった。

（——ペーパーナイフって……物凄いしょぼい名前だな……。便箋^{びんせん}や封筒でも主に開けるのだろうか？）

魔王は笑ってはいけないうと、思いながら、両手で口を塞ぎ、必死に込み上げてくる、ツツコミたいという欲望を抑えていた。

「ペーパーナイフ？ 手紙でも開けるの？」

それに何、“能力解放”？ 中二病設定はチラシの裏にでも書いてなさいよ」

初めて、この勇者を見つめて居た時は、熱の入った視線を送っていたにも関わらず、妹はズバズハとそう言った。

「国王様にもそう言われましたが、そんなにもこの別名は気になりますか？」

うん

一同、一系乱れぬ統率で、同時に頷く。
それに対し、糸目の勇者は少し眉を顰^{ひそ}め、考える。

「ですが、この臆神。皆さんがよくご存知の、ペーパーナイフなる物より前に作られた刀ですよ。

なのでこちらが元祖。これなら別に違和感は無いのでは？」

糸目の勇者は投げかける様にして、そう言い放った。

姫含め、全員が未だ納得していない、と言った表情だったが、これ以上食い下がる者もいなかった。

「質問は以上ですね？」

——では“殺戮”さつりくを始めますか」

糸目の勇者は持っていた刀をゆっくりと上げる、上段の型に移行すると、そこで動きが止まる。

「おい、勇者。姫を連れ帰ると言うのなら好きにするがいい。だが俺達を殺すと言うなら俺が相手になろう」

魔王は臆することなく一歩前に出た。

その動きに、勇者はピクリと反応し、一瞬その目が少しだけ開かれた。

左右の眼の色が異なっていた。

右目は蒼く、左目は金色に輝いていた。

魔族にも、虹彩異色症オッドアイの者は居たが、その全てが同種族の中でも一線を画す程の力を持っていた。

「貴様の好きなジャンルで戦ってやる。好きなスポーツでも、好きな趣味でも、好きなものを選ぶがいい」

「ふむ、現・魔王は平和主義者だと国王から聞いていましたが、本当のようですね。」

そのような方が、何故、姫様を連れ去ったのが不明ですが……」

魔王は姫の方に指を指しながら「こいつが勝手に攻めて来たんだ！　俺は被害者だッ！！」

と必死に訴えていたが、勇者はまるで聞いていない素振りだった。

必死に弁解する魔王をよそに、ひたすら熟考する勇者。

そして、考えがまとまったのか、ゆっくりとした動作で、刀を鞘

に仕舞った。

「いいでしょう、では、“剣技”^{けんぎ}で雌雄を決しましょう」

「剣でも持つて、舞いでも踊ればいいのか？」

魔王の言葉に、勇者は「まさか」と言い、呆れたような顔をした。その顔を確認して、魔王も中ボスの方を向き、やや命令口調で言葉投げかける。

「中ボス、“日本刀”を持つて来い」

平時であれば、中ボスも「ご自分で取ってきたらどうですか？」と反論の一つも言うが、今は何も言わず、頷くと、すぐさま姿を消した。

中ボスが移動したのを確認すると、魔王も、勇者に「場所を変える」と言い。

勇者もそれに黙って従った。

- - -
- - -
- - -
- - -

「これは……“日本庭園”?!?
魔王城内に、このような場所があったとは。中庭にしては随分と費用が掛かっていますね」

糸目の勇者は魔王城の丁度中央に位置する、庭を見ると、
感心したような、それでいて呆れているかのような声で言った。

この中庭は中ボスと魔王が趣味で作った、個人的な庭だったが、
その庭には妥協の二文字は無く、隅々まで、凄まじい力の入れよ
うだった。

所々に木々が植えられており。その間をとて小さな小川が流
れていた。

その小川に小さな橋が掛かっており。

純粹に風景を楽しむだけでは無く、気分転換に歩きまわる事も出
来た。

特殊な品種なのか、まだ春どころか冬すら来ていないにも関わら
ず。

一本の桜は何故か既に満開となっていた。

だが、それに対して勇者は特に気にとめた様子は無かった。

「この様な場所で殺し合うのは不本意だが、日本刀で戦うのだ。
桜があるこの庭園で戦うのも悪くはあるまい」

魔王の言葉に、勇者はゆっくりと頷き。その後魔王の方を向いて
小さく頭を下げた。

「やはり、国王の現・魔王が平和主義と言うのは本当のようですね。
正直、嘘だと思っていましたよ。」

それに、あの状況下で、私は勝ち目が無いにも関わらず、国王の
勅命を受けた騎士^{勇者}として来ているので、命を掛けねばならぬ状況下
で、アナタは私と一対一で戦う道を選んでくださった。

正直、アナタの後ろに居た三人と戦えば私はまず間違え無く、殺

されて居たでしょう」

そして、勇者は魔王にもう一度頭を下げると、更に言った。

「アナタが一对一を受けて下さった事には感謝をしています。

それにアナタは悪い魔族ヒトでは無い事も解りました。

ですが、私は勇者。たとえアナタに“悪”が無かろうと、国民はアナタの事を『姫を連れ去った者』として見ています。

それがある限り、アナタを討つ必要がある。それだけは分かって下さい」

魔王は「理不尽だな」と言い、苦笑いを浮かべた。

勇者もそれに対しては思うところがあるのか、少しだけ同情とも思えるような顔をした。

「魔王様、お持ちいたしました」

中ボスは言葉少なく、そう言うと、赤い布に包まれた長物を出し。魔王に手渡した。

魔王も赤い布を慣れた手つきで取っ払う。

そこには、血で染め上げたかのようななどす黒い赤色の鞘に納められた刀が現れる。

魔王は二十センチほど刀を鞘から抜くと、刀身を少しだけ見て、そのまま鞘に仕舞った。

刀を見て、勇者も思わず声が出る。

「その刀!? まさか千子村正せんじむらまさ!?!? 名刀、あるいは妖刀と呼

ばれるソレを何故お持ちに!？」

焦る勇者に対して、中ボスが、説明をする。

「魔王様がまた何かのゲームに影響されてか、『欲しい』と申されたので、私が借りて来ました。

もちろん許可は取っていますよ。……— ですが使用許可は戴いていませんが」

中ボスが最後、とんでもない事を口にしていたが、勇者には今は、その言葉を聞き取る余裕が無かったのか、

少し興奮したような口調で「勝ったら譲って下さい」と言っていたが、魔王もこの刀は借り物なだけに、うなづく事は無かった。

「ゴボン—— 私とした事が、少々取り乱してしまいましたね。

そうですね、今はこの様な事をしている場合では無かったですね」

勇者はそう言うと、後ろ歩きで、魔王と少しだけ距離を取った。

魔王も、それは戦闘準備の為だと悟り、それに合わせて後ろに下がる。

魔王はおもむろに周りに目を向けた。

中ボスを含めた、城の中に居る皆が、決闘を見守っていた。

姫以外の者は、勝利を確信しているかのような余裕が見てとれた。

だが、姫だけは、不安なのか、握りこぶしを作りながらも、必死にこちらを魔王の方を見つめていた。

それは魔王を巻き込んだ事への罪悪感なのか、それとも別の感情

なのか。

魔王はそんな姫を見つめ返し、懐^{ふところ}から何かを取り出すとそれを姫の方に向かって投げた。

「俺の宝物だ、預かって居てくれ。それがある限り、俺は必ず生きて帰る」

姫が渡されて物はA4サイズ程の箱だった。魔王から渡されたソレの大きさや重さを感じながら、姫はそれを抱き抱えるようにして持ち。姫は顔を上げ魔王を見つめた。

魔王も、姫が預かってくれた事で、安心したのか、箱の方を一瞥^{いちべつ}すると、勇者の方へ向き直った。

魔王は「待たせたな」と言い、刀を鞘から乱暴に抜くと、鞘を中ボスに渡し、構えた。

鞘と言う呪縛から解き放たれた刀を、魔王はゆっくりと構えた。

その刀は光に反射し、白く輝いていた。

だが、魔王を含めた皆は、銀色に輝いているはずの白刃はまるで血に染まっているかのような錯覚を覚えた。

それは妖刀と呼ばれる刀が見せる幻影。

しかし、それが幻だと分かっていながらも、その白刃が血で汚れているようにしか見えなかった。

目を信じるか、それとも知識や常識を信じるか、そのどちらに重^{おも}きを置いているかで見え方は多少異なった。

だが、勇者だけは、決闘を行っている。今から死闘を行う勇者だけは、その血が自分の血のように感じられた。

それは、まるで自分が——今、目の前に見える、血刀が自分の未

来のようにしか思えなかった。

相手に死の錯覚を見せる刀——村正。

魔王が手に持っている刀が、妖刀と言われる由縁だった。

苦しみながらも、魔王の刀を見つめ返す勇者。

相手は妖刀の見せる幻影のおかげで、勝負は一方的に終わるように思われる。

だがしかし、村正には使う者にも苦痛を与えた。

「——ぐっ」

今、魔王に与えられている苦痛——それは、自分の死である。

相手に、死の錯覚を与えるように、魔王にも死の錯覚が与えられていた。

だが、魔王が与えられている死の錯覚は勇者が受けているモノより数倍の迫力と生々しさが感じられた。

そう、使う者の方が負担が多いのだ。

しかし、村正を使う者には覚悟も心構えもある。それがどの程度か分かっているだけマシと言うものだ。

魔王は刀の柄^{つか}を握り直すと、再び構えた。

それに答える様にして勇者も構える。

両者、上段に太刀を掲げ構える。

「一刀魔族真改流——魔王、参る」

「魔族のそれほどの大層な名前の流派があつたとは……対魔族用剣

術——勇者、参ります」

姫と勇者を除く一同は《絶対、今考えたな》と思いながらも口を紡いだ。

勇者と魔王の身長はほぼ同じ。それは“ほぼ”同じ間合いを意味した。

互いに少しずつにじみ寄る。その度に、庭の砂利が小さく音を立てた。

勇者は妖刀による幻影の影響で、本来の実力の半分も出せないほど集中力をかき乱されていた。

妖刀の効果自体は、魔王にも勇者以上に負担を強いていたが、それでも妖刀の持ち主である魔王には幾分か余裕があるはずだった。

だが、魔王は妖刀によって得た優位性を、自ら潰していた。

（寸止めか、それとも急所外しか……どちらにしても、限りなく薄い確率だな）

そう、魔王は勇者を殺すつもりはなかった。

しかしながら、勇者は魔王を切るつもりでいる。

この考えの違いで生まれる差は、恐ろしいものだった。

何れにしろ、魔王はその考えを改めるつもりも毛頭無かった。

それに、今さら新しい作戦を考える為に思考を巡らせば、それこそ命取りだ。

魔王は全ての雑念を捨て、目前に迫る敵に集中した。

ゆっくりとそれでいて、確実に互いの距離は縮まっているのにも関わらず。

それは、いつまでも続くような錯覚を皆に与えた。

無限にも感じられる時間の中で、彼らは神経を張り詰めながら進む。

互いに、行き死にが掛かっているのだ。

両者にとつて、たった半歩ですら、それを進むのにすら地獄に身を投じるような覚悟が必要だった。

「……………」
「……………」

桜の花びらが地面に落ちる音すらも聞こえてきそうな程の無音。

（——来るッ）

魔王は勇者の攻撃がこのタイミングで来ると予想していた。

それは何故か？

勇者の方が、ほんの少しだけ身長が高かった。

ただか数センチ程度かもしれない。だがその数センチが生き死にを別ける。

その数センチでこちらは絶命、相手は深手ふかでを負うが死にはしない。

生き死にのやり取りをする上では、それだけで十分だった。

故に魔王は攻撃が来ると思った。

しかし、勇者は動かなかった。

再び距離を詰め、間合いが狭まる。それは間合いの、勇者の優越的距離を失う事を意味した。

あれほどの手練であれ^{てたれ}ば、自分の有利な条件かを見誤るはずがない。

ほんの一瞬、時間にして、十分の一秒にも満たない僅かな時間だが、魔王は混乱した。

その瞬間、勇者が動いた。

瞬目^{まはたき}すら行えぬほどの短い時間。

たったそれだけの時間を勇者は見逃さなかった。

第十三話『最強の勇者襲来！？』後日編

第十三話『最強の勇者襲来！？』後日編

「魔王様、換え湿布ココに置いておきますね」

「ああ、すまん」

小ボスは、魔王城の救護室に備え付けられている戸棚から、湿布を取り出すと魔王に手渡した。

それを受け取ると、ベット脇にそれを置いた。

糸目の勇者はその湿布に手を伸ばし、自ら湿布の取り換えを行おうとしていた。

既に小ボスの姿は無く、魔王はドアの方を一瞥いちべつすると、そこにはなるべく邪魔をしない様にとの配慮か、気配を程よく消した中ボスが控えていた。

魔王は、ベットの近くにある、折りたたみ式の椅子を乱暴に引っ張り出すと、勢い良く腰掛けた。

「“真剣”勝負、だと思っていましたが、随分侮あなどられたものですね」

勇者は肩にある、古い湿布を剥がし、新しい湿布に貼り替えながら口にした。

その言葉に魔王は得意げに笑い。

「今は悪魔^{マオウ}がほほ笑む時代だ、何を使っても勝ち残りやあいいんだよ！ー！」

と言い、大口を開け笑った。

勇者もそれに釣られてか、傷を気にしながらも笑った。

一日前。

「——クッ！！ ゴルゴーンアイ」

魔王は危険をいち早く察知し、咄嗟に固縛^{こはく}魔法を使うと、勇者の動きを封じた。

「貴様あああああ！！！」

必死に動こうともがく勇者の双眼開かれ、魔王を見つめる。
と、その時、固縛魔法で出現した黄金のリングがパリンと音を立て壊れる。

何故、魔法が解けたのか理由が解らず困惑する魔王。

そんな魔王に対して、糸目の勇者は目を見開いたまま、まともな攻撃がままならぬ姿勢で太刀を強引に振り下ろす勇者。

勇者の力に驚愕する魔王だったが、多少の負傷はやむを得ないと

判断した魔王は、手に持っていた太刀を勇者の肩に向かって、力任せに振り下ろした。

- - -
- - -
- - -
- - -

魔王城にある救護室のベットから半身を起こす勇者。
その傍らには、勇者の着ていた服と、勇者の得物である刀が置いてあった。

救護室には八つベットが並んでいたが、勇者が使っている一つを除いて、七つの空きがあった。
それ以外にも六つほど、このような部屋があった。そのどれもが今は使用していなかった。

「まさか、模造刀で“真剣”勝負するとは。それにあれほどの幻覚を模造刀で見せていたとは。
中ボス殿は凄まじい術をお持ちで」

扉の方でじっと待機していた中ボスに、勇者はそう言った。
その言葉に中ボスは黙って、少しだけ頭を下げた。

「魔王居る？」

姫は救護室の扉を開け、魔王が居るかどうかを確認する為に、視

線を彷徨わせた。

そして、魔王を見つけると、トコトコとやや急ぎ足で歩み寄った。姫は、一つの箱を抱えたいた。

その箱は、勇者との決闘前に魔王から直接預かった物だった。

姫はその箱を、まるで壊れ物を扱うかのように大事そうに両手で抱えていた。

その箱をゆつくりとした動作で魔王に渡すと。

魔王は箱を受け取ると、まるで新しい玩具を与えられた子供のように騒ぎながら、姫に感謝の言葉を告げた。

「おお、すっかり忘れておったわ！！ 感謝するぞ、姫！」

魔王の言葉に気を良くした姫は、魔王の行動をじつと優しい目で見守った。

その雰囲気のにまれてか、勇者ですら、微笑んでいるほどだ。

だがそんな微笑ましい光景も、魔王の要らぬ一言で終わりを告げる。

「では早速この“エロゲ”パソコン名を真・魔王神宮インストールに捧げなければ！！」

魔王はそう言いながら、姫の肩を叩き「御苦労、御苦労」と言い、姫の横を抜けた。

鼻歌が聞こえてきそうなほど嬉しそうにする魔王に、底冷えのする声が背中から響く。

（ん？　なんだこの背後から迫る、死の気配は？　……これは殺気かッ！？）

魔王の背中から視線に、嫌な汗が吹き出る、本能が振り向かずそのまま逃げると叫んでいるにも関わらず。

それを無視すると、ゆっくりと後ろを振り向いた。

『……勇者様、こちらへ』

『えっ？　一体なにがどうしたと言っのですか？？？』

魔王が硬直するなか、中ボスは逸早く危険を察知し、勇者の腕を自分の肩に回し、勇者の身体を起こし。

何が何だが解らず困惑する勇者を、多少強引ながらも窓の方へ連れ出した。

「ねえ魔王、質問があります」

「……ははははっ」

乾いた笑いを浮かべる魔王。それに対し、姫は、凍えるような悪魔的な笑みを浮かべ訊いた。

「私がアンタの事を思い、大事に抱えていた“物”って“エロゲ”だったの？」

「イエムマム！」

鬼軍曹を前にした新兵のように、条件反射で敬礼を行いながら答える魔王。

誠に綺麗な敬礼とは対照的に、反対側の手にはしっかりとエロゲが握られていた。

「魔王？ アンタさっき勇者になんて言った？」

姫の言葉に　？　マークを浮かべる魔王。その顔を見ながら、姫は笑った。

それは笑顔ではなく、**頬笑み**。**悪魔の……**

「今は悪魔ヒメがほほ笑む時代」
「よッ！！」

凄まじい閃光と爆音と共に。魔王は窓から飛び出した。

[illegible]

- - - - -

「勇者よ、それで私の娘は奪還できたか？」

「魔王自ら一対一を申し出てくれましたが、結果は……」

国王城に戻り、国王とのお目通りを許され、国王の前で片膝を付く、糸目の勇者。

当然、姫を連れ帰る事は叶わなかったので、任務は失敗。

勇者はどんな処遇も甘んじて受ける覚悟で国王の前に立った。

「まあ元より、“姫”を助け出して欲しいと思ったからお前に命令を出したのではない」

「では何故？」

国王の言葉に疑問を覚え、下げていた頭を上げ質問した。

多少、舌足らずな、質問をする勇者だったが、それに対して国王も、気を悪くしたようすは無く、淡々と答えた。

「娘の現状を知りたくてな。それでお前を向かわせたのだ。

それに、どうせお前程度では今の魔王は到底太刀打ちできんかっただろう？」

見た目や性格が“あれ”でも魔族のトップである“魔王”の地位についてる男だぞ？」

仮にも糸目の勇者は王都最強という事になっているにも関わらず、国王は勇者に向かって「お前程度」

と言い放った。

侮辱としか取れる言葉に勇者は怒りはおろか、嫌悪感すら覚えなかった。

確かに自分は無力だった。

たとえ本気を出した所で、魔王どころか、その部下にすら自分は太刀打ちできないと考えていたからだ。

更には自分の目の前に居る国王——元・勇者。

国王はその昔、元祖・勇者には遠く及ばぬとも、歴代勇者の中ではかなりの力を持っていた。

今はその力が衰えたとは言え、生ける伝説とも言える元・勇者に對し言い返す度胸も、資格すら負け犬である糸目の勇者には無かった。

「それで、勇者よ。姫は魔王城で近頃は何をしていた？」

国王は、勇者を態々魔王城に出向かせた、本来の目的を果たすべく、娘の近時を訊いた。

勇者は答えに詰まったのか、難しそうな顔をしながらも、短く、簡潔に思った事を告げた。

「あまり長くは居なかったので、多くの事は語れませんが。

良い意味でも悪い意味でも今も昔もあの方は“姫”でした。

それより気になるのは魔王の扱いですね。

……一言で言えば姫様の 従者 。……いえ、あれは最早“奴隸”でしたね」

その言葉に国王は一瞬、キョトンとすると。

すぐさま合点がいったのか、大声で笑って見せた。

一方その頃、魔王城では。

「魔王、お茶」

「はいはい」

短く返事をする、お茶を入れる魔王。

「肩」

「はい、ただいま」

大急ぎで急須を置き、姫の後ろに立つと、程よい強さで、肩をむ魔王。

忙しく動く魔王に、すぐさま、新しい命令が飛ぶ。

「ちょっと魔王飛んで見なさいよ」

「空に？」

「ジャンプよ、ジャンプ。ほらほら飛んで飛んで」

魔王が飛び跳ねるたびに、チャリンチャリンとポケットの中の硬貨が踊るようにして音立てた。

「ん」

姫は乱暴に手を魔王の前に出すと、魔王は半泣きになりながら、ポケットから財布を出した。

しかし、魔王が財布の中身を覗こうとした時、その財布が手の上から消える。

すぐに、魔王は自分の財布が姫に取られた、という事に気が付いた。

だが、たとえ、取られた事が解ったとしても、それを取り返すような真似が出来るはずもなく。

魔王は姫と言う名の、台風が過ぎるのをじっと、辛抱強く待つしか無かった。

「七千円？ シケてんわねえ」

姫はそう言いながら、器用にも、五メートルほど離れている小さなゴミ箱に魔王の財布をゴミ箱へ投げた。

財布は綺麗な弧を描きながら、ゴミ箱に吸い込まれるように入った。

見事にゴミ箱へ送り込まれた財布に満足したのか、姫は小さく「よっしゃ」

と言いながらガッツポーズをし、そのまま王室を後にした。

音を立て閉まるドアを悲しげな目線で見送る魔王。

そして、魔王の近くでずっと佇んでいただけの中ボスも、魔王の財布入りのごみ箱を『燃えるゴミ』と書かれた、可燃物専用の大きなゴミ袋に移し、それをきつく縛ると、口を開いた。

「魔王様があんな物、姫様に預けるから……」

「うるさいヤイ!!」

魔王は涙ながらに、中ボスが縛ったゴミ袋から、自分の財布を取り出すと、そう言い放った。

悲しさに目を赤く腫らせながらも、再び椅子に腰かけ。

近くに置いてある炭化した箱を手元に寄せると、中から粉々になったゲームのエロゲのディスクを取り出した。

「これ……メーカーに問い合わせたら保障してくれるかな……？」
「——“ディスク爆砕保障”とか聞いた事無いですね」

中ボスの言葉に魔王は「瞬間接着剤とかで治らないかな」と呟きながら粉々になったディスクをパズルのように組み合わせる。

そんな魔王の肩を中ボスはポンと叩くと、首をゆっくりとした動作よ横に振った。

魔王はそこで耐えられなくなったのか、突如粉々になったディスクが入った箱を持って王室から出て行った。

その夜、姫は、自分が粉々にしてしまった魔王のエロゲを小ボスに頼み買って来て貰い。

そして、そのエロゲを魔王に渡し、魔王は感涙しながら姫に感謝した。

その光景を見ながら中ボスは思った。

（あのゲームを买うお金って、元は魔王様のお金では？）

姫の行動を中ボスは見つめながら、見事な“飴と鞭”だと関心した。

第十三話『最強の勇者襲来!?!』後日編（後書き）

ちよつとストーリーに直接関わりのある台詞がチラホラ。

まあ適当に行き当たればたりで書いて来た『姫の従者は魔王様!?!』
真面目回も少し片付いた所で、元のコメディ―路線に帰るか。

第十四話『進軍！？ 勇者五千人の襲撃！？』

第十四話『進軍！？ 勇者五千人の襲撃！？』

朝食を食べ、食器洗いは中ボスに任せ。

自分の役目である洗濯を始めるべく、洗濯物をかき集め、その選択物を洗濯機にブチ込み、洗剤を入れスイッチを押した。

魔王はすぐに自室に戻ると、テレビの電源を入れた。

毎週この日の朝九時はローカルテレビで、魔王が好きな番組「マタビ求めて三丁目」を見る事に決めていた。

もちろん楽しみにしている魔王は、それを見逃さないようにと、出来るだけの用事は先に済ませ、テレビの前に座っていたのだ。持ってきていたお茶を一口飲み、皿に移してあるせんべいをバリバリと音を立て食べ始めた。

そして、見たい番組も終わると突如、何やら鼻がむず痒くなり始めた。

「くちゅん」

「ちよっと！ こっちに向いてクシャミなんてしないでよ、ピースが飛ぶじゃない。」

それにしてもアンタ、随分可愛らしいクシャミしたわね」

いつの間にやら姫が魔王の隣で何やら作業をしていた。

魔王の隣で、一人ジグソーパズルを黙々と組み上げる姫。

そして何故か中ボスもその傍らで静かに読書をしていた。

「姫に中ボス、お前達はいつの間に居たのだ？ …… ははあん俺様の事が恋しくて来たのであろう！！ そうだろう！！」

何故か、姫の方に、ビジツ指を指す魔王。

姫も姫で、その言葉に反応する気もなく、ただ、パズルの完成図とパズルのピースと睨めっこしていた。

「お前、少しくらい俺様の話を聴いてくれてもよからう……」

「えっ？ なに？ なんか言った？」

「あつ……ごめんなさい、何でもないです」

床に「の」字を書きながらいじける魔王。

だがふと魔王は何か思ったのかその顔を上げた。

「お前なんで俺様の部屋でジグソーパズルなんて組み上げているのだ？」

「私の部屋だとスペースが無いのよ」

「二十畳以上ある部屋に『スペースが無い』だと！？ お前は部屋でゾウやキリンでも飼っているのか？」

魔王が責めるようにして言うと、姫は少しだけ言い淀む。
。

「……部屋が……てるのよ」

「あ？ なんて言った？」

「部屋が散らかっているのよ！！ 分かった？！ 聞こえた！！？」

「うぎゃあああキサマ！！ 人の耳元で大声をあげるなッ！！」

席から立ち上がった姫は、魔王の耳元で大声を上げた。

その怒声に驚きながら耳を塞ぐ魔王。

少しだけ叫んだお掛けで満足したのか、姫は再び席に着いた。

魔王は耳元で叫ばれたのが影響してか、右目をつぶり、右耳は手で押さえていた。

「耳が——耳がイテエ！！ キーンってする！！ 耳がキーンってするよー！！」

耳が痛いと呼ぶ魔王の隣では、中ボスは冷ややかな顔をしながら、そつと自分の耳から耳栓を外しポケットに仕舞っていた。

「中ボスって何でも持つてるのね……」

「何でも——は流石にありませんが。」

ですが、ドコでもドアやプルトニウムくらいでしたら今すぐに出せます。

お望みでしたら出しますが？」

「——プルトなに？ プルトの仲間？ まあいいわ」

姫の言葉に中ボスは残念そうに金属の塊と思しき物体を懐に仕舞った。
ふしん

魔王はその光景を片目で見つめながら、「ココでそんな物出すなよ！！」と心の中でツツコミをしていた。

そんな事をしていた時。電源の入っていたテレビがザザーと音を立てたと思うと突如「緊急放送」の四文字が現れ、皆の視線がテレ

ビに集まった。

『えー番組の途中失礼致します。

緊急速報。現在 魔王城 に向かって“勇者五千人”が向かって
いるとの速報が入りました。

付近の住民の方は家の戸締りを確認し、家から一步も出ないで下
さい。

屋外に居る方はすぐに建物内に避難してください。

緊急速報です。現在 魔王城 に向かって“勇者五千人”が向か
つているとの速報が入りました——』

テレビから緊急速報が流れ、ニュースキャスターが伝えた内容に
啞然とする魔王達。

「「「 勇者五千人！！？？」」」

一同、驚愕と共に声を上げた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

魔王城から五キロほど南の小さな町の大通りでは、多くの“勇者
”達が集まっていた。

この町には三百人ほどしか住んでいないが、今この町の人口はそ
の十倍以上に膨れ上がっていた。

「本日をもって貴様らはウジ虫を卒業する。今から貴様らは“勇者
”である。

貴様らは兄弟の絆に結ばれる。

貴様らがくたばるその瞬間まで、“勇者”は貴様らの兄弟だ。
今から魔王城へ向かう。殆どの者は二度と戻らないだろう。

だが肝に銘じておけ。魔王を殺す！！我々は魔王を殺す為だけに存在する。

だが勇者は永遠である。つまり——貴様らも永遠である！」

沢山の軍服と思しく服に身を包んだ男達が集まる中、一人大きな帽子をかぶっていた男が言った。

戦場に向かう“勇者”達に激励を飛ばし、それにより勇者達は奮起した。

『サーイエツサー』

全員が一糸乱れぬ統率で声を揃えた。

帽子をかぶっている男もその返事を聴き、誇らしげな顔をした。

そのままの勢いで、男は魔王城に向かって指を指すと「進めツ！」と短く号令を出し、すぐさま全体に伝わり、勇者達はゆっくりと魔王城へと駒を進めた。

ところ変わって魔王城では。

既に司令室に移動した魔王達。

司令室には当直の小ボスの姿と、妹と中ボスが駆け付けていた。

「勇者軍移動開始しました。現在の兵力、その数 三千。予想より少ない数ですが、後詰が控えている可能性が高いです」

小ボスがそう言い、同時にコンソールを叩き、勇者軍の映像を中央モニターに表示した。

そこに移されて居たのは小さな町にはびこる、苔こけの様な黒い模様だった。

それが全て人だと聴いた時は鳥肌が立つほどの人人人。

「相手は勇者だ。人と思ってかかるな。勇者にはそれぞれ長けた特徴がある。

その特徴が分からぬうちは防御に徹しろ」

「お言葉ですが魔王様。あの軍勢が全て魔王城に取り付くような事態になれば半日も経たずに落城ですよ」

「ぐぬぬ……仕方ない魔王ちゃんインパクトを全機出せ！！
使える物は何でも使え。出し惜しみは無しだ」

魔王は“姫”以外のメンバーに役割を振り。
姫は何をやればいいのか聞いた。

「お前は“俺様を”護れ！！」

「はあ……ねえ。それって普通逆じゃないの？」

「戦場では勇敢な奴が一番に死ぬ！！ 自分の出来る事を弁わきまえ。

出来ない事は誰かに任せる。自分が行える役割を行え！！ それが戦場で生き残る術だ。

いいか？ 戦場では“カバー命”だ」

「そうね。勇気と蛮勇は違うものね。アンタにしては良い事言っわね」

「おう、だからお前は遠慮無く俺様を護れ！！」

「……自信を持って言われるとなんか違う感じがするのよね……
……」

魔王が胸を張りながらそう主張するが、ちょっとだけ不服な姫だった。

「魔王様、現在百二十ミリ迫撃砲、砲撃中。
スクランブル

緊急発進させた魔王ちゃんインパクト三機が、あと一分ほどで敵と接触します。

二分後には五機の魔王ちゃんインパクトが交戦地域に入ります。
マオウキャノン
射程は短いですが、高密度荷電粒子砲。使用可能状態で待機中」

「打てる手は全て打った。あとは結果が出るのを待つだけだ……」

魔王はそう言う、目を閉じ。結果が出るのをじっと待った。

指揮官がどしりと構えているだけで、兵は安心し、士気は低下しない。

それを分かっているかは定かではないが、魔王は自然とそれを行っていた。

相変わらず、底知れぬ方だ。と中ボスは思いながら、自らの仕事に集中した。

「……——迫撃砲での被害絶大。敵に十%程の被害。

魔王ちゃんインパクト現在戦闘中。一機が右脚部中破。それ以外は目立った損害は無し。

被弾した一機は後退させます。五機の魔王ちゃんインパクト参戦。戦場は現在モニタリング不能。

現在確認できるのは魔王ちゃんインパクトから送られてくる映像だけです」

中ボスがそう言いながら、中央モニターに魔王ちゃんインパクトからの映像を映し出す。

黒煙と爆炎。轟音を轟かせながら突撃する魔王ちゃんインパクト。多数戦を想定している魔王ちゃんインパクトでも一携帯式対戦車擲弾発射器《RPG》を大量に持った勇者には押され気味であった。

「魔王ちゃんインパクト損害率五十％　生き残っている機体全てが中破以上のダメージを受けています。」

「これ以上の戦闘継続は不可能です」

「よし、後退させる」

「おにい、カメラ復旧したよ。現在勇者軍——残り二千！！　高密^マ度^{オウキヤノン}荷電粒子砲は連射が無理だから。」

多く見積もっても四発しか撃てない。

迫撃砲も継続して撃つけど。それでも千は切らないと思う」

「よし、これより勇者軍を城内で迎え討つ。」

それまでオートで射撃をおこなっておけ。

姫は俺から離れるな、離れたら俺様が死ぬと思え！！」

「勇者撃退に、魔王護衛が追加されてる気分だわ……………」

ため息を吐きながら姫が言った。

- - -
- - -
- - -
- - -

魔王城、玄関口。

「それで、結局何人の勇者が城に取り付いたの？」

姫がアクビを噛み殺しながらつまらなそうに訊いた。

「最終ゲートを抜けた勇者の数はおよそ八百。迎撃機能の殆どを失っていますので、今は入りたい放題です」

「あの“勇者”達。殆ど勇者としての血が薄いのか、早期勇者警戒用センサーでも中々引つかからなくて困るのよ。見逃した子も居るだろうけど、最終的にココに来る数は、ざっと千百って所ね」

中ボスの言葉に妹が付け加えるように言った。

姫自体も、この城に居た魔族、殆どを返り打ちにしたほどの実力があるので、今回の勇者には特に危機感を抱いてはいなかった。

「来ました」

小ボスがそう言うと、魔王城の玄関扉が破られる。

一気に五十名近い勇者が雪崩込む。

中ボス達も戦っているので姫も仕方なく戦闘に加わった。

「何だ！ あれは“姫様”！？ 救出目標が我々を攻撃しているだ
と！？」

「きつと、催眠術か何かだ。傷つけずに捕縛しろ！！」

姫の姿にうろたえる勇者達だったが、抵抗する姫を『傷つけずに捕縛』なんて、到底人が成し得る技では無かった。

そんな事をしているうちに、五十名ばかりの勇者はあっという間に全滅した。

しかし、倒したのも束の間。再び同じような数の勇者が雪崩れこむ。

「ちょ——と。面倒ね!! らちが明かないわ。あつ——魔王そっちに五人行ったわ」

中ボス達の攻撃を抜け、五人だけ魔王の前に立った。

「ふふふ、貴様が魔王だな!! 我ら勇者は デス・サントリーの異名を持っている。

我らと戦って無事でいた魔族はいない!!」

「デス・サントリーだと!?!」

勇者の言葉に、驚く魔王。姫は戦闘しながらも「何それ、飲料水メーカー?」と何やら言っていた。

「我の名前は ペプシ、勇者としての必殺技は、指からペプシを出すという恐ろしい技だ!!」

ふはは、怖かるう!!」

水芸? と魔王はふと思っていたが、ペプシと名乗った勇者が後ろに下がり、次の勇者が魔王の前に立った。

「我は なっちゃん。我も指からなっちゃんを出す事からそう呼ばれた」

「何だがお前らが不憫に思えて来た……」

「我の名前は 伊右衛門 。お茶を入れるのが上手いっという理由だけでこの隊にスカウトされた」

「人員不足だ！！ 露骨に人員不足が垣間見れるぞ！！」

人員不足の為に、最早、指から液体を出すと言うカテゴリーだけでは集められなくなっただか！！」

魔王がまくし立てるように言うと、伊右衛門と名乗った男は「でも給料は良いです」と小さな反論をしていた。

「貴様ら下がれ。魔王よ、我は凄いで！！ 我の名は 黒酢にんにく！！ 指から……」

そこまで言ったところで魔王が「ちょっと待って今調べるから」と言い、ポケットからモバイルノートパソコンを取り出し、何やら調べ始めた。

「あつOK、分かった。これもサントリーなのね。いいよ続けて」

魔王は公式ページを見た後、確認が終わったのか、そう言い放ち、勇者の言葉を待った。

「……………ゴホン。我が名は 黒酢にんにく グボア——！！」

突如、黒酢にんにくと名乗った男含め、魔王の前に居た勇者五人は倒れた。

「はあ、まったく何て長ったらしい紹介してるのよ。アンタ達が“商品説明会”を開いてる間に、アンタ達以外の勇者、全部片付いち

「やったわよ」

姫はそう言いながら、ペプシと名乗った男を靴で突いた。

「くそ、不覚であった……ガクッ」

「自分から『ガクッ』って言う人、初めて見たわ」

「貴様、折角俺様もノリノリで勇者の話を聴いていたと言っのに、邪魔をしておつてからに……！」

まだ最後の勇者の紹介を訊いていないだろう……！」

魔王はそう言いながら、倒れているまだ“商品説明”とやらをしていない勇者に近付いた。

「お前の名を訊いていなかったな。聞かせてくれ」

「我が名は コカ・コーラー をデス・サントリー 最強と呼ばれし男……ガクッ」

「「他社メーカー!?!」」

姫と魔王のダブルツッコミで、勇者五千人の襲撃は幕を閉じた。

第十四話『進軍！？ 勇者五千人の襲撃！？』（後書き）

魔王「クッ！！ デス・サントリー ……なんて恐ろしい連中なんだ（棒読み）」

魔王も脅えるデス・サントリー。その内、他の回で出そうと少しだけ思っ作者であつた。

過去編第一話（前書き）

魔王の過去編です。通常の話とは雰囲気違います。

過去編は数話続きますが、連続ではなく、何話に一話ずつ挿みます。

後々への布石なので致し方ないと思ってようくださるとありがたいです。（コメディーってタグつけてるのに、いいのかな？ だめそうだったら別けます）

過去編第一話

過去編第一話

二年前、魔王は古びれたお城（？）と言うには、語弊ごへいがあるのでは？

と思うほど、朽ち果てた小さな城に住んでいた。

外壁には、まるで模様のような蔦つたが絡みつき。

外装から想像できるように、内装の方も惨憺さんたんたる状態であった。

廊下は、ただ歩くだけで、今にも床が抜けそうなほど軋きむ音が鳴り。

壁紙も黒ずむようにして汚れ。豪雨の日には雨漏りの為か寢床がビショビショになる事も多々あった。

いくら駆除しようとも、何処からともなく湧いてくるネズミの処理は疾とうに諦め。

今しがた、中ボスの目の前を横切ったネズミに視線を流した。

ネズミは歩みを止めると、恰あたかも「ココは自分の家だ」と言わんばかりに、我が物顔で中ボスを睨み返した。

そんな図々しいネズミ《住民》に中ボスは近付くと、不法滞在の住民は廊下の壁に開いた、小さな穴へと逃げた。

ネズミの姿が消えたのを確認し、中ボスは再び目的の部屋まで歩き出した。

目的の部屋に着くと、可愛い字で「魔王」と書かれたネームプレートを見つけた。

そして、少しだけ斜めになっていたプレートを、その手で正す。プレートを綺麗な位置に配置すると、中ボスは満足げに頬笑み。目の前の部屋を二回だけ、ゆっくりとノックした。

しばらくすると、中からは簡素な返事が返ってきたので、そつとドアノブを回した。

しかし、そのドアは一向に開かれる様子は無かった。

ドアノブは確かに回したはずだが、その肝心のドアノブは何故かドアから外れ、中ボスの手元にあった。

中ボスが気を付けながら、ゆっくりと回したはずの、ドアノブはガチャリと言う音と共に、外れたのだった。

手に残されたドアノブを無造作にポケットに突っ込み。

またあとで修理をしなければ、と思いながら、中から開けて貰えるように言った。

中から「また壊れたのか？」と半ば呆れるような声が聞こえ、中ボスも小さくため息を吐いた。

そして、先ほどと同じガチャリと言う音を奏でながら、目の前のドアが開……— か無かった。

中ボスは、絶句しながら「今の音は、まさかとは思いますが……」
と言い、ドアノブがハマっていた部分を見た。

そこには物の見事に、穴が開いていた。
中も外も、ドアノブが外れ、肝心のドアにはドアノブが外れて出来た穴が開いていた。

中ボスは、城のボロさに、遂に我慢の限界に達したのか、そのド

アを魔力を使い吹き飛ばした。

部屋の中……いや、中ボスと同じようにドアの前に立っていたのであるう、“魔王”は、その魔法によって吹き飛ばされたドアと共に吹き飛ばされ。

半壊した、ドアの下敷きになっていた。

自分とは主従関係の“主”であるはずの魔王を自らの力で吹っ飛ばしておきながら、中ボスは一切の謝罪も無しに、まずは自分の主人である魔王の上に載っているドアを元の位置に、とりあえず置いた。

魔王は呻き声^{うめ}を上げながら、やっとの思いで置き上がると、小さな卓袱台の前に鎮座した。

既に腰掛けている魔王は、中ボスに席に着くよう声を掛けた。

すぐさま了承の返事をする、ゆつたりとしたマイペースで席についた。

綿がろくに入っていない座布団^{ざふとん}の座り心地に中ボスは再びため息を吐く。

もつとも、中ボスの目の前に座っている魔王は、座布団すら無かった。

魔王と中ボス。名前の通り、中ボスの方が社会的地位は下——にも関わらず中ボスは何も言わず座布団を使用した。

魔王の部下である中ボスは、一つしか無い座布団を自分が使う訳にもいかないのだが、だからと言って、それを魔王に渡した所で、素直に受け取ってくれるはずはない。

元来、この人はその様なタイプなのだから。

それを表すようにして、魔王は卓袱台の近くにある、電気ポットから湯をくみ取り、お茶を淹れていた。

慌てて、中ボスは「私が淹れます」と言っただが、魔王はヘラヘラと笑いながら「いいの、いいの」

と言いながら、中ボスの分のお茶を淹れ、それを中ボスの前に置いた。

感謝の言葉を述べながら、中ボスは今から行われる、長時間に渡る説明の備えて、そのお茶で少しだけ舌を潤す。

中ボスがお茶を口から離し、湯呑ゆのみを卓袱台に置いたのを魔王は目で追い。

その動作が終わるのを見計らい。魔王は「それで、何か話があるのだろ？」といい口を開いた。

普段の魔王は、あまり“真面目”とは言えぬほど、戦闘訓練も帝王学もともに学ぼうとしなかった。

いや、戦闘訓練も魔王を継承する為の帝王学などの勉強も“必要としなかった”のだ。

「魔王様。魔王継承試験の方ですが。その開催日程が明後日に決定いたしました」

事務な声でそう伝えと、魔王は特に驚いたような素振りも見せずに「随分と急だな」と、まるで他人事のように言い、自分の分のお茶を啜すすった。

「元祖・魔王」様——「パパ上」様が日程を決めると言ってもさすがに急過ぎますね」

中ボスも魔王の言葉に同意するようにしてそう言い放った。

“元祖・魔王”——本人は『パパ上』と呼ばれるのが好きなのか、親しい魔族^{ヒト}には、そう呼ぶように執拗なまでに言っていた。

その父の息子である魔王の部下をやっている中ボスも例外ではなかった。

目の前に座っている魔王様の“義理”お父上に当る方『パパ上』が、今の魔界を作ったと言っても良いほど、元祖・魔王様は身を粉にして、魔界発展の為に貢献^{こうけん}してきた。

「別にあんな“クソ親父”に直接言われたからって。態々、“パパ上”とか気持ちの悪い呼び名で呼ばなくてもいいのだぞ？」

いつも魔王は父親の名前が出るたびに、明らかに機嫌を悪くした。けして、自分の父親が嫌いな訳では無く、周りから、『歴代最強魔王の息子』『元祖・魔王の息子』などと最^{ひいき}屑目で見られるのが気に入らないのだ。

何処へ行っても、魔王にもその様な目で見られ、素直に褒められた事なんて生まれてこの方無かったのだ。

何が出来ようと、それは、魔王の血族 と言う言葉で全て片

付けられた。

いつものように苦い顔を浮かべる魔王に対して、中ボスはポケットにしまっていた書類を取り出した。

そして、口早に 魔王継承試験 に関しての書類を読み上げた。

「元祖・魔……ゴホン。パパ上様の事はまた後ほど。

いくら明後日と言っても、時間は無限にある訳ではありませんので簡単に説明いたします」

中ボスの言葉に魔王は、話が既に元祖・魔王の話しから、魔王継承試験 の話しに切り替わった事を感じ、説明を聞き逃さない為か、口を硬く閉じる。

「内容は魔王様も理解している通り、試験で求められるのは“力”、魔力や体術などを含む戦闘力を測ります。

まあいつものように“実力主義”という点は変わっておりません。参加人数は今のところ、東西南北含め五名。

私達が住む“西”からは魔王様一名だけです。

奇妙な事に“東”から登録されているのが二名となっています。

戦闘力が規定に足りていれば、何人でも参加できるのが 魔王継承試験 のルールですが。

四方位から参加資格を持つ者を募ったとしても、今まででも四名以上集まった事がありませんでした。

ですが、今回は“五名”。異例の事態となっています」

中ボスはそう言い、新しい資料を取り出した。

魔王は、特に口をはさむ事無く、次の言葉を待っていた。

「こちらが私達“西”を除く、三方位の猛者です。

この資料を見て解る様に、魔王様を除き、三方位……三名の實力は“規定ギリギリ”魔王様とは雲泥の差があります。

ですが、何処からアプローチを掛けても、もう一人の参加者の名前が解らないのです。

それに関して、パパ上様にもそれとなく聞いて見ましたが、頑なに口を割りませんでした」

魔王は中ボスから資料を受け取ると、そこに視線を落とした。

魔力は当然の事ながら、使用できる魔法の種類や、それを発動させるまでの詠唱時間。

それ以外にも、戦闘センスを含む、取得格闘技なども記載されていた。

魔力上限は一般的な魔族で、その数値を“1”とした場合。

上位魔術師で“10”……魔王の血族の平均が80〜140ほど。

しかしながら、参加資格のある三名は、100を少しだけ出る程度だった。

魔王になる為の試験……魔王継承試験 に必要な最低魔力が100以上の事から、彼は魔王の血を確実に引いて居ながら、その魔力は、魔王の血族としては平凡と言えよう。

第十五話『姫と魔王、二人でお買いもの！?』

第十五話『姫と魔王、二人でお買いもの！?』

現在、魔王は姫と共に王都——言わば人属が一番集う場所に来ていた。

当然の事ながら、姫の父親。国王もこの王都の中心部にある城で暮らしている。

魔王——……いや魔族全体から見ても、敵地のど真ん中と言えよう。

そんな敵地で、姫は呑気に買い物を楽しんでいた。
対照的に魔王はひどくビクついていたが。

「さっ、目的だった 古代魔法 の魔術本も手に入っし、次はどこへ行きましょうか……——クシュン!!」

「うわぁ!! 貴様!!——ここは俺様にとっては敵地のど真ん中だぞ!!」

見つかったら“火あぶり”だぞ! 目立つ真似だけはやめてくれ!!」

「アンタそれでも“魔王”? 王都軍くらい怖くもないでしょ?」

「そっ、そうだな!!——おっ、俺様に掛ければ王都軍くらい——ひやあ!?

今右足のところに何か通った!!——何か通った!!——

「——ドラ。もんじゃあるまいし、ネズミ一匹にビビらないでよ……

……」

「び、ビビってなんかいないぞ!!——」

「足をプルプルさせておいて、よくもまあそんな言い訳できるわね」

魔王はネズミに驚き、姫の袖にしがみついていた。

なぜ魔王が敵地である王都に来ていたのは理由があった。

[illegible]

朝、朝食を終え。のんびりと中庭で掃き掃除をしていると、集めたばかりの落ち葉を蹴散らすように姫が中庭へと現れた。

空を飛んで現れたか、はたまた二階から飛び降りたのか、どちらにしても、着地時の風圧で落ち葉は再び散らばってしまった。

魔王がため息を短く吐く中、姫は自分の行動に対して悪びれる様子もなく、淡々と自分が来た目的を口にした。

「魔王、ちよつと買ひ物付き合つてよ」

「お金無い」

「あらず。ちよつと待つてなさい」

「？」

魔王が誘いを断ると、あっさりと身を引いた姫。

些か疑問にも思ったが、きつと自分以外の誰かを代わりに誘うの
 だろうと思い、特に深くは考えなかった。

十分後。

再び落ち葉を集め。それをビニール袋に入れたところで、またし

ても姫が現れる。

もしあと一分。落ち葉を片付けるのが遅ければ、先ほどの二の舞になっていただろう。

魔王は少しだけ安堵すると、姫の方を向いた。

姫はなぜか足元を見ると、悔しそうに「ツチ！」と小さく舌打ちをした。

「貴様！ 先ほどの行いは確信犯だったのか！！」

ビシッと姫の方に筭はしを向ける魔王だったが。姫は気にした様子はなく、黙ってポケットから白い封筒と（魔王の）通帳を取り出した。

「アンタの口座からお金下ろして来たわよ、さあ遠慮なく買い物に付き合いなさい」

「貴様！！ どれだけ俺様に買い物を行かせたいのだ！！ しかも何故俺の通帳を持っている！！」

更には暗証番号まで知っているとはい！！」

驚く魔王に対して姫は平然と「中ボスに訊いたら教えてくれたわ」といい、魔王に出かける用意をするように急かした。

「だあああ！ 分かった、分かったからローキックはやめろ！！」

「買い物にはついていく。だが、一体何を買いに行くというのだ？」

「本」

「アマ。ンで頼め！！」

「嫌よ本一冊買うためにア。ゾン使うのは！」

「梱包の段ボールがデカ過ぎるのよ！ 減るところか溜まる一方よ！！」

「それと、私がほしいのはそこでしか売ってないのよ」

「あ？　なんだ？　無。正エロ本か——ブハッ」

「そんなもの私が買うはずないでしょ！！　アンタの顔に修正掛け
てあげましょうか！？」

そんなこんなで、結局魔王の抵抗虚しく、引きずられるように魔
王城を後にした。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「——ドラ。もんじゃあるまいし、ネズミ一匹にビビらないでよ...

...」

「び、ビビってなんかいないぞ！！」

「足をプルプルさせておいて、よくもまあそんな言い訳できるわね」

そんな不毛なやり取りをしていると、突如、露店の店主が姫に声
をかけた。

「その綺麗な御嬢さん！！　ちよつと見ていかないかい？」

「——え？　私？」

「……真っ先に反応したな（小声）」

「なんか言ったかしら“魔王様”」

「き、貴様！！　これ見よがしにその名で呼ぶな！！」

人懐っこそうな顔をしながら店主は、ピクつと反応した姫にさら
に言葉を投げかける。

「御嬢さんにきつと似合うものあるよ！！」

優雅で気品溢れ。高貴でみやびな貴方にこの子達も買ってほしいぞうだー！

どうだい？ 一つ買っていないかい？

「うつわー！ 金の為だと言っても。これほど“嘘”を並び立てるとは……凄まじグヘッー！」

魔王の鳩尾に姫の拳が食い込み。カエルを潰したかのような声が魔王からひねり出た。

「ほらね。見てる人は見てるものよ。アンタの目が高性能な節穴だから分らないだけよー！」

「高性能な節穴だと……？ せいぜい“低性能”な節穴だー！」
“節穴”の方を否定しなさいよ……」

そんな事を言いながら、露店の前で、品物を呟く姫。

「……うーん、どれがいいのかしら」

魔王は姫が見ている品物へ視線を流した。

（！？ なんでこんな物を大通りで売ってるんだ！？）

姫が見ているのは、女の子らしいアクセサリ類では無く刃物――武器を見ていたのだ。

武器を指差しながら、姫は魔王の方を向いた。

嬉しそうな顔をする姫に魔王は引き攣った顔をしながら、次の言葉を待った。

「ねえ魔王、アンタ。殺されるならどの武器がいい？」

「お前……誰が好き好んで『ああ、どれどれ。うーと。殺されるならこの武器がいいかな』とか選べるか！！」

「何よ。どうせ殺されるなら、なるべく痛くない武器を選ばせてあげるとか、人道的じゃない？」

「まず最初に、殺される相手に。死に方を選ばせる時点で、“非”人道的だ！！」

「よし、これに決めたわ。すみませーん。これ下さーい」

姫はそう言いながら エスカリボルグ と書かれた、武器を取り、それを買った。

「なんだその凶悪な武器は！？」

「かわいいでしょ？」

「お前がそれを持って、俺様のところに来た時は、“殺される”と思えばいいのだな！？」

姫は嬉しそうに、武器をポケットにしまい込むと……——何処にしまい込んだ！？

奇怪な武器は、いつの間にやら姫の手から消えていた。

「それで、あとは何を買えばいいの？」

姫の言葉に魔王は思い出したように、しまってたあったメモを取り出した。

そこには中ボスから依頼された買い出しや、小ボスや妹から頼まれた物もあった。

「えーと何々。中ボスは……“仏の御石の鉢”と“蓬萊の玉の枝”。

“火鼠の裘”……アイツはかぐや姫か!?”

魔王は中ボスから渡されたメモを破り、ゴミ箱へ投げ捨て。残りのメモを取り出した。

「ふう、気を取り直して。妹はつと……——“裸執事”」

魔王は一息吐き、少しだけ落ち着き。

そして、目をカツと開き「BLゲームかよ!?!?”と言いながら、メモを地面に叩き付けた。

「相変わらずね、ブレないわね、あの子」

「ああ……」

妙にリアルな注文だな、と内心複雑な思いをしながら。仕方ないので妹の願いは叶えておく事に決めた魔王だった。

今度こそ、と魔王は言いながら、小ボスから渡されたメモを開いた。

——ドラゴンボール（ナメック星バージョン）。

「何処で手に入るんだよ!?!?”

「ナメック星のドラゴンボールって……確か、願いを三つまで叶えてくれるやつよね?」

嫌に欲深いわね……」

魔王は少しだけ疲れた顔をしながらも、メモがもう一枚ある事に

気が付いた。

「ん？ これは誰のだ？ 中ボスからのか？ ははあ、どうせかぐや姫の続きで“燕ツバメの子安貝”とかなんだろう？」

魔王はそう言いながらメモを開いた。

——ドラゴンレーダー。

「ぐぬぬ、中ボスと小ボスめ……貴様らは！！ タッグ組んで俺様を馬鹿にしてるのか！！？」

はあはあ、と肩で息をする魔王。

最初から最後まで、まともな注文は何も無かった。

「あれ？ 魔王。このメモ続きが書いてあるわよ。

えーと。あはは、『魔王↑馬鹿（笑）』って書いてあるわよ」

「返答まで予測済みか！！？」

結局、妹には目的の物。中ボスには調理器具を、小ボスにはゲームソフトを買い。

無事に魔王と姫は帰路についた。

おまけ。

王室では、魔王がモーニングティー（昆布茶）を片手に新聞を読

んでいた。

そんな魔王の姿を見て、姫が何気なく話しかけた。

「アンタでも新聞を読むのね」

「当然だ。欠かさず毎日読んでいるぞ」

偉そうな態度で「魔王たるもの当然だ」と言いながら、新聞のページを一枚めくった。

だが、明らかに新聞を持つ手が震えていることに姫は疑問を感じていた。

そんな中、中ボスが王室に入ると、魔王が持っている新聞を覗き込み。どのページを見ているのか確認すると突如口を開いた。

「魔王様。今日の四コマ漫画、読み終わったのでしたら早く私に下さい」

魔王は静かに新聞を中ボスへと手渡すと、気まずそうに頬を掻きながら、姫の方を見た。

「……………あはは」

「『あはは』じゃないわよ!!」

たまに真面目なところを見せたから関心したのに、やっぱりこういうオチだったのね!!」

そのあと、激怒した姫にぼこぼこにされた魔王は、後日からは海外新聞である

ニューヨーク・タイムズ を読んでいたが、傍からは見栄っ張りだな、と思われる中。

姫が隣にいる時に、ぼそっと「（英語）読めない……………」と口にし、

姫に大笑いされたのはまた別の話。

第十五話『姫と魔王、二人でお買いもの！?』（後書き）

オチが思いつかない↓小ネタで誤魔化す↓誤魔化しきれない。

第十六話『フラグ乱立!?!』

第十六話『フラグ乱立!?!』

魔王城——王室には現在、魔王城主要メンバーがそろっていた。姫と中ボス側。

そして魔王、妹、小ボス側で机を挿み、議論を交わしていた。

そして、主要メンバーたちが集まっているのには当然、訳があった。

今後、魔王城ストーリーの方針を決めるといふ、大切な議論。

「……えっ？ 魔王様、今なんて言いました？」

「だ・か・ら!! 『フラグ』を沢山出せば、話に深みが出ると思っただよ」

「沢山出しても回収できなければ、深みを出すどころか、中身の無い話になるだけじゃない？」

姫や中ボスが『フラグ乱立法案』に反対し、魔王を中心に妹と小ボスが推進側となっていた。

「『フラグを立てる』って言うても具体的に何をやるのよ？」

「ふふふ、よくぞ聞いてくれた、では心して聞かがいい」

姫に指を指し、魔王は妹や小ボスに視線を送り、二人もそれに頷

いた。

「人間共も、まさか国王と魔王^{俺様}が手を組み、世界を滅ぼさんと、画策しているとは夢にも思うまい」

「魔族と人族を生贄に捧げ、^{天国への扉}ヘウンズ・ドアを開ける。そして、私たちは 神 となるのよ」

魔王や妹が気味の悪い笑いを浮かべ、姫は「えっ!? なに、なんか始まったの!?」と齷齪^{あくせく}していた。

「志半ば^{いじはんぱ}で死んだ、中ボスの為にも、この計画は必ず成就^{じゅじゅう}させねば」

「ええ、亡き、中ボスの為にも」

「まさか タンスの角に小指をぶつけて即死 とは、だれもが予想しませんよ」

悲しさに皆が暮れる。そしてなぜか死んだことになっている中ボスは何ともいえない顔で呟いた。

「私、死んでるんですか…… しかも物凄い無様じゃないですか……」

「そんな中ボスが死んでもう二日……俺たちもそろそろ悲しみから立ち直り、前に進まねばな……」

「切り替え早すぎません!?」

「そろそろ、タンスの角から移動しなきゃね……」

「まさかの現場放置!?!?」

「ですが、姬ちゃんが一部の魔族や人族を引き連れ、魔王様に反旗を翻し、魔王城攻略準備をしていると聞きます。

数は少ないですが、勇者でも選りすぐりの精鋭揃いと……」

「あれ? 意外に王道っぽくなって来たのね」

「あの程度の力で俺様に逆らうなど、片腹痛いわ。ついに本来の力に目覚めた俺様の前では、どんなものも敵ではない」

「おにいの計画はもう誰にも止める事は出来ない……」

「そうだ……ついに成就する。ヘウンズ・ドア によって開かれるのだ。二次元世界^{アニメ}への扉が!!」

「二次元に行きたいが為に、全種族を生贄に捧げるって……私が反旗するわけね……」

「そして、後日」

魔王がそんな事を言いながら立ち上がる。

「ついに開くぞ！ 二次元 への扉が!!」

両手を広げる魔王、しかし、その魔王の顔色が急に变化する。

「くっ！？ こんな時に！！ まさかあの時『取込んだ』もの達が俺様の体で暴れているのか!?!」

「魔王様、まさか!?!」

「そうだ……あやつめ、最後の最後で我に齒向かうつもりなのか!?!」

「おにいが倒れたら、この計画が!?!」

「妹ちゃんもノリノリね……」

「魔王様が『取込んだ』昼に食べたあの 芋けんぴ が体内で腹痛^{暴れて}いるですね!?!」

一同「……………」

「ですが、『世界中の食べ物を芋けんぴ』に変えるという、あの魔法……魔王様はどこで覚えたのですか？」

「（キラーパスの行く先は）俺様かあ！？……——ああ、あの技は『芋けんぴ』の王である。大学芋王から教えてもらったのだ」

（苦しい、いい訳ね）

（ですが姫様、正直、どのような言葉を並び立てようとも、あの無茶振りには対応できないかと……）

「だけどそんなおにいの力でも、『アイツ』には遠く及ばなかった」
「だが妹よ、あの時ツ——」「芋けんぴ——」「……………クツ」

すかさず『芋けんぴ』と叫んだ小ボスに若干たじろぐ魔王だったが、すぐさま対応してみせる。

「……………そう終末術式『芋けんぴ』が完璧に発動していれば『奴』も無事では済まなかっただろう」

（あぶねえ……………またしても小ボスの、謎の『芋けんぴ』押しが来たぞ……………）

（おにい、ナイス！）

「おにいが『世界を終わらせる力』を持ち、姫には大鎌には『世界を創造する力』。この二つの力で世界を作る……………それがおにいの世界二次元化計画……………これが成就されれば、世界中が平和になる」

「ああ、それにはまだ足りないものがある。願いを叶えると呼ばれる『賢者の——』」「芋けんぴだね——！」

一同（賢者の芋けんぴ！？）

（それは賢者専用のおやつなのか！？）

（とりあえず魔王様には縁のないおやつですね……）

（芋けんぴが何か分からなくなってきたわ……）

（おにい、もう私帰りたい……）

「……………はあ。……………——解散！……！」

小ボスは「ほんとにあるよ」とふざけたことを主張していたが、当然皆はその言葉に耳を貸すことなく、王室を後にした。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

五日後。魔王自室にて。

小ボスは魔王の部屋をノックし、魔王も入るように返事をする、小ボスはドア少しあけ。

顔を少しだけ出した。

「魔王様。『賢者の芋けんぴ』いります？ 軽い願いなら六十回。袋丸ごと使えばどんな願いでも叶いますよ？」

「ハッ！？ はは、さては俺様を担ごうと言っただな？ そんな物は存在しないに決まってる！」

小ボスは袋から芋けんぴを一つ取り出すと「ドクターペッパーが

ほしい」と言い。

手に持っていた芋けんぴは瞬く間にドクターペッパーに変わった。

「……へ?!」

「あと五十九本か……まだまだ飲めるね」

小ボスはそういうと、魔王の部屋のドアを閉めた。

咄然とする魔王だったが、我に返り、すぐにドアを開けるが、すでに小ボスの姿はなかった。

「えっ!? はあ!? あゝあゝ!? どういう事だ!? おい待
て小ボス! 俺様に袋ごと寄越せ!!」

待つてくれええええええええええええええええええええええ!!」

第十七話『珍獣現る！？』

第十七話『珍獣現る！？』

「ペットが欲しい」

こぼすようにして、そう呟いた魔王。

明らかに『また何か言い出したよコイツ』と言いたげな目が魔王に集まる。

現在王室には、姫と妹しか居なかった。

中ボスは魔王に代わり、一度魔界の元・魔王方に定期報告を行っている。

暇な為か、最近始めた“バイト”とやらに小ボスを行っているらしい。

姫も妹も渋々ながら手に持っていた本を置くと、仕方なく魔王と話す態勢になる。

妹が読んでいた本には 快感！！ 気になる彼をBLの世界へ落としちゃえ♪

と、何ともおぞましいタイトルが書かれていた。

だが、それ以上に気になったのは。

拷問！！ 気になる彼を奈落の世界へ落としちゃえ♪

姫の持っていた本に魔王は戦慄せんりつを覚えた。

(……………。気になる彼…………俺様じゃない事を祈ろう)

心が悲鳴を上げる中。魔王の言葉に二人が返事をする。

「どんなペットが欲しいの？ やつぱり『犬』とか『猫』？」

「魔獣召喚じゃ駄目なの？ おにのなら、神獣クラスでも呼びたせるんじゃないの？」

「うーん、一時的なモノじゃなく…………まあ姫の言う『犬猫』が一番近い…………。

だがなあ。なんかパツとしないのだ」

唸るようにして、自分の欲しい“理想”のペットを描く魔王。

「猫にしよう、ネコ。」

可愛いし、ポピュラーだし。テンプレだし。普通だし。書きやすいし。もう何かと都合がいい」

「迷ってたわりには、結構あっさり決めたわね」

「おにいはネコがいいの？ それならつてがあるから私に任せて」

面倒が嫌いな妹にしては珍しく、自ら厄介事を引き受ける。

少しでも不安にもなりながらも、特に知識の無い魔王は素直にうなずいた。

- - -
- - -
- - -
- - -

「ヘーイベイバー！！ どうしだんだ浮かない顔して！！」

ママの焼いてくれたチェリーパイが不味かったのか??」

「……ネコ?」

「見た目はネコね」

「かわいいでしょ?」

何だかんだ妹に任せると碌な事がないのでは? と内心思っていたが、妹は一時もしないうちに、何処からかネコの入った段ボールを持って帰宅した。

そこに居たのは、白い毛並みのネコだった。

子猫とはいかないまでも、まだ大きくなったばかりの若いネコだった。

何故か自己紹介をするように妹が言うと、突如喋り始めたのだ。

普通にしてればネコにしか見えないが、人と同じ言葉を喋るネコと言つのは魔王も見るのは初めてだった。

ネコを飼う時、どんな名前にしようかと、色々と思いを巡らせていたが、一気に萎える魔王。

そんな魔王の気分を野生の感で読みとったのか、ネコ? が喋り始める。

「どうした? 俺の可愛さに身もだえしているのか? ふふふ、もっと愛でるがよい!」

そう言いながら、珍妙不可思議な喋るネコは魔王にフワフワで柔らかなそうな腹を見せながら、ゴロゴロと床を転げ回った。

確かに見た目は愛らしいのだが、それ以上に、“喋る”というのが不気味である。

「どうしてこのネコは喋るのだ? 何かの魔法か? 一時的に言っ

ている事が解る魔法なら知っているが。

ネコ自身が、人語を喋る魔法なんぞ、知らんぞ」

魔王は妹にそう訴えながら、ネコを指差した。

姫は物珍しそうにしながらも、“触りたい”という欲求を抑えられないのか、

喋るネコのお腹を緩みきった顔で、サワサワと撫でていた。

「いいえ、この子は始めから喋るみたいなのよ、知り合いの人も不気味がつてた見たいだから、折角の機会だから貰って来た。どう？可愛いでしょ？」

確かに可愛らしさはあったけど、それ以上に……。

「どうした？ 俺を飼う決心がつかないのか？ 何がお前の決意を鈍らしているんだ？」

食費か？ 大丈夫だ。俺はネコ以外だったら何でも食らうぞ……！！

……いや何も無いのなら食った事はねえけど、ネコだって食らってやるぜえ」

器用にも肉球をこちらに向けながら、招き猫のように手を振り、愛嬌を振り撒いていた。

「ねえ魔王。それで、どうするのこのネコ。喋るのは確かに不思議だけど、それ以外は普通よ。

飼ってもいいんじゃないの？」

姫がネコの首筋をなでながら、そう言った。

ネコも気持ちよさそうにゴロゴロとノドを鳴らしながら「話がわかる人間だなアンタ！！ 生憎、胸はちと小せえが。ココロはだけ

えな!!」と、姫を褒めた？

「待て待て!! いくら悪態吐いたからってネコの首を絞めるのは色々和不味いッ!!」

喋るネコの首を絞めている姫の腕を強引に振りほどこうとする魔王。

既に首を絞められているネコには意識がなく、口から泡を吹きながら、白目を向いていた。

「ゲッボ、ゲッボ!! …… 外道! 非道! 悪鬼! 極悪! 下郎! 屑!

こんな愛らしい俺によくもこんな事ができるもんだ」

文句を言うネコに対して姫はひと睨みくれてやると、すぐさま「ヒィ!」と言いながら魔王の後ろに隠れた。

魔王も、まるで自分を見ているようだ。と内心近しさすら感じながら、同情を寄せていた。

「それで、この気色悪い喋るネコは何処の保健所に持っていけばいいの?」

「さっきと言ってる事が真逆だな。器の小さい奴だな、だから胸も小さッ——いててててッ」

姫の手のひらが魔王の顔面に近付き、アイアンクローが炸裂した。さくれっ万力のような力で絞め付けられた魔王は、激痛に顔を歪めた。

「私が連れてきといて言うのはなんだけど、今更捨てるのはちよつとどうかと思うわよ。」

とにかく名前でも付けければ愛着も湧くはずよ」

フォローするようにして妹が言うが、姫は短く「非常食。あるいは“肉”とかにしましょう」と言い、非常食だと言われた当“猫”も青い顔をしながら「えらい所に来てしもつた」と言いながら、頭を抱えていた。

「とりあえず、ネコだと可哀想だし。“ハチ公”とかでいんじゃないか？」

「魔王、アンタそれ《忠“犬”》よねそれ！ 犬じゃない！！ 余計に混乱するわよ！」

「山猫とかいんじゃないか！ かつこいいし！ 駄目なら鴉レイウでも――

――

「駄目よそんなの！」

「御堂みどうさんがいい。名前は孝典たかのりで――！」

「なんだかよく分からないけど、妹ちゃんに決めさせちゃいけないって事だけは分かったわ」

姫の言葉に頬をぶくーと膨らませながらに拗ねる妹、そんな妹は反撃とばかりに「じゃあ姫は何かいい名前が浮かんでいるのよね？」と投げかけた。

「ん？ 猫でしょ？ なら名前も“ネコ”でいいじゃない」

「「愛着わかねえよ（ないわよ）――！」」

妹と魔王が同時にそういうと、姫は「うーん」と唸り。やっとの

ことで真面目に考え始めた。

「“野田総理”とか、偉そうな感じでいいんじゃない？」

「あのな姫。今は良くても、一年後とかに“元”総理って付けなきゃいけなくなることを考えると却下だろう。

あの国はコロコロ総理を変えるからな、あれはただの民衆の非難を浴びるための的だ」

「おにいおにい！ “シュレディングーの猫”とかいいんじゃない！？ 生きてるか死んでるかが分からないという、儚げな存在感が漂ってて！！」

「待て待て！！ これじゃあ埒^{あち}が明かない。

ここはこの“ネコ”自身に決めてもらおう！ せつかく喋れるのだ、自分で決めてもらってもよかるう」

魔王はそういうと、姫も妹も渋々従った。三人の視線が猫に集まった。

「そうだな、俺の事は“ご主人様”とでも呼んでくれ」

その後、三人からボコボコにされた猫は、結局、名前がネコで満場一致した。

第十七話『珍獣現る!?!』(後書き)

新キャラですよ、新キャラ!!

基本的な立ち居地は、魔王と同じなヘタレです。

第十八話『この城の“主”って誰だったけ!?!』(前書き)

ちょっといつもより長めです(1・7倍ほどw)

第十八話『この城の“主”って誰だったけ!?!』

第十八話『この城の“主”って誰だったけ!?!』

中ボスが調理場で、朝食の準備をしていると、突如、《人語を喋る》ネコと出くわした。

魔王様達からは、新しく“ペット”を飼ったとは、聞いていたが、“喋る”とは一言も説明を貰っていなかった。

「……全ての猫が“ねこ缶”好きだと思ふなよ」

「はあ、そうなんですか。失礼しました……」

可愛らしい声で足にすり寄り、餌を強請ったかと思えば、今度はそれが気に入らないと“言われた”のだ。

そんなネコに対して、些か不満に思いながらも、小さく頭を下げ、非礼を詫びた。

「お前といい、魔王^{あいつら}達といい、昨日の昼も《ねこ缶》。夕食も《ねこ缶》。これじゃあまるで“猫”じゃないか」

中ボスは心の中で「猫ですよ」とツツコミを入れたかった。だがしかし、このネコに対して、中ボスは今まで面識もなく、扱い方や対応の仕方に困惑していたので、特に何も言わなかった。

「おいお前、聞いているか? お前“召使^{めしつかい}”とか下男とかだろ?

俺はなあ愛玩動物だぞ? 俺は仕事は主に愛嬌^{あきせう}を振りまく事。お前は仕事は雑務だろ?

なら俺に黙って従うのが筋つてもんだ」

「ああ……はい、わかりました……。では私は貴方様に一体何をお出しすれば宜しいのですか？」

「おいおい、俺は“猫”だ。猫と言ったら食べる物は当然“ネズミ”だろう？ トムとジェリーとか見ないのか？」

「（あのアニメでは実際に食い殺す描写はないですが……）……分かりました。今準備するので少々お待ちを」

中ボスは業務用の大型冷蔵庫から、冷凍マウスを一匹取り出した。ちなみにこの《冷凍マウス》は城の庭師こと《シザーマン》の“おやつ”だが、一匹くらいは貰ってもいいだろうと思い、取り出した。

その冷凍マウスを魔法で瞬時に解凍し、そしてお望み通り、ネコの前に置いた。

大き目の皿に解凍したマウスを置くと、先ほどまで『ネズミを寄せ』と騒ぎ立てていたネコが血の気の引いた青い顔で沈黙していた。

そんな顔色の悪いネコに対して、不思議に思った中ボスは、皿を少しだけネコに近づけた。

するとネコは「ひい！！」と怯えたような声を上げ、ネズミから遠ざかった。

「あの……食べないんですか？」

「（ホントに出てくるは思わなかったぜえ……）あつ……ああ……食べるとも。そう……俺はネコ……俺はネコ……」

皿に盛ったネズミを前にして、ネコは自己暗示を掛けるように幾度も「俺はネコ」と呟いていた。

まさかと思い、中ボスは皿を少しだけネコから遠ざけるとネコも「ふう」と安堵するように息を吐いた。

そして再びその皿をネコへと近づけると「ひい!」と飛びのきながら後ろに下がった。

そんな反応が面白くて、中ボスはネコの前で屈み、柔和にゅうわでやわらかい笑顔で

「食べ、食べ、食べ」とテンポよくネコの前で手を叩きながら『食べ』コールを開始した。

「お前見かけによらず、相当外道だな！」

その言葉に中ボスは笑顔を凍らせ、そして冷え冷えとするような低い声で小さく「黙って、食え」と言い放ち、ネコは「ひい！！」と恐れながら調理場を走り去った。

「虚ろな乳と書いて、虚乳。うまい事を言つやつも居るもんだ」

王室で真・魔王神宮の画面を見つめながら魔王は呟いた。

当然、姫の前でこのような事を呟きでもすれば、即座に鉄拳制裁が執行される。

しかしながら、（自称）頭脳明晰、魔王様！！ からの俺様は、
 姫がこの王室に居ない事は確認済みだ。

そんな事を考えながら魔王は、アニメキャラが描かれたコップに

注がれたぬるくなった珈琲を飲み干し、再び真・魔王神宮と向かい合った。

「ん？ 何々?? 『巨乳より美乳だろうJK』 ふむ真理だな。

『結局美人だったらどんな乳だっていんだろ?』 まあ確かにそうだな」

「私はどうなの?」

「あ? なんだ“姫”か。 まああれだな、姫は乳が大きい小さい以前に、“暴力的”ってところがすべて駄目にしてるよな」

「じゃあ“暴力的”じゃなくなったら?」

「うーん、それはそれで“キシヨい”」

「……『キモイ』とかじゃなくて、『キシヨい』ですって?!」

「げえっ関羽!?——じゃなかった!! げえっ姫!? 貴様いつの間に!?!」

魔王は、画面から目を離し、背後に居るであろう、声の主に向かって振り向く。

そして、背後には、手でチョコキを作り、思いつき目潰しの体制で待ち構える姫の姿があった。

「さあ、アンタの罪を数えなさいッ!」

姫のひと声の後、断末魔を上げながら椅子から転げ落ちる魔王。床を転げまわりながら、頻りに「目があゝ目があゝ!」と叫んでいた。

姫は見苦しく這いずる魔王の鳩尾に、止めとばかりに蹴りを（二発ばかり）入れると、ようやく魔王は“沈黙”した。

まるで、物言わぬ死体と成り果てている魔王をよそに、姫は仕事をやり終えた、清々しく満ち足りたような顔をしながら、ポケットに入れてあった煙草の箱に似たシガレットチョコを一本取り出すと、煙草を銜^{くわ}えるように口へと運んだ。

「わあー！！ 姫ちゃんがチョコ持つてる、ちょーだい！ ちょーだい！！」

王室の扉を勢いよく開けた小ボスは、姫の口先にあった煙草のよな物を迷わず“チョコ”と言い当て、駆け寄った。

その途中、自分の上司であるはずの魔王を踏みつけ「ぐぶあゝ」とくぐもった声がした事には目もくれず、一直線に姫へと辿り着く。

小ボス、あの子…… 今、態々視線を床に落として。

歩幅を無理に合わせてまで、魔王を踏んだわよね？

内心、そのような事を考えながら、姫は黙って小ボスにチョコを渡した。

遠慮なく、四つ持っていくところは抜け目ない。

チョコを嬉しそうに頬張る小ボスは、口にチョコを含みながら視線を彷徨わせ、その視線は電源の入ったパソコンに止まった。

小ボスはパソコンの前に魔王が居ない事に気がつき声を上げた。

「もぐもぐ—— はあれ？ まおほうさまがいまへんよ？」

口いっぱいにチョコを含み喋る小ボスはきつと『あれ？ 魔王様が居ませんよ？』と言いたかったのだらう。

そんな聞き取りづらい声に脳内補正を掛け、話す。

「アンタがさっき踏んだ、“アレ”よ」

姫は“アレ”と言いながら、未だ不動で話すことすら儘^{まま}ならない魔王に向かって指を指した。

小ボスは「あー！」と驚きの声を上げながら魔王に近寄り、心配そうに顔をしながら、その手で魔王を支え、上半身だけ起き上がらせた。

部下らしい、献身^{けんしん}的な態度で魔王を支える小ボスだったが、鋭い姫の目は、手にたつぷりとついたチヨコレートを魔王の服で拭いた小ボスの行動を見逃さなかった。

「魔王様！ いったい誰がこんな事を！？」

「……………」

魔王は両目を必死に開けようとするが、激痛で両方とも開けなかった。

仕方なく、先ほどの会話を頼りに、力の入らぬ指で、音源を辿りながら、一人の人物を指差した。

「姫ちゃんですか！？ これはなんでも酷すぎますよー！！」

いくら、魔王様がどうしようもないくらい

『生きてる意味も無く』『誰からも必要とされず』『それでも沢山の植物や動物を食べる事で抜き長らえて居る』

ような屑でも、酷すぎますー！！」

「ガハッー！！」

「うわっ汚いなあ」。魔王様、血を吐くなら、『吐く』って言うてくださいよ！」

「……………外道（小声）」

「姫ちゃん何か言いましたか？」

「いえ、何も」

[illegible]

「くそ、なんだあの召使は！？　デケエ城に住めたと思ったが、凶暴貧乳女の次は、鬼畜眼鏡。」

「モンスターハウスかココは？」

ぶつぶつと文句を言いながらネコは一人廊下進む。

そして、王室の前を通ると足を止めた。何やら中が騒がしい。

疑問に思ったネコは少しだけ開いていた扉を、前足で押すと、中に入った。

「あれは、我が主ではないか」

小ボスに抱きかかえられた魔王、それを椅子に座りながら横目で
見つめる姫。

何やら言葉を交わしいいるようだったが、それを聞きとる事は出来なかつた。

仕方なく、あの“凶暴貧乳女”の居る部屋へと足を進めた。

「あつ！？ 猫ちゃん！！」

突如現れたネコに対して、小ボスは慌てて近づく。小ボスと言う
支えを失った魔王は重力に引かれ、なすすべもなく、頭を大理石の
床へと叩きつけられた。

ゴンツと鈍い音が響いたが、それを小ボスや姫は気にする様子は

ない。

「ベツチヨベツチヨの手で俺に触るな!! 血とチヨコレートのコ
ラボレーションですげえ粘度になってるぞ!？」

「うわっすごい喋る猫だ!？ えっどうしてなの？ 蝶ネクタイと
かでも付いてるの!？ バーロって言って!!」

「はいはい、バーロバーロ。これで満足か？ ならとっとと離せク
ソガキ」

この子かわいげない、と言いながら小ボスはネコを両手から解放
した。

白色の毛が一転、赤色と茶色の物体で、汚く着色されてしまった。
そんなネコに姫は黙って小さ目のタオルを渡すと、ネコも素直に
それを受け取り。

前足を使つて器用にも体に付着した物体を拭き取った。

「だからガキの相手は嫌なんだ」

「それでアンタ。何しに来たの？ さつき『ねこ缶は嫌だ』とか言
つてなかった？」

「お前が厨房に言えば他の食べ物にありつける、とか言ったから言
つて来たぞ! まあ結果は散々だったが……」

「あれ？ 中ボスに会わなかったの？」

「ん？ あの燕尾服えんびふくに割烹着かつぽうぎの、変な召使の事か？」

「会ったんじゃない。それで、何か出してもらえなかったの？ 彼
は魔王とか以外なら、普通に丁寧に接してくれるはずよ」

「ああ、最初は丁寧だったさ……」

なぜか言い淀むネコに追求せず、姫は小ボスの方に視線を流した。

あれ小ボスが居ないわ？ まあそろそろ朝食の準備も整う頃です

「ネコ、アンタは魔王を起こしなさい。朝食に遅れるわよ」

「あ？俺にも違うものがでるのか？」

「まあ何だかんで中ボスは優しいわよ、期待してもいんじゃない？」

[illegible]

テーブルを囲む皆の中に、訝しげな表情を浮かべる者が一人。

それに対して誰一人ツツコミを入れる者も居ない。

なぜか、料理は末席の方から配られ、この様子だと、魔王に料理が運ばれるのは最後。

アイツ、人間以上に器用じゃないのか？

288

が運ばれて来る番だ……

「グロテスク!? えっなにこれ!? ネズミ!???」

「《ドブネズミのホワレ、トマトのピューレ添え》です。おいしいですよ、食べたことはありませんが」

魔王の前に出された料理――

ネズミの皮が剥がされただけの原型残るネズミを蒸し焼きにしただけの料理にしか見えなかった。

嫌なことに、さらにその上にトマトソースが掛かっていて、それが《血》を彷彿ほうふつとさせる。

料理人の悪意と憎悪を見事に表現している、まさに究極の料理と言っよう。

「……主あるじ、すまん」

ネコは何やらそう呟いて、一心不乱に自分の料理を食い漁った。

絶望に染まる魔王。気持ち悪い料理を目の前に茫然とする魔王の耳に、何やら声が届く。

「……っえ……!」「……え!」「……え……!」

『……“え”……?』 何のことだ? こいつらは何を言っているんだ!?

皆が口から同じような言葉がこぼれる。

魔王は必死にその言葉を聞き取ろうとする。だが脳がその言葉を拒絶する。

「……え！」「え！」「……え！」「……っえ！」
「……え……」「く……え！」「く……え……！」「……食べ！」

「……食べ！？」

魔王を包む『食べ』コール。まさに狂喜の宴。悪魔たちの集い。
事の原因である“ネコ”は涙ながらに『済まねえ主……』と何度
も呟く。

そんな中、魔王は唇を噛みしめ。頭の中で同じ言葉を頻りに唱え
る。

俺様は食べない……！！ ネズミなんて食べるもんか……！！
空気読めない奴と思われても構わない……！！ 食べない……
……！ 絶対に…… 食べないぞ！

「俺様は食べないぞおおお！！」

「『アンタが、食べるまで、殴るのをやめない』って言ったら？」
「……………」

姫の一言で魔王の決意は揺るぐ、いとも容易く揺るぐ。
優柔不断な人物より、簡単に決意は崩れた。

「…………——俺様は人間をやめるぞ！ 姫えええええーッ！！」

魔王はその言葉を最後に、一気に料理を口へと流し込んだ。

「……………うっ…………——おええええええええええええ」

この後、朝食は更なる悲劇を遂げ、散々な朝食になってしまったのは言うまでもない。

第十八話『この城の“主”って誰だったけ！？』（後書き）

城の主は今は“姫”ですけど、かと言って少なくとも魔王が一番下
っ端って事は無いよね？ ……無い……よね？

第十九話『支持率を維持せよ!! 魔王様（ラジオ）演説!?!』

第十九話『支持率を維持せよ!! 魔王様演説!?!』
ラジオ

中ボスが何やら重要な報告があるとの事で、昼食後、魔王含めたいつものメンバーは王室へと集合していた。

そして、中ボスが口にした言葉に、全員が驚いたような顔をした。

「は? ラジオ収録?」

「アホ面丸出しのリアクションどうもありがとうございます。」

ええ、今言いました通りラジオの収録をやります」

ラジオ収録? やっぱりラジオって言えばあれか?

みんなで話したりするのを公共の電波に乗せて配信するアレの事か?

皆、内容はある程度分かる物の、いざ『ラジオ収録』と言われても何が何やらと言った表情を浮かべていた。

「何で私たちがラジオ収録なんてやらなきゃいけないの?」

「姫様、それはですね」

中ボスは矢継ぎ早に説明を開始する。

話は至って簡潔に伝えられた。簡単に言っしまえばこうだ。

「ほう、つまりは民衆へのご機嫌取りみたいなもんなんだな?」

「理解力の乏しい魔王様にはそのくらいに思っただければ十分です。」

とにかく、今は魔王様が人間界に遠征し、魔界に“魔王”が居なくなつて丁度一年。とても微妙な時期なのです。

ですから、国民の支持を得るためにも、ここは魔王様自ら《ラジオ演説》と言うわけです」

「ねえねえ中ボス。演説つてどれくらい影響があるもんなの？」

「小ボスが聞きたい事と言うのが、収益 と言う意味でしたら、演説によつて発生する収益はそうですね……。」

今まで魔王城に常在させていた軍事力を、三か月ほど維持出来るくらいのお金を集める事が可能です。

現在の魔王城が一月に使っている金額で考えますと五年は遊んで暮らしていても大丈夫なほどですかね」

『五年！？！？』

なぜか“五年”遊んで暮らせるという言葉に全員の目の色が変わる。

エロゲ買い放題の生活ができると、魔王は嬉しそうに叫び。

魔王以外の皆も、各々の欲望を口々に言い。その光景を見て中ボスもやや呆れていた。

「はあ……まあ兎にも角にも、まずは皆様のご協力があつて初めて実現することです。」

魔界全土に私たちにラジオが流れるのです。それを肝に銘じて、収録に臨んでください」

妹 「ちょっと机叩かないでよ。なんか二回に分けて放送するから、毎回メンバーは変えるって中ボスからのお達なのよ」

魔王 「納得できねえ……」

妹 「さっ、おにい……もとい、魔王様の登場で大分盛り上がった所で、次のゲストの登場です！」

魔王 「あっ？ 今までのトーク内容のどこに『盛り上がる』要素があつたのだ？！ いやいや、それよりも、まだゲストが登場するのか！？ もはや、俺様主体のラジオじゃ無いよな！！？」

ネコ 「どーもー“吾輩は猫である”で、一躍有名になった、ネコです」

魔王 「のっけから物凄い大ぼらを吹くなー！」

妹 「飼い主をずっと待ち続けた事で、渋谷駅前の銅像にもなつたほど有名なネコさんをゲストにお迎えして――」

魔王 「それはハチ公おおお！！ あれは“犬”！！ 俺様が前々回、お前の名前を決める時にボケたのが全ての元凶か！？」

妹 「ネコさんの登場でおい……魔王様のテンションも上がりっぱなしね」

ネコ 「主は本当に猫好きだな」

魔王 「はっ！？ いつの間にやら俺様が“ツツコミ役”に！！？！ 誰の陰謀だこれは！！？」

妹 「では、今回のメンバーが全て集まった所で、次に移らせて貰います」

ネコ 「わーい」

魔王 「……………」

妹 「えーまずは お願い♪ 助けて♪ 魔王様♪ のコーナーです」

ドラクエのレベルアップ音

魔王 「誰かレベル上がった!？」

妹 「このコーナーでは聴取者^{リスナー}より頂いた、『こんな時、魔王様ならどう行動するの?』と言った、ご意見に、魔王様自ら答えるコーナーです。ちなみに今回は第一回目なので、ハガキの方は御座いません」

魔王 「なら、このコーナーは中止——」

妹 「ですが!! 今回は特別に魔界の方で国民の皆様にご直接! スタッフが意見を聞いてきました」

ネコ 「俺の主である魔王様なら、どんな窮地でも脱する事ができるはずだ、難なく答えを出してくれるだろう」

妹 「では早速一通目。鬼畜眼鏡大好きっ子 さんからの質問です」

魔王 「いきなり濃厚なB^{ボーイズラブ}Lの匂いがするぞ……」

妹 「『魔王様聞いて下さい。先月、私の父が不況の煽り^{あお}を受け。リストラにあってしまいました。そしてそれがショックだったのか、父は次の仕事は探す訳ではなく、毎日家で酒に酔う日々。そんな父を見兼ねた母は、私と弟を連れて、家を出よう、と言っています。ですが、弟は父に付いて行こうとしています。一体私はどうすればいいんですか? 教えてください魔王様』。以上です、では魔王様ささっと解決しちゃってください!!」

魔王 「重いツツ！！ そんなに重い案件が舞い込んでくるとは考えも見なかったよ！！」

ネコ 「猫を飼えば万事解決！！」

魔王 「そんなもんで解決するか！！ だがそれにしたって、重すぎるわ！！ 俺様がおいそれと手を出して良いもんじゃないだろう！！」

妹 「父×弟の禁断の愛。萌えるわね」

魔王 「いやもう多くは望まないから、頼むからお前ら黙れ」

妹 「それで、結局どうするのよ、おに…… もう面倒だからやっぱりおにいでいつか。っでどうするのおにい」

魔王 「ええい！！ そのお前のお父さんに、俺様に連絡を寄越すように言え！ 俺様が直接、再就職先を見つけるのを手伝う！」

妹 「解決」

ドラクエ、セーブデータ消滅時BGM

魔王 「割と正解ばい打開策出したのに、然も選択を誤ったような気持ちにさせる曲流すな！！」

妹 「では、次のお便りです」

ネコ 「おう、どんと来い」

魔王 「……………」

妹 「銃を向けられるたび5セント貰ってたら今ごろ大金持ちだぜ！！ さんからの質問です」

魔王 「すごい聞き覚えのある言葉だな……………」

妹 「『魔王様こんにちわ。僕はとある紛争地域に行っています。本当は“君”と話したかったけど、今はこの魔王様の関係者しか、僕の近くにはいないから仕方がない。彼らが居ただけでも奇跡だと思っよ』」

魔王 「既に嫌な予感しかしない！？　というか、お前らは一体どこまで質問を貰いに行つたのだ！？」

妹 「『では、魔王様、僕からの質問ですが。味方からの補給も途絶え、連絡もこの三日途絶したままです。ですが上からののは、ここで待機するように言われています。しかし、私たちの隊はもう限界です。上層部の指示なしに撤退しても許されま——ダニエルが撃たれた！！　畜生、ここまで敵が侵入して来ていたのか！？　——グバツ』」

魔王 「えつなに！？　今ので終了！？！？　今、撃たれなかった彼！？　というかこれは手紙なのか！？　それともボイスレコーダーで録音したのか！？」

妹 「もちろん手書きのメッセージよ。スタッフは便せんに入つた手紙を本人から受け取つただけよ。だから『グハツ』込みで書き込んであるわよ」

ネコ 「……血染めの手紙、やつはもう……」

魔王 「ネコよ、不吉なこと言うもんじゃないぞ」

ネコ 「了解だ主、心得たぞ」

妹 「それで、おにい。この人は撤退してもいいの？　いけないの？」

魔王 「……いや、正直な意見としては、俺様がどんな答えを出しても、彼に届く頃には、既に時間が答えを出してるんじゃないか？」

妹 「……………。解決」

ドラクエのレベルアップ音

魔王 「リスナー、レベルアップしたのか!？」

ネコ 「おめでとう、リスナーの 銃を向けられるたび5セント貰
つてたら今ごろ大金モチだぜ!! さんは“ギガスラッシュ”を覚
えた!!」

魔王 「強ッ!! リスナーさん強ッ!!」

妹 「あつ、もうこんな時間!? 今回はここまで、次回は中ボ
スと小ボスのBLEコンビと、現在の魔王城を占拠している“姫”の
三人でお送りするわ」

魔王 「国民に魔王城が人間に占領されてるのばれるうう! とい
うかまで十分程度しか録音してねえ!? 短すぎだろ!」

ネコ 「あとはあれだ。エンディング曲を二十分くらい流すから、
きっかり三十分番組だ」

魔王 「露骨な嵩増かさましだな……」

妹 「エンディング曲は、この曲 大きな虫の羽音」

魔王 「不愉快過ぎだろう!! 誰が好き好んで二十分も虫の羽音
を聴くんだよ! 誰とくだよ!？」

妹 「では、次回の放送で会いましょう。せーの」

ネコ&妹 「ばいばーい」

虫の羽音♪ 二十分バージョン

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

自室で一人、今回のラジオに関する書類に中ボスは細部に至るま
で目を通す。

しばらくして、ようやく机の上に山積みになっていた書類を読む
終わり、一息つく。

関係書類は一通り見たものの。今で部屋の片隅を占領している段ボールの山に対して手を裂ける余裕はなかった。

「ふむ予想より、大分多いですね」
「何がだ？」

中ボスが段ボールから目線を外し、声の主が居る方を見た。
ドアの半分ほど開け、そこから体を滑られるように魔王が部屋へと入る。

背中ではドアを閉め、先ほど中ボスが見つめていた段ボールへと視線を移す。

「ハガキですよ。次回放送分に備えて、番組の最後に告知しておいたんです。」

今回のコーナーで使う為の回答などが詰まったハガキの山です」

「段ボール六つ。これ全部がハガキだと？」

「魔界全土に魔王様の声を届けたのです。ある程度の予測はしていましたが、予想より十箱も多いです」

「は？ 『十箱多い』？ まだあるのか」

「来るときに気がつかなかったのですか？ 廊下にまだ十四箱置いてありますよ」

中ボスの言葉に魔王は再びドアを開け、顔だけ廊下にだし、辺りを見た。

あつた。確かに十四箱。

「はあ……流石にこれを次の放送に備えて振り分けるのは骨が折れます……」

「ファンレターとかもあるのか？」

「ほとんどが魔王様宛のファンレターですよ。力がすべての魔界で、魔王様は最強の力の持ち主なんですから。」

いつもはこのような手紙は私どもに届く前にすべて返却しているのですが、今回はリスナーからの質問や回答が混じっているだけに、どうも判別が難しいらしく。一応全てこちらに送ってもらいました」

「ほう、どれどれ」

魔王はそう呟くと、一番手前の段ボールを近寄り、ガムテープをはがし、手紙を手を取った。

「『魔王様、私と結婚してください』普通だな。おっこれも可愛らしい字だな、なにになに。……………『私の物にならない魔王様なんて要らない！！ 魔王様を殺して私も死ぬ！』……………うわっリアクシヨンに困る」

「ヤンデレも沢山いますよ……………」

「リアルでいると正直引くな……………」

山のような手紙を見つめ、これから訪れる作業に対して、途方に暮れる魔王と中ボス。

その時、廊下の方で叫び声と誰かが何かが倒れた音が聞こえ、魔王達は廊下に出る。

「いたたた…………… あっ魔王様と中ボス！！」

転んだ拍子に鼻を打ったのか、鼻が少しだけ赤くなっている小ボス。

その傍らには、小ボスが躓いた——というより、激突した段ボ―

ル。

小ボスの激突をもろに受けてか、段ボールの中身は至る所に散らばり。彩り鮮やかな手紙が廊下に敷かれた赤い絨毯じゅうたんを染めあげる。

手紙を読むだけでなく、まずは十四箱分の手紙を集めなければならなくなってしまった。

再び魔王と中ボスは途方に暮れた……。

第十九話『支持率を維持せよ!! 魔王様(ラジオ)演説!?!』(後書き)

セリフの前に『名前』とか書けないかな〜などと考えていたが、ラジオ回とか作れば行けるんじゃないかグヘヘっと考え作った回。手紙の仕分けが終わればラジオ回第二回目を書きますw

第二十話『姫って馬鹿？ それとも天才？』

「姫って馬鹿？ それとも天才？」

突然ですが、姫が変だ。

ああ、どれくらい変と言うと、たとえば……

「おつ中ボスと姫が、あいつら何してるんだ？」

廊下で頬を赤らめながら中ボスに話しかける姫。

まるで別人のように、モジモジとしながら中ボスに何かを話す。

中ボスは然もいつもの事言わんばかりに、微笑みながら姫に返事をした。

そして、姫はハツとした顔をした後に、嬉しそうに笑った。

更に魔王を驚かした事が……。

「……ありがとう中ボス」

少し恥ずかしそうにお礼の言葉を口にする姫。

そんな姫を今週だけでもう三回も見かけている。

三回とも全てが全て、まったく同じと言う訳ではないが、短く言ってしまうえば

恥ずかしそうに話す姫

↓
微笑み、言葉を返す中ボス

↓
嬉しそうに喜ぶ姫

大体このような内容だ。

俺様とて、疑問に思っているので、何をしてるのか訊こうともしたさ、だがな。

「中ボス、姫。お前ら何してるんだ？」

「ちょ、魔王！！？ アンタこそ何でここに居んのよ！！」

明らかに動揺を見せる姫。そんな姫に代わり、何やら説明をしようとする中ボスであったが、姫はすかさずそれを阻止。

「ああ、それはですね——」

「何でもないわよ！！ 行くわよ中ボス！！！」

そんな事をいい、姫は中ボスの腕を持ち、引きずるように廊下を移動した。

突き当たりまで行った所で、曲り、そして魔王の視野から消えた。

その後、それとなく中ボスに訊いても、苦笑いを浮かべながら、話をはぐらかすばかりで、まるで話にならなかった。

姫に直接訊こうとした。だが、返って来たのは“言葉”ではなく“拳”だった。

姫は魔王が疑問に思っていた事を話すと、一気に顔を紅潮させ、次の瞬間にも有無を言わす事無く、殴られた。

気がついた時には魔王は、王室ではなくその部屋の前である、廊下で寝そべっていた。

自分で考えても理由は分からず、聞こうものなら、気絶するまで

殴られる。考えようによつては口封じかもしれない。俺様はもしや触れてはいけない禁忌にでも触れているのだろうか？

やはり納得できない魔王は都合よく、自室へと来た妹にこの事を話した。

多少、話は端折りはしたが、言いたいことは伝わったと、確信している。

「……恋ね」

「鯉？」

「おにい……そういうベタなボケは要らないわ」

「すまんすまん。それで“恋”ってどういう事だ？ 姫が中ボスに惚れてでもいるのか？」

「きつとそうよ！ いいえ、そうに違いないわ！」

「いやいや、それは無いだろう」

「おにいの姫が寝取られる……姫をめぐり。魔王と中ボスの血を血で洗う、醜い泥沼の争い。」

そして、行きつく先には……魔王×中ボスが織り成す、主従関係を越えた禁断の愛！！

更に小ボスが加わり……ねえ、この先どうなちゃうのおにい！？」

「俺様に訊くな！！ どこまで妄想すれば気が済むのだお前は！？ それに元々俺様は姫のような貧乳女なんぞ好きではない！」

「へえ……そうなんだ……胸が大きな人が好きなんだ……。はあ……死ぬ？」

声音、更にはその恐ろしいセリフを聴けば、最早「誰だ！？」などと聞く必要もない。ヤツだ……いつの間にやらヤツが俺様の背後に……。

今回はタダではやられんぞ！ と心の中で意気込み、素早く振り

向くと、既に目の前まで距離を詰める姫。

何故か飛び上がり、その両足を魔王の腕に絡ませる「白か……」などと考えていると、次の瞬間には意識を失うかと思うほどの激痛が走る。

「うぎゃあああああああああッ!!」

「古代魔法! 腕ひしぎ逆十字固め!! 飛びつき付きの姫アレンジバージョンよ!!」

「普通にプロレス技じゃないか!! ぎゃああもう止めるおおおお!!」

物凄い勢いでスカートがまくれ上がっていたが、それを垣間見る余裕は魔王にはなく、ただひたすらに姫から与えられる痛みへの打ち回る事しかできなかった。

たっぷり五分間ほど技を掛け、満足した姫はようやく魔王を解放した。

「いい汗かいたわ」とうつすらと搔いた額の汗を腕で拭い、ソファに座る姫。

その隣には涼しい顔をしながら、我関せずと言わんばかりに妹はただBL本に視線を落としていた。

姫や妹は対照的に、魔王は下着まで汗でぐっしり。

通常では数秒と持たない関節技を五分も掛けられれば、滝のような汗も出ると言うものだ。

何度となく失神をし、そして痛みで再び覚醒。地獄のような痛みのループに魔王の精神はすり減るどころか、発狂寸前の域にすら達していた。

叫び声すら上げられぬほど体力を使い、次は声にならぬ声をかす

れた喉から発し、その次は声すら出なくなった喉に変わり、体中の筋肉が痙攣けいれんと言う形で痛みを表現した。

「『グロ注意』とか『15禁』のタグを付けるべきだったか——ガクッ」

ここですかさず『まおううつうつうつうつうつうつ！』と悲しみの叫びが聞こえてもいいだろう？ そんな期待をしながら、チラチラとソファーに居る二人の反応を窺うかがった。

「あつこれ美味しい」

「でしょ？ おにいは嫌いって言ってたけど、私は結構好きなのよね。しかも、カロリーも低いのよ」

チョコレートを食べながら意気投合する妹と姫。技を掛けられた時は痛みで、今は悲しみで涙が零れる。

「いや、あのさ。無視って酷くないか？」

「起きたのね」

「ねえおにいもう一回食べてみてよ。やっぱりおいしいわよこれ」
「そんな事よりも!!」

魔王はソファーに座る二名、特に姫の方を見つめると、今度こそは、と思い話した。

「お前最近変じゃないか？ いつも中ボスにべったりで。一体何を企んでる!？」

「た、企むって人聞きの悪い……。私は！ あれよ……。あのその……」

「モジモジしてる姫って予想以上の破壊力ね……。私の中の何かが目

覚めてしまいそうだわ」

「頼む！ これ以上覚醒しないでくれ」

「——うん。そうね。言うわ」

「おっあれだけ渋った割には男らしいな」

決意の意志を口にした姫だったが、やはり言いづらい事なのか、モジモジと口ごもっていた。

「その……常識……力って言うの？ それが分からないのよ……」
「はっ？」

「ほら……アンタも私を馬鹿にするんでしょ……」

「い、いや馬鹿にはしてない。常識が分からないって言うとなんか具体的には？」

「……例えば、……この前中ボスに教えてもらったのは……カタツムリの殻無しがナメクジだと思ってたわ」

「女の子なら別にそんなもんだろっ」

「あーその気持ちわかるわよ姫。私もそう思ってたから、無理矢理、殻からカタツムリ出したら死んだもの」

「あつごめんなさい……流石に私もそこまではしてないわ……」

「まああれだ。知ろうとする心意気は褒められる行いだ。俺様にもドンと訊くがいい」

「いざ、なんでも訊けって言われても。別に浮かばないのよね」

「おいにおにい。私こんな本持つてるよわ」

「おっ、何々。サルでもわかる常識クイズ。なんか一時期、えらくサルでもわかる シールズ出てたよな。まあいい。よしでは小学生編から行くぞ」

「……ええ、かかってきなさい！！」

「姫の目が本気よ」

昔のスポ根マンガとかなら、目に炎が宿っていそうなほど熱意が籠る姫。

やる気になった姫に答えるように魔王は問題を読み上げる。

「第一問。小学生低学年の算数だ。度数法だな懐かしい。『全方位角が360度?』●に当てはまる数字を言え。……うわっ簡単」

「ふふ、この程度簡単よ。答えは“365度”よ!」

「うわあああ“5度”増えた!! 1年——365日とこっちゃ
になってるのか!?

もう俺様が手におえるレヴェルじゃねえ!! 妹よ、パース」

「えっ!? ちょ、ちよっとおにい、本投げないでよ!?

仕方ないわね……じゃあ二問目。北極の動物と言えばホッキョクグマや、セイウチなどが有名ですが。

では、南極に住む動物を一つ上げなさい」

「うーん……ヒント頂戴!!」

「えっ!? まさかのヒント要求なの? うーとそうね……白と黒の色をしていて。ヨチヨチと二本足で歩く動物なんて有名なはずよ。よく水族館でもアイドル扱いしてるし」

「パトレイバー……いえ、違うわ!! 答えはクロスボーンガン。
ムX1ね!!」

「いねえよそんなもん!! 妹が言ったのはペンギンだ!! お前
だってペンギンくらいは知ってるだろう!!」

「えっペンギンって寒いところの動物でしょ?」

「おう、だから南極に居るんじゃないか」

魔王がそこまで言った所で姫は両目を固くつむり。片手でこめかみを抑えながら、もう片方の手で「ちよっと待って考えるから」と言い、熟考を始めた。

「納得できない……ねえ南極つて南国のさに向こう側だから。暖かいんじゃないの？」

┌
┌
.....
└
└

互いに黙る妹と魔王を見て姫もようやく焦りはじめ「えっ違うの!?」と狼狽した。

「お前。その格好で南極行つて来い……今は冬だからマイナス90度とか味わえるかもな」

「……ごめん」

自分がどれだけ愚かだったのか悟り。凹む姫。

魔王達も何とかフォローをしてあげたかったが、励ます言葉は何

一つ頭に浮かばなかった。

[illegible]

その後、中ボスと合流した魔王達は、姫に常識と言うものを一週間に渡り教え続け。姫も挫ける事無く問題を解き続けた。

「では問題！！ 円周率、小数点以下50桁まで答えよ」

8	π	7
3		
2	3	
7	.	
9	1	
5	4	
0	1	
2	5	
8	9	
8	2	
4	6	
1	5	
9	3	
7	5	
1	8	
6	9	
9	7	
3	9	
9	3	
9	2	
3	3	
7	8	
5	4	
1	6	
0	2	
7	6	
3	4	
3	3	

「よし！ 姫、正解だ」

「既に常識力のカテゴリーから外れているような気がします。様が本当に覚えるとは……一週間ほど前とは比べ物にならないほ

どの常識人ですね」

「問題！ 黒色火薬に必要な材料は？」

「硝酸カリウム。硫黄。木炭粉」

「流石だ。姫！！」

「えっへん！！」

「これが最後だ。汚名を返上するんだ！ では問題！！

北極の動物と言えばホッキョクグマや、セイウチなどが有名ですが。

では、南極に住む動物を一つ上げなさい」

「クロスボーンガ。ダムX1よ！！！！！！」

この問題だけはいくら教えても、治らなかった。

結論。南極には ガン。ムが生息している。

過去編第二話

過去編第二話

中ボスと共に魔界中心部に位置する——魔王城の前まで来ていた。

魔王は城を見上げる。

「いつ来ても、馬鹿でかい城だな。瞬間移動や、高速移動系の魔法が使え無ければ、到底辿りつけないな」

「ドラゴンで飛んでも三時間。徒歩なら四日は掛かりそうですね」

城自体の大きさも然る事ながら、人間界にある魔王城と比べれば、敷地面積だけでも三十倍、城の大きさ魔も五倍ほど違っていた。

そして、人属がこの場所に来た事は今まで一切無い。

伝説などで、魔王が勇者に倒されている場所である——魔王城と言うのは、人間界に出張っている城に過ぎない。

それは人間界を征服する為の足がかりの為に、便利上、人間界に建ててあるだけで、本来の魔王城と言うのは、魔界に存在していた。

魔界にある、この魔王城は落城どころか、人属は入った事すら無

い。

この魔王城を、魔族の本拠地として考えるのであれば、その魔王城を落城させていない事を考えると、

勇者は一度も魔族を屈服されたとは言えないだろう。

しかしながら、人間界に建設されている魔王城には、その時代最強の魔王が住んでいる事が多い事を考えれば、その魔王を倒せれば、イコール人間の勝ちとも考えられる。

「それにしても魔王様。瞬間移動の魔法を使わなくとも、送迎用のドラゴンに乗れば良かったのではないのですか？」

「あ？ ああ、その事か。」

三時間も空の上でただ、じっとしている事なんぞ、俺には出来んぞ？

それに試験前に、あのクソ親父とも話す事もあるからな」

魔王はそう言いながら、魔王城の扉を開いた。

「お待ちしておりました。本日試験にいらした、“魔王”様で宜しかったですか？」

扉を開け、数歩歩いた所で、突如、初老の男が現れた。

音も無く現れた男は見たところ執事バトラーと思える身なりだった。

燕尾服えんぴに身を包んだ男は、言葉少なく魔王達を客間へと案内した。

「セバス」、悪いがあのかのクソ親父を呼んできてくれないか？」

客間のソファ―に腰掛け、初老の男――執事を呼びとめそう言った。

執事は手に持っていた紅茶を魔王と中ボスの前に置き、「旦那様の事ですか？ すぐにお呼びいたします。しばしお待ちを」と言い残し去って行った。

「セバス」？ 魔王様。あの方のお名前をご存知で？」
「いや、知らん」

魔王の言葉に中ボスは怪訝な顔をした。

「知らんが、バトラーと言うのは元来。セバスチャンと相場が決っているだろ？ だから“セバス”だ」

「アニメや漫画の見過ぎかと思えますが……」

「まあいい、それよりもだ。この客間、他に勇者が四人来るにしては狭すぎないか？」

そう言いながら魔王は部屋を見渡した。

二人掛けのソファが二つ、その間にテーブルがあるだけで、その他は高そうな絵などの装飾品が飾られているだけだった。

元々中ボスは先ほどのバトラーと同じような立場のようなものなので、ソファアーに腰かけず、脇に立っている事を想定し、考えるとする。

そうすればソファアーには、魔王を座っているスペースを除く三人分の席が開く。

他に四人、魔王候補が来る事を考えると、どう考えても足りない。

「魔王様が床で、他の候補者達はソファアーに腰掛ける。それで帳尻はあいますね」

「俺も、候・補・者！！」

そんなくだらないやり取りをしていると、再び客間の扉が開かれた。

「まー君」！！ 久しぶりだね、元気だった？ パパが居なくても夜は眠れたかい？

そうだまー君！！ 今日パパと二人で一緒に寝よう！ 久しぶりだよパパと寝るのは？」

扉が開くと、先ほどのバトラーと共に、魔王の父である——元祖・魔王が現れた。

魔王継承試験 が行われるこんな日でも元祖・魔王——親父は、ヨレヨレのくたびれたスーツ姿だった。

魔王には、それぞれ礼服のような服があった。黒いマントに身を包む者が多く、他にも黒を基調とした甲冑などもあった。

しかし、親父が来ている服はどう見てもグレーのスーツ。こんな由緒ある式典にこのような姿で登場するなんて事、親父以外だったら処刑されてもおかしくはない。

だがしかし、どんな場違いな格好で親父が登場しようとも、それを咎める者はこの魔界には居ないが。

息子である魔王ですら、注意するのが億劫だが、他の人から見れば面倒だから注意をしない訳では無く、単に、恐れ多いのだろう。魔界では力のあるものが全て。その中で歴代最強である元祖・魔王に正面から何か言える者は限られている。

「クソ！！ 離れるクソ親父！！」

うっ！ 酒くせえぞ親父！ 式典前から酒飲んでやがったな！！」

魔王に抱きつき頬ずりする元祖・魔王。
傍から見てもあまり微笑ましい情景とは言えなかった。
何処からどう見ても酔っ払いに絡まれる一般人の構図だ。

全身で愛情をあらわす親父からようやく脱出する魔王。

残念そうに見つめる親父を無理やり向かいのソファーに座らせると、堰を切ったように魔王は話し始めた。

「それで親父。候補者はあと四人なんだろう？　ならこの部屋のような場所が何か所があるんだろう？
そこに他の候補者が居るのか？」

中ボスは「なるほど」と関心したような声を上げたが、魔王はさらに言葉を続ける。

「なら他の候補者の中に“アイツ”が居るのか？」

魔王の言葉に親父の表情が曇った。口淀むようにして、目線を彷徨わせていた。見るからに話したくないと言った顔つきだった。

「やはりいるのか……義兄が」
アニキ

「ああ、愚息は何故か何処からともなく現れたよ。
今回の試験を何処からか聞きつけたんだろうね」

魔王が“兄貴”と呼び、元祖・魔王である親父が“息子”と呼び親しんだ彼。

その昔、魔王がまだ幼く、元祖・魔王を義理の父とし、暮らし始めて日の浅い頃。

兄は、魔王継承試験に参加しようとした。

だがしかし、当時の魔王継承試験には“最低年齢十六歳以上”という項目が存在していた。

今でこそ、力があれば年齢なぞ不問としているが、当時は、『若輩者に“魔王”の仕事は務まらない』という昔からの因習いんしゅうが存在が、兄の試験への参加を許さなかった。

そんな古臭いしきたりで、力ある自分が魔王になれない事に彼は激怒した。

他の魔王が任期を終えるまで、ただ待っている事なんて彼にはできなかった。

彼は早く魔王という椅子に座りたかった。古臭い風習など嫌っている彼であつたが、魔王になり、実現したい事は他の歴代魔王と同じような内容だった。

そんな彼を焦らせたのは、一人の男の存在だった。

今ここにいる魔王自身が原因だった。

もし仮に、兄——彼がこの時の魔王継承試験で魔王の座に君臨できなければ、次の魔王継承試験の時には魔王。そう弟と争わなければならなかった。

決して彼は弟思いな兄ではなかった。ただ単に弟である、魔王がただひたすらに“脅威”だったのだ。

幼くして強大な魔力を体内に内包し。元祖・魔王ですら超える魔力値を誇り、生まれながらにして魔王の名を与えられは弟が。

元祖・魔王とは血のつながりが一切ない魔王が孤児になったには訳があった。

強大過ぎる魔力を幼い頃から持っていた魔王には、幼少時にはその力を操作するだけの技量が無かった。

そして、彼は実の親や、暮らしていた村すら巻き込むほどの魔力を爆発させた。

小さな町その爆発で死傷者は五百を超え、その人災は当時、一番世間を驚かせたニュースの一つだ。

しかし、その事件も、元祖・魔王や、その他の協力もあつてか、事件の真実を知る者は数少ない。

事件の当事者である魔王ですら、真実を知ったのはつい最近なのだ。

「息子……あの子が僕のところに直接参加の意思を伝えに来たときは驚いたよ。

なんせ“勘当”して、もう会うこともないと思っていたからね。

あれほどの不祥事を起こしても“夢”だけは捨てられないようだね」

前回の 魔王継承試験 への参加資格を持っていなかった兄は試験の当日。

魔王候補者全員に対して喧嘩を売るという前代未聞の行動に出た。

結果は——試験管含め、魔王候補者の全員死亡。

己が力を宣伝するには、最高の結果であつただろう。

そして確かに魔界は 力こそ全て

だがしかし、そんな数少ない“力ある者”だからこそ、その力は正しく使わなければならない。

兄が行った、理性無き獣のような暴力は、魔界最強にして、実に父の手によって終止符を打たれた。

そして、元祖・魔王を中心に、その沢山の者たちが責任を問われた。

この事件で一番の責任を問われたのは、元祖・魔王の親友であり、当時は現・魔王は、この事件を切っ掛けに失脚。

元・魔王として、今は魔界の相談役としての椅子に座っている。結果的に“魔王”の席はこの数年、誰が代わる訳でもなく、“空席”となっていた。

“魔王”が空席なことにより、人族が勢いづき、魔族の発言力が失われた。

そんな事態を重く見た元老院達は、新しい“魔王”を求めた。

「それにしても、よく元老院^{老害}達は兄貴の参加を許可したな」

魔王の言葉に、親父は「誰も許可はしていない」と短くいい、魔王も「どういう事だ？」とだけ言うと、次の言葉を待った。

「元老院達や、他の者たちに聞くまでも無く、許可なんて降りないさ。

現に、報告した今でも許可なんて下りて無いよ。だけどね、皆、彼^{グランドサタン}が怖いんだよ。

大魔王と呼ばれるほどの男の力が、その気になればアレは一人で戦争ができるほどの魔力だからね。逆らうのが怖いんだ。だから黙認するしかない」

「……親父が直接この試験に関わってる理由が、ようやく分かってきたな」

「そう、僕はただ彼が暴走した時に備えて呼ばれた、とい言ってもいい」

その言葉を最後に、あとは試験についての説明があり、それを終えたと試験会場へと向かった。

第二十一話『元祖・魔王降臨!?!』

第二十一話『元祖・魔王降臨!?!』

黒煙が辺りに立ち込め、姫は煙を浅く吸い込んだのか、少しだけ咳き込んだ。

煙の所為か、苦しそうになりながらも必死に^{まいた}瞼を開け、その双眼で“敵”を捉える。

魔族歴代最強と呼ばれた元祖・魔王。その男の姿がそこにはあった。

「ゲボツ、ゲボツ。これが……元祖・魔王の実力なの……?」

「あれこそが魔族。そして、その頂点であらせられる、魔王の本来の力です」

激痛で悲鳴を上げる身体を無理やり起こしながら、ひび割れた眼鏡を掛け直し、中ボスが答えた。

そのえんぴ服も煤^{すす}や土埃などで汚れ。生地自体も既にボロボロな状態だった。

目の前に現れた巨大過ぎる魔力の渦に臆したのか、姫は脅えながら半歩下がり「勝てない……!」

と呟き、身体^{わなな}の奥が戦慄くのを感じた。

歴代最強と呼ばれようと、全員で掛ければ勝てると予想してい

処にいるのよ？」

「王様から動かないと、部下がついてこないだろう？ ルルーシュなら分かってくれるもんねッ！！」

魔王はそう言いながら、キングを後方に下げた。

だが、そのキングはあえなく姫の狩り取られる結果となった。

ちなみに、このような展開が既に五回ほど行われていた。

「撃^うつていいのは、撃たれる覚悟のあるヤツだけ……」

「アンタの技量程度じゃ、何度やっても私のキングが討^うたれる事は無いわね」

「そうやって俺様の事を嘲笑^{あざわ}つていればいい！ 貴様のような“悪党”は必ずしや俺様が倒して見せる！！」

「……——現・魔王に“悪党”呼ばわりさせるとはね。じゃあ私は大悪党ね」

「やっと自覚できるようになって来たか」

「あゝ！？」

「すみません、誠心誠意心を込めた土下座しますから許して下さい」

姫が魔王の駒であるキングを握力だけで粉々にすると、それに臆した魔王はすぐさま土下座に移行した。

日に日に魔王の土下座のキレが増していたが、あまり褒められるような成長内容では無かった。

土下座をしている魔王の頭に、静かに粉々になったキングの粉を振りかける姫。

それが気になったのか、顔を上げた魔王に対して、姫は「誰が顔を上げていいと言った？」と満面の笑みで訊いた。

ドスの効いた声に、恐れ再び頭を地面にこすり付ける魔王。

そんな王室のドアが何者かによって開かれる。

「魔王様いらっしゃいますか？」

中ボスが問いかけると、魔王は嬉しそうに顔を上げた。

そして、姫が「顔を上げるなど言ったでしょ」と言いながら、渾身の力を手に込め、魔王に強制土下座させる。

その勢いで大理石の床がひび割れる。

当然魔王は苦痛に叫び声を小さくあげるが、それを「可哀想だ」「酷い」などと思ってくれる者はこの王室内には居なかった。

「お忙しいようですので、内容だけ伝えます」

中ボスの言葉に、魔王は地面に額を着けながら「ふあい」と承諾するように返事をした。

「本日午後から、以前より予定していた軍事演習の方を、開始致します。

今回の演習内容は以前説明しましたが、『一体多数』を想定した戦闘となっております。

もちろん私達は防衛、これは『多数側』ですね。

多数側には城内設備や城外設備の使用、更には魔王様直下の部下の使用も許可されています。

姫様が攻めて来た時より、数こそ劣りますが、実質的な戦力は十倍以上用意されており。

それを突破できる者となると魔族内でも極少数なので、その中から“一番戦闘力の高い者”が選ばれております」

中ボスの『“一番戦闘力の高い者”』という言葉に魔王は少しだけ顔を上げ、眉をピクリと動かした。

その瞬間を中ボスは見逃さなかった。

「魔王様はもう分かっているようですが。はい、ご想像の通りです。敵は、パパ上様。“元祖・魔王”様です」

その言葉に、魔王はガバツと身体を上げ、姫の制止を振り切ると、その足を司令室へと急がせた。

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

司令室には既に、小ボスと妹が席に就いていた。

それを確認すると、魔王は中央部に備え付けられている席に着き、全体を見渡した。

中ボスも魔王の隣に立つと、魔王の命令をじっと待った。

魔王も、姫が黙って定位置に座つたのを確認すると、口を開いた。

「魔王城の“全て”の戦力を急ぎチェックしろ」

小ボスと妹は短くアイコンタクトを行い、コンソールを叩く。
主に、情報担当を行っている小ボスと妹は元々相性がいいせいなのか、仕事が早い。

現に今、小ボスは使用できる城外設備をチェックし。妹は城内設備をチェックしていた。

中ボスもそれを手伝うようにして、目の前にあるコンソールで、新兵器含め、旧兵器のチェックをしていた。

「高密度荷電粒子砲。六機全て使用可能。」
マオウキャノン

それ以外にも、七五ミリ高射砲、百二十ミリ迫撃砲、近距離防空用地対空ミサイルの整備も万全です」

「城内トラップ、無人機銃 セントリーガンの動作確認完了」

小ボスの報告が終わる頃には、妹もそれに代わるようにして言った。

中ボスも魔王の方を向き、小さく頷き、全てのチェックが終了した事を伝えた。

「中ボス、クソ親——……パパ上と対峙した場合の、此方側の勝算はどの程度ある？」

チェックを終えた中ボスが魔王の方を向くと、何とも難しそうな顔をしながら、再びコンソールを叩き。

中央モニターを使って説明した。

「正面から、姫様や妹君。それ以外にも“本気”の小ボスを同時にぶつけたとしても、十分と持たないでしょう。」

私が入っても二十分ほど。城の戦力をフル活用しても五十分で落城でしょう。

やるとは思いますが、魔王様が“戦う気”になって下されば、勝つ事も可能ですか……」

「中ボス。俺様に期待するな。今の俺様にはなんの力も無い」

姫は中ボスの言葉に引っかけかりを覚えながら、他の皆の顔を窺^{うかが}った。

何を知っているのかは分からないが、姫以外の皆の顔は暗い。それは一体何に対してなのか、姫には分からなかった。

「センサーに反応あり！！ 魔王様！！」

悲鳴にも近い、高い声で小ボスが魔王に伝える。

魔王も声を張り上げながら「少し早いが、現刻より戦闘を開始する！！」と言い放ち、皆にけきを飛ばした。

「予定より早いですね……」

「いや、むしろ遅かったくらいだな」

「よし、まずは小手調べだ。 長距離攻撃を中心に。その後、小ボス&妹が尖兵として突撃してもらう。

無理はするな。時間稼ぎをしてくれば十分だ。

ネコはあれだ“寝てろ”」

「“寝テロ”！？ それはどんなテロ工作だ！？ 交通量の多い道路で寝るテロ行為か！？

遅れによるダイヤの乱れは深刻だな……それによって企業に著しくダメージを与えるのが目的か！？」

そんな一人で盛り上がるネコを放置し、中ボスは一步前にでると「何か秘策が？」といい、魔王はその言葉に対し、ニヤリと笑うだけだった。

[illegible]

五分後、王室にて魔王と姫、それに中ボスが待機していた。

「小ボス達が出て行ってから十分が立つわね……」

「さすがに演習だから、殺されはしないが。逃走はどうやら失敗したようだな」

魔王の言葉に姫も中ボスも暗い顔をした。

だが、魔王はそれを勇気付けるようにして声をかけた。

「三人でどれだけの時間持つか」

「十分持てば御の字ですね」

元祖・魔王の実力を知っている、魔王と中ボスだったが、相手の情報を知っているとするのは、通常であれば、有利に働く。

だがしかし、知っているだけに、二人の足は恐怖で竦んでいた。

刹那。爆発、轟音と共に扉が吹き飛んだ。

煙の中から、黒炎をまといながら歩く者が一人。

その姿を見て、魔王を除く二人が一步下がった。

「ッ!?　なんて魔力なの?!　私どころか、妹ちゃんの何十倍もあるじゃない!!」

恐れ戦き、おのの声を震わす姫。中ボスも同じような反応だった。

「魔王様……とても十分も時間稼ぎできそうにありませんよ?」

「まあ待つてろ……。——おい、クソ親——パパ上ッ!!」

「ん?　“まー君”かい!?　まー君なんだね!!」

会いたかったよ、まー君!　おいで!　パパがハグしてあげる」

黒炎がさつと散り、そこからヨレヨレの草臥れたスーツを着た男が現れた。

「……え?　あの冴えない刑事みたいな男が、魔界最強の王?」

ポカーンと口を開けながら指を指す姫。

魔王はそれに無言で頷き、中ボスも頷いた。

元祖・魔王は「まー君!!」叫びながら嬉しそうに魔王に歩み寄った。

「これでも喰らえッ!!」

魔王はそういいながら一つの本のようなものをパパ上に向かって投げた。

姫や中ボスはなんなのか分からず、ただそれを目で追い続けた。

「あれは！？ 僕とマー君の思い出が沢山詰まった大切な“写真”
！！」

まるでフリスビーを取ろうとする犬のように、パパ上は空を舞い、その両手でアルバムをキャッチした。

「はああん！！ かわいいよマー君！！」

見て！！ ほらこれ、初めてマー君が“2ちゃ。ねる”で書き込みをした時の写真だよ！！」

「どれだけ微妙なイベントでシャッター切ってるの！？」

日頃培った癖か、こんな時でもツツコミをする姫。

それが恥ずかしかったのか、姫はカアと顔を赤くしていた。

「悲しい性^{さが}だな。まあいい。中ボス！ 詠唱準備」

魔王が声を張らせ、中ボスにそういったが、すでに中ボスは目をつぶり、明らかに詠唱中といった状況だった。

「ねえ！ 本当にあの魔力に対抗できるの！？」

「できなきゃ“終わり”だ！！ とにかくそれまで時間を稼ぐぞ」

その言葉に姫は愛用の大鎌を構え。魔王も格闘の構えを取った。

「アンタって“得物”は無いの！？」

「魔力がほとんどないのはお前も分かってるだろう！！
だから柔道^{バリッ}のような体術しか頼るものはないのだ！！」

そんなやり取りをしているとパパ上はパタンとアルバムを閉じ、「

ふう」と満足そうに息を吐き、魔王達の方を見た。

「そういえば“演習”って言うってたよね？　じゃあパパもここは心を鬼にして戦っちゃうぞ〜」

やわらかい笑顔で微笑むパパ上だったが、その屈託のない笑顔で、心まで冷えるような感覚を魔王達は感じた。

「それで、まー君とそっちの姫君。どっちが僕と相手をしてくれるのかな？」

魔王はだまつて一歩前に出た。その行動をみて、パパ上は嬉しそうに微笑み、懐から何やら袋を取り出した。

「おいクソ親父。戦闘前になにガサガサしてるんだ？」

「も〜パパ上って呼びなさいっていつも言うてるでしょ？　まあそれよりも、今日はおみあげを買ってきたんだよ」

「あ？　おみあげ？　なんだ温泉まんじゅうとかならいらんぞ？」

「ふふふ、十一月二十五日　とだけ言えば、勘のいい、まー君ならわかるよね？」

パパ上の言葉に魔王の眉がピクリと反応する。

その反応を見て、パパ上はニヤリと笑い。袋からA4サイズほどの箱を取り出した。

魔王は箱を見た瞬間、目の色が変わった。

そして。

「パパ上。何なりとご命令ください」

元祖・魔王の前で跪くと、頭を垂れ。抵抗の意志がない事を示す。

「（寝返った!!!）」「」

姫や中ボスが呆氣に取られる。

しかし、魔王はそんな事を気にする様子はなく、一心にパパ上が持っている 新作ギャルゲ の為に媚を売っていた。

「まー君は、素直だね」

パパ上は上機嫌になりながら、魔王の手にギャルゲの箱を渡した。その瞬間。

「馬鹿め!! ギャルゲさえ手に入れば、親父なんか媚びへつらう理由なんかない! ザマアみやがれ!」

「あつまー君、ディスクは僕の手元にあるよ」

サッ

「申し訳ございません、先ほどの行いは、この愚息めの気がおかしかっただけの事と思い。」

パパ上様の寛大なお心で許していただけると……」

「まー君は、ほんとに手のかかる子だね」

「てへ」

「……………頭痛くなってきたわ」

「小者臭がここまで香ってきますね……………あそこまでヘタレだと、逆に潔さすら感じます」

「というか、その“演習”って、魔王 を討取られたら負けじゃないの」

「はあ」

[illegible]

ジが握られていた。

「最初のアレと言いますと？」

「中ボスとか姫がぼこぼこにやられてた描写があつたアレだよ」

中ボスにそういうと他の皆もあゝといま氣がついたと言わんばかりに声を上げた。

「盛り上げるための演出つてやつじゃない。どこから出てきたかは知らないし興味もないけど」

「まあ姫が言つとおり、別に俺様もどうだっていいけどな。投げっぱなしの演出や回収予定のないフラグなんてのはエロゲには付き物だし」

それよりもだ、と魔王は言いながら、自分の後方にいる相手に怒鳴り声をあげた。

「親父！！ 俺様の頭を執拗に撫でるのを止める！！

それと撫でた手の匂いを嗅いでうつとりするのもやめる氣色悪い！！」

演習が終わつてからというもの、パパ上はずっと魔王に抱き着きながら、頭をなで続けていた。

皆が席についているにも関わらず、自分だけ席にも座れず、立ちっぱなしであつた。

「舐めてるだけで最高なんだ！！」

「最高に気持ち悪い笑顔で、最悪の事を口走りやがったよこの親は！！」

踵でパパ上の靴を必死に踏みつける魔王。^{かかと}

しかし、そんな抵抗もさらに元祖・魔王を喜ばせるだけで一向に効果はなかった。

「それで、親父はいつ帰るんだ？ 親父だって暇な身分じゃないだろ？」

先ほどの怒り心頭で元祖・魔王に攻撃をしていたとは思えないほど涼やかな顔で魔王は問う。

そんな表情にパパ上も真剣に答える。

「一週間はここに居るよ。元・魔王にもそう伝えてあるし、しばらくは内政も安定してるだろうしね」

「いや、ほんと帰れよ……」

「十二月十七日（ボソッ）」

「どうぞ心行くまで城に居てください愛しのパパ上よ……！」

（また買収された……）

そんなこんなで、元祖・魔王。臨時滞在決定！！

第二十一話 『元祖・魔王降臨!？』 (後書き)

前々から話には出ていた軍事演習……過去編が進んだので、この夕イミングで元祖・魔王登場です。

第二十二話『妹とラブラブトーク!?』

第二十二話『妹とラブラブトーク!?』

「突然だけど、私の出番が極端に少ないわ!」
「あ?」

王室で魔王は八つ橋を食べながらモンハンをプレイしていた。

「どう考えても『新・キャラ登場!?!』話しの回しかまとめに出番がないわ、その回ですら、セリフが少ない!」
「そんな事……」

反論をしようと頭の中で妹の出番を検索するが、いまいち反論できる素材は見つからなかった、魔王の検索^{サーチ}エンジンはG。o。g。l。eです。

うわっ! 全然隠せてない気がする!

「だからおにいッ!」

妹は魔王に指を指すと

「今日は私と喋る話しにしないさい、今回のタイトルは『妹とラブラブトーク!?』ね」

内心、結構前にやったタイトルに酷似してるじゃないか、と思いながらも、反論はしないでおいた。

「では早速、——ゴホン、おにい、今日は朝食は何を食べた？」

「お前と一緒に住んでいるんだ。同じに決ってるだろう」

「……………」

「……………」

間が持たない！！ エマージェンシー、エマージェンシー！ 我増援求む！ 至急増援をッ！

——第二十二話『妹とラブラブトーク！？』開始から一分も持たなかった。

「おにいからも喋りなさいよ！」

「そんな事も言われてもな……………」

妹は魔王が食べている八つ橋を見ながら何かを閃いた顔をした。

「おにいには京都弁を喋る女性はどう思う！」

「どうも思わん、——あッ！」

「えっ何？ 興味あるの！？」

魔王はP.O.2のディスクを妹の前に出し、得意げな顔で言った。

「モン。ターハンタードスどす」

「おにい、アンタ京都人に殴られても文句言えないわよ」

……………ごめんなさい、京都の民よ……………調子に乗りました。

「それよりおにい」

「なんだ？」

「いつもはぐらかして教えてくれなかったけど、おにいって結局のところ、タチ？ ネコ？ リバ？ どっちなの？」

「唐突に何を言うかと思ったら……俺様はどこから突っ込めばいいんだ？」

「『突っ込む』！？ まさかのバリタチ宣言？」

「うつつ、腐女子モードの妹と話すど頭が痛くなるな……。俺は異性愛者だ、BLゲームもゲームとしてはやるが、けして行為自体に興味があるわけではない。それに俺はほのぼのしたゲームの方が好きだ」

「ほのぼのレ。プ……（ボソッ）」

——我が妹ながら、そろそろ殴りたくなってきた……。

「ねえねえ、おにい。それよりBLの話しましょうよ」

あれ？ もう既にBLの話しかと思っていたけど、違っのか……。

「まあ、内容によるが、別に構わんぞ」

「私ね、おいにノンケ攻めの中ボス襲い受がいいと思うの」

「——いやいや、どちらかと言えば、中ボス下克上攻め（げくじょう）の魔王ノンケ受だろう。」

——ッじゃなああい！ どうして俺が自分のCP（カップリング）を考えねばならんッ！——

クソッ腐ったフィルターを通せばどんな物でも、総て腐女子の餌^え食^{じき}になつてしまう。

ちなみに妹の格言は『我が邪眼を持つてすれば、万物、それ総てB L』だ。

「えーゴッホン。まあいい。それで、お前はどんな話を話したいんだ？」

「私の可愛らしさをみんなに伝えたいのよ」

「小さい。甘党。発禁ゲームを買えないどころか、ランドセルを背負えば小学生すら通じるほど幼い。

おっ、全国のお前ら大歓喜！！」

「おにい、誰に言つてるのよ？」

冷めた目でこっちを見ている妹に魔王は一向に凹む様子はなく、淡々と話を続けた。

最近の魔王の打たれ強さと言つたら、日本の国債くらい信頼があると云われているほどだ。

「けどなあ……お前の最大の短所はB L好きだと俺様は思つぞ。いやB Lがいけないわけじゃない。

ただ……俺様が言つのもあれだが、やはり世間の目は冷たいものだ」

「B Lが貴方たちに悪さをしたと言つての……」

「中ボスには悪さをしてると思つぞ」

「でもねおにい。やっぱり短所というか……——何かしらの“コンプレックス”とかあつた方が人は、共感を抱き、感情移入とやらができる気がするのよ」

「例えば？」

「姫で言えば——“貧乳”ね」

「ああ、確かに——ッ！？ 殺気！！ 秘儀、変わり身の術！！」

突然現れた大きな気を前に、魔王はすぐさま迎撃態勢に移る。
座っていた妹の後ろに隠れると、“気”の発信源を窺った。

「くっ、妹ちゃんを盾にするなんて卑怯ね！！」

「力を誇示し、他人を屈服させようとするお前の方がよっぽど卑怯だ！！」

それにあれだ！！ 『「貧乳」』 って言っただの俺様ではない！！
俺様を殴ると言うのなら、納得のいく説明を要求する！！」

「妹ちゃんの言葉に、アンタは『確かに』 って同意したわよね？」

「“確かに”！！」

「まっ……いいわ……」

何故かため息を吐き、先ほどの阿修羅のような殺気とは裏腹に、冷めた目で魔王と妹のいる方へ歩み寄り、テレビの前に腰掛ける。

「どうせ私のコンプレックスは“貧乳”よ……——だったら！！」

静かに座ったかと思ったら、今度は勢いよく立ち上がり話す。

「だったら、胸が大きすぎる事がコンプレックスでもいいじゃない！！」

巨乳の姫……細い体にデカすぎる胸……。うーんイマイチ。

「今失礼な事考えなかった？」

「ニュータイプがお前は！？」

「やっぱり考えてたのね！ ……まあ自分でも嫌になるくらい胸がデカくなるくらいなら、このままで良いけど……」

落胆しながらも「それよりも」と姫は言いながら皆の方を向いた。

「一体何の話してたの？」

「ああ、人にはやっぱり短所やコンプレックスがあった方が映える
と話だ。たとえば姫はあれだ……」

「“貧乳”でしょ……もういいわよ好きなだけ“ネタ”にしなさい」
「おにい、姫が好きなだけ“ズリネタ”にしても良いって。よかつ
たわね」

「お前のせいで姫が痴女宣言をしたみたいに聞こえるじゃないか」

魔王達の会話に付いて行けない姫だったが、特に気に留めた様子
もなく、話を続けた。

「?? まあ何の話しか分からないけど、でも妹ちゃんだって貧乳
じゃない？」

「まあ妹はあれだろ。もともと身長もなく真正正銘のロリっ子な訳
だから、胸があるとかむしろコンプレックスになりえるだろ」

「そうよね……」

「その点、俺様は完璧だな。コンプレックスなんて何一つない！！
いやコンプレックスが無い事がコンプレックスかな」

「本気でうざい」

「おにいってコンプレックスって言うか短所だらけじゃない？」

例えば『二人組み作って』って言われると先生と組むタイプで
しょ？」

「嗚呼……、幼き頃のトラウマが甦って……。そうあれは小学校の
とき……俺様が外宇宙で鬼ごっこをした時の——」

「何かスイッチ入っちゃった」

「そういえば妹ちゃんって何でコイツの部屋にいるの？ 何か用があつたの？」

「ああ、すっかり忘れてたわ。あのね、私の出番が少ないの」

姫は腕組みをしながら、必死に妹の出番頻度を思い描く。

そして、熟考の後。結論に至ったのか、手のひらに握りこぶしでポンと叩き話した。

「絡みづらい!!」

「納得!!」

というわけで、『絡みづらい』と思われる部分と取り除いてみる事にした魔王達。

「よし今から自分が思う理想の 妹 を演じてみる!!」

妹に指を差し。妹もやる気満々で演技を始めた。

そして妹はおもむろに魔王のタンスを漁り、そこから下着を出すと一度廊下へと出た。

ノックの音が鳴り、魔王はすかさず返事をする、おずおずと扉を開け。

顔を真っ赤に上気させながら魔王の方へと歩み寄り。

「おにい……あのね……おにいの下着。洗つといたから!!」

そういつと脱兎の如くスピードでもと来た道に戻っていった。

「……この下着を“洗ったのも”“畳んだのも”“仕舞ったのも”

全てが全て俺なんだけどな……………」

結局妹は今のままが一番となってしまった。

「はあ…………。男子校に通いたいなあ……………」

第二十二話『妹とラブラブトーク!?!』 (後書き)

妹の話を書こうとすると何かイマイチになってしまふ。
やはり絡みづらいつより、書きづらいようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3170u/>

姫の従者は魔王様！？

2011年12月2日17時58分発行